

京都府遺跡調査概報

第 3 冊

1. 広 隆 寺 跡
2. 法 成 寺 跡
3. 平安京跡左京北辺二坊
4. 長岡京跡(右京第76次)
5. 長岡京跡(右京第78次)
6. 長岡京跡(右京第79次)
7. 長岡京跡(右京第83次)
8. 長岡京跡(右京第84次)
9. 長岡京跡(右京第87次)
10. 長岡京跡(左京第83次)

1 9 8 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和56年度は34件の調査を受託しました。これらの発掘調査はいずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されてはいないはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

当調査研究センターでは、遺跡の保存のためのあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は、正式の調査報告としてまとめる前に年度ごとに調査結果の概要を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎天の下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって、これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 広隆寺跡 2. 法成寺跡 3. 平安京跡左京北辺二坊 4. 長岡京跡(右京第76次)
 5. 長岡京跡(右京第78次) 6. 長岡京跡(右京第79次) 7. 長岡京跡(右京第83次)
 8. 長岡京跡(右京第84次) 9. 長岡京跡(右京第87次) 10. 長岡京跡(左京第83次)

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1 広 隆 寺 跡	京都市右京区太秦蜂ヶ丘	昭56. 7. 13 } 8. 20 昭56. 昭57. 1. 12 } 3. 12 昭57.	京都府警察本部	石尾 政信
2 法 成 寺 跡	京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町	昭56. 7. 31 } 10. 14 昭56.	京都府立医科大学	小泉 信吾
3 平安京跡左京北 辺二坊	京都市上京区中立売小川東 入ル	昭56. 9. 8 } 10. 30 昭56.	京都府福祉課	竹井 治雄
4 長 岡 京 跡 (右京第76次)	長岡京市今里	昭56. 6. 5 } 7. 25 昭56.	京都府土地開発公社	山口 博
5 長 岡 京 跡 (右京第78次)	長岡京市井ノ内朝日寺	昭56. 8. 3 } 8. 18 昭56.	京都府教育委員会	山口 博
6 長 岡 京 跡 (右京第79次)	長岡京市友岡	昭56. 8. 19 } 8. 31 昭56.	同 上	山口 博
7 長 岡 京 跡 (右京第83次)	長岡京市長岡、今里	昭56. 10. 26 } 3. 25 昭57.	長岡京市	山口 博
8 長 岡 京 跡 (右京第84次)	長岡京市今里	昭56. 11. 11 } 12. 26 昭56.	京都府乙訓土木工営 所	石尾 政信
9 長 岡 京 跡 (右京第87次)	乙訓郡大山崎町下植野	昭56. 11. 15 } 12. 9 昭56.	同 上	竹井 治雄
10 長 岡 京 跡 (左京第83次)	向日市上植野字南淀井 長岡京市馬場字北石ヶ町	昭57. 2. 8 } 2. 15 昭57.	建設省	竹井 治雄

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1	広隆寺跡発掘調査概要	1
2	法成寺跡立会調査概要	14
3	平安京跡左京北辺二坊発掘調査概要	17
4	長岡京跡右京第76次発掘調査概要	31
5	長岡京跡右京第78次発掘調査概要	40
6	長岡京跡右京第79次発掘調査概要	44
7	長岡京跡右京第83次発掘調査概要	47
8	長岡京跡右京第84次発掘調査概要	61
9	長岡京跡右京第87次発掘調査概要	69
10	長岡京跡左京第83次発掘調査概要	76

挿 図 目 次

広 隆 寺 跡

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	調査地周辺地形図	3
第 3 図	A 地区遺構平面図・断面図	5
第 4 図	石敷土塋 S K 02 平面図・断面図	6
第 5 図	A 地区出土遺物実測図・拓影	8
第 6 図	石敷土塋 S K 02 出土石製硯実測図	10
第 7 図	梵鐘鑄造跡 S K 22 実測図・断面図	11

法 成 寺 跡

第 8 図	調査地位置図	14
第 9 図	調査トレンチ平面図	15

平安京跡左京北辺二坊

第 10 図	調査地位置図	17
第 11 図	トレンチ北壁断面図	18
第 12 図	中央セクション断面図	19
第 13 図	トレンチ全体遺構図	20
第 14 図	S X 04 石室平面実測図	21
第 15 図	土塋 S K 15 平面実測図	21
第 16 図	出土遺物実測図	23
第 17 図	金箔瓦拓影及び実測図	25
第 18 図	金箔瓦拓影及び実測図	27

長岡京跡の発掘調査概要

第 19 図	長岡京跡関係調査地位置図	29
--------	--------------	----

長 岡 京 跡 (右京第76次)

第 20 図	調査地位置図	31
第 21 図	調査地平面図	32
第 22 図	トレンチ北壁土層図	33

第 23 図	S D7606実測図	34
第 24 図	S B7609実測図	35
第 25 図	出土遺物実測図	37
長岡京跡（右京第78次）		
第 26 図	調査地位置図	40
第 27 図	調査地平面図	41
第 28 図	右京第44次・78次調査位置関係図	42
長岡京跡（右京第79次）		
第 29 図	調査地位置図	44
第 30 図	調査地平面図	45
長岡京跡（右京第83次）		
第 31 図	調査地位置図	48
第 32 図	トレンチ位置図	50
第 33 図	Aトレンチ平面図	51
第 34 図	Bトレンチ平面図	52
第 35 図	Cトレンチ平面図	53
第 36 図	Dトレンチ平面図	54
第 37 図	Eトレンチ平面図	55
第 38 図	Fトレンチ平面略測図	56
第 39 図	Hトレンチ平面略測図	57
第 40 図	出土遺物実測図	58
長岡京跡（右京第84次）		
第 41 図	調査地位置図	61
第 42 図	調査地平面図	62
第 43 図	遺構平面図・北トレンチ（北周濠）	63
第 44 図	遺構平面図・北トレンチ南部（墳丘部）	64
第 45 図	遺構平面図・中央トレンチ（南周濠）	65
第 46 図	遺構平面図・南トレンチ	65
第 47 図	出土遺物実測図	66
第 48 図	埴輪実測図	67

長岡京跡（右京第87次）

第 49 図	調査地位置図	69
第 50 図	A地区北壁断面実測図 竪穴住居（部分）	72
第 51 図	B地区南壁断面実測図	72
第 52 図	A地区遺構平面実測図	73
第 53 図	Bトレンチ落ち込み平面実測図	73
第 54 図	出土遺物実測図	74

長岡京跡（左京第83次）

第 55 図	調査地位置図	76
第 56 図	調査区位置図	77
第 57 図	調査区No. 3 東壁断面図	79
第 58 図	調査区No. 3 出土土器	80
第 59 図	調査区No. 13・No. 16 断面図	82

図 版 目 次

広 隆 寺 跡

- 図版第1 (1)調査地全景 1回目(A地区)(西から)
(2)調査地全景 1回目(A地区)(東から)
- 図版第2 (1)溝SD01と石敷土壙SK02(東から) (2)石敷土壙SK02(南から)
- 図版第3 (1)土壙SK03(西から) (2)土壙・小土壙SK07~SK10(南から)
- 図版第4 (1)土壙SK04~SK06(南から) (2)土壙SK05北壁
- 図版第5 (1)北壁(北東角) (2)西壁(北西角)
- 図版第6 (1)調査地全景 2回目(B地区)(東から)
(2)調査地全景 2回目(B地区)(西から)
- 図版第7 (1)中央拡張部土壙SK13(西から)
(2)東部拡張部鑄造遺構SK22(西から)
- 図版第8 (1)鑄造遺構SK22(西から) (2)鑄造遺構梵鐘鑄土台(南から)
- 図版第9 (1)溝SD01遺物出土状況 (2)溝SD01遺物出土状況
(3)土壙SK03遺物出土状況 (4)土壙SK03遺物出土状況
- 図版第10 (1)土壙SK03遺物出土状況 (2)石敷土壙SK02の底に敷かれた軒丸瓦
(3)土壙SK13遺物出土状況 (4)土壙SK13下層遺物出土状況
- 図版第11 出土遺物

平安京跡左京北辺二坊

- 図版第12 (1)トレンチ全景(東から) (2)SX11(北から)
- 図版第13 (1)落ち込み遺構及び土壙墓群(東から) (2)土壙墓SK15(南から)
- 図版第14 (1)石室(北から) (2)石室(東から)
- 図版第15 落ち込み遺構出土金箔瓦
- 図版第16 出土遺物

長岡京跡(右京第76次)

- 図版第17 (1)上層遺構検出状況(東から) (2)上層遺構検出状況(西から)
- 図版第18 (1)下層遺構検出状況(東から) (2)下層遺構検出状況(西から)

- 図版第19 (1)S D7606 (東から) (2)S D7606 (北から)
図版第20 (1)S B7609 (西から) (2)遺物出土状況 (灰色砂礫層)
(3)遺物出土状況 (灰色砂層)

図版第21 出土遺物

長岡京跡 (右京第78次)

- 図版第22 (1)調査地全景 (南から) (2)トレンチ全景 (西から)
図版第23 (1)トレンチ全景 (南から) (2)トレンチ南壁断面

長岡京跡 (右京第79次)

- 図版第24 (1)調査地全景 (北東から) (2)トレンチ全景 (北から)
図版第25 (1)トレンチ全景 (西から) (2)トレンチ南壁断面

長岡京跡 (右京第83次)

- 図版第26 (1)調査地全景 (北西から) (2)Aトレンチ全景 (北から)
図版第27 (1)拡張後Aトレンチ全景 (南から) (2)拡張後Aトレンチ全景 (北から)
図版第28 (1)Bトレンチ全景 (北から)
(2)Bトレンチ S D8315 完掘後状況 (北から)
図版第29 (1)拡張後Bトレンチ全景 (北から) (2)Bトレンチ拡張部 (西から)
図版第30 (1)Cトレンチ全景 (南から) (2)S K8323 (西から)
図版第31 (1)Dトレンチ全景 (北から) (2)Dトレンチ全景 (南から)
図版第32 (1)Eトレンチ全景 (北から) (2)S E8332 (西から)
図版第33 (1)Fトレンチ全景 (北から) (2)Fトレンチ全景 (南から)
図版第34 (1)Gトレンチ全景 (西から) (2)Gトレンチ全景 (南から)
図版第35 (1)Hトレンチ全景 (北から) (2)Hトレンチ全景 (南から)
図版第36 出土遺物

長岡京跡 (右京第84次)

- 図版第37 (1)北トレンチ北端南北溝 S D8401 (北から)
(2)南トレンチ南北溝 S D8402 (北から)
図版第38 (1)今里車塚古墳 周濠 S D1288 (北から)
(2)今里車塚古墳 周濠 S D1288 (南から)
図版第39 (1)今里車塚古墳くびれ部・周濠 S D1278 全景 (北から)
(2)今里車塚古墳墳丘部 (南から)

- 図版第40 (1)今里車塚古墳くびれ部（北から）手前は柱根及び転落石，上は近代溝・杭列
と井戸 S E8404
(2)今里車塚古墳周濠 S D1288北端（北から）
- 図版第41 (1)今里車塚古墳葺石及び転落石（南西から）
(2)今里車塚古墳葺石及び転落石（北東から）
- 図版第42 (1)今里車塚古墳くびれ部の柱根No.11 と転落石
(2)今里車塚古墳 周濠 S D1288 北端の東壁
- 図版第43 (1)南トレンチ西壁断割 (2)南トレンチ西壁断割
- 図版第44 (1)今里車塚古墳前方部断面と柱根No.12
(2)今里車塚古墳柱根No.12 と盾型木製品検出状況
- 図版第45 (1)柱根No.11 検出状況（東から） (2)柱根No.10 検出状況（北から）
- 図版第46 (1)南周濠 S D1278 上層の近代溝（北から）
(2)柱根No.12 と盾形木製品（北から）
- 図版第47 (1)遺物出土状況 周濠 S D1288 上層 (2)遺物出土状況 周濠 S D1278 下層
(3)転落石の間の遺物出土状況 (4)転落石の間の遺物出土状況

長岡京跡（右京第87次）

- 図版第48 (1)A地区全景（西から） (2)A地区堅穴住居内遺物出土状況（北から）
- 図版第49 (1)A地区堅穴住居内遺物出土状況（北から）
(2)B地区落ち込み状況（東から）
- 図版第50 出土遺物

長岡京跡（左京第83次）

- 図版第51 (1)調査地（南から） (2)調査区No.3（南から）
- 図版第52 (1)調査区No.3 断面（西から） (2)青灰色粘質土出土遺物

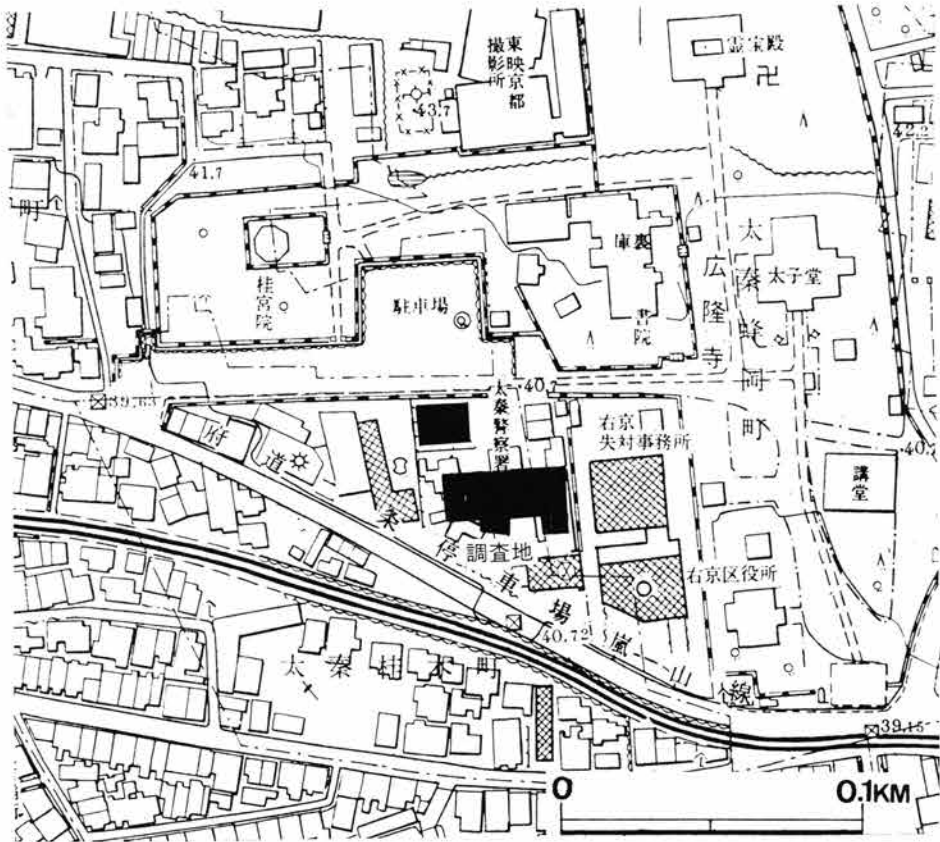


1. 広隆寺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都市右京区太秦蜂ヶ岡31に所在する太秦警察署の老朽庁舎の撤去・改築が昭和56・57年度事業として計画されたことから、その事前調査として実施されたものである。

広隆寺は、蜂岡寺・秦寺・秦公寺・葛野寺ともいわれ、『日本書紀』の記載によれば、推古天皇11年（603）に建立された山城最古の寺院のひとつである。また同時に法隆寺・四天王寺等と共に聖徳太子建立の日本七大寺の一つという伝承を持ち、国宝第1号弥勒菩薩半跏思惟像をはじめとする多数の国宝・重要文化財を所蔵する。



第1図 調査地位置図

当調査対象地は、広隆寺の国宝桂宮院（八角円堂）の南東約60m、楼門と講堂の中軸線から約90m西の地点に位置し、北は広隆寺駐車場、東は右京区役所に、南は三条通に接する東西約55m、南北長辺約80m・短辺45mの台形状の敷地で、面積は約3500㎡ある。

遺跡調査にあたって、京都府教育委員会の指導のもと、京都府警察本部と当調査研究センターとの間で、調査費・期間等に関して協議を行い、昭和56年7月13日から8月20日の期間に1回目（A地区）の調査を、庁舎撤去後の昭和57年1月12日から3月12日の期間に2回目（B地区）の調査を行った。現地調査の際、国土座標の測量を、東洋航空測量株式会社に委託した。また、国土座標の設置を心よく承諾して下さった広隆寺・京都中央信用金庫をはじめ、現地調査期間中及び資料整理に関して、御指導・御協力を賜った人々に記して感謝したい。

当調査研究センターが調査主体となって発掘調査を担当した。現地調査は、調査課調査員長谷川 達・久保哲正・石尾政信・小山雅人が担当し、全期間を通し、主に石尾政信が担当した。

調査協力 京都市文化観光局文化財保護課・京都市埋蔵文化財調査センター・京都市埋蔵文化財研究所・太秦警察署・高橋鋳物工場・岩澤の梵鐘株式会社・吉村正親・百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)・泉 拓良・清水芳裕・五十川伸矢(京都大学埋蔵文化財研究センター)・林 博通(滋賀県教育庁文化財保護課)

調査補助員・整理員として下記の諸氏の参加協力があった。

橋本 稔	小熊 秀明	高島 利洋	井出英二郎	駒野 博信	長谷川久洋
寺下 信子	岡 浩美	伊藤 悦子	中川 裕子	川西 康義	森 一九
相沢 博己	後藤 正士	信部 康弘	内藤 清和	平田 克幸	山本 和夫
横山 知行	田中 弘	水野 春樹	福富 仁	小寺みゆき	稲岡知江子
藤井 理絵	木戸 裕美	小川志津香	竹原 京子	小塩 礼子	長谷川陶子
寺升 初代	小山みのり	江田恵美子	他		

本報告書の執筆・編集は、石尾政信が担当した。

2. 調査概要

(1) 調査経過

今回の調査地は、先に記したように広隆寺に接し、講堂と楼門を結ぶ中軸線から西へ約90～140mの地点である。南接する三条通は、平行して通る京福電鉄嵐山線・大映通との間に



第2図 調査地周辺地形図

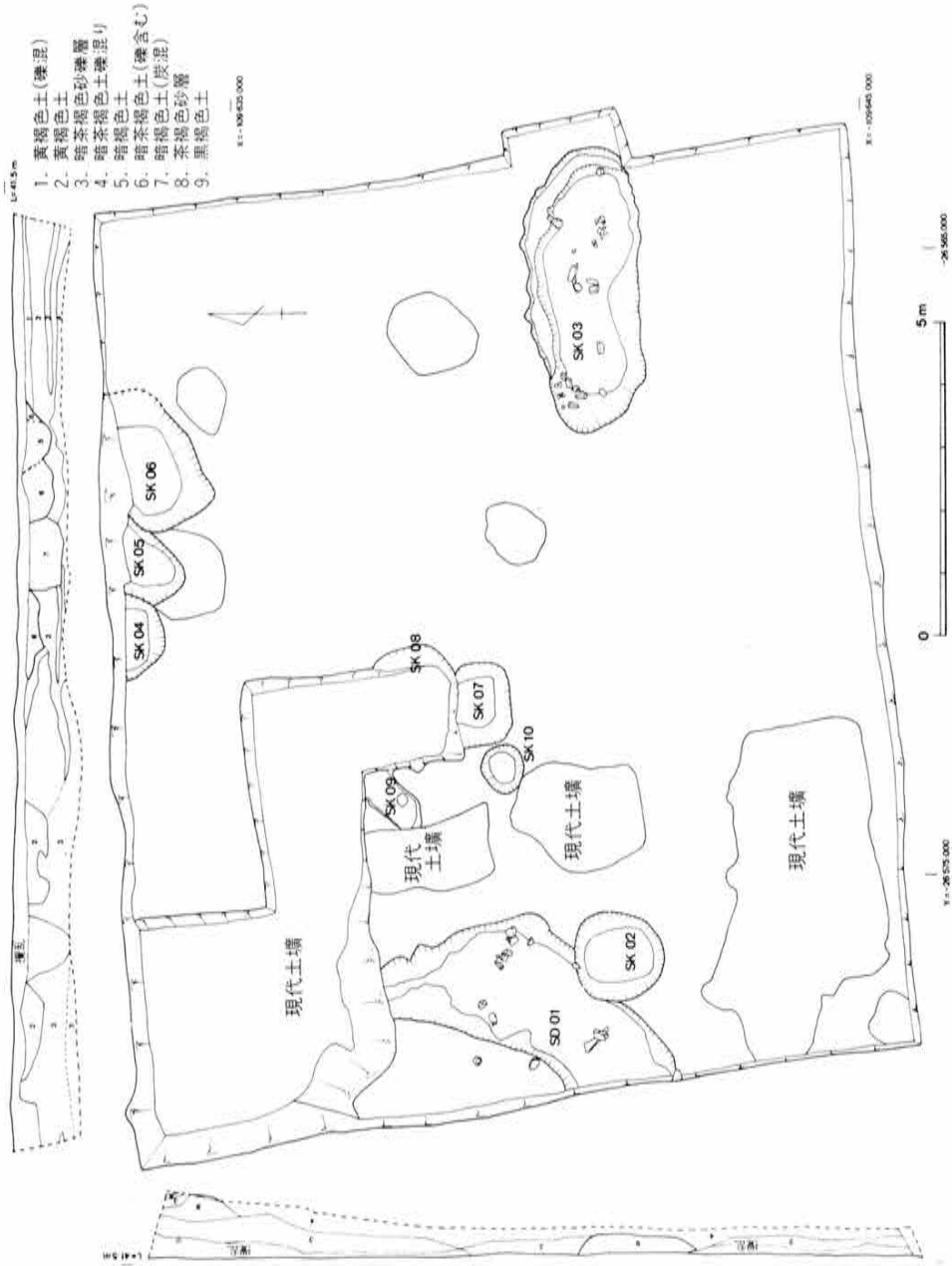
2m前後の段差があり、段丘上に位置しているごとくにみえる。広隆寺境内と本調査地は、ほとんど同じ高さである。広隆寺境内・旧境内の発掘調査は、過去に幾度となく行われており、数多くの遺構・遺物が発見されているにもかかわらず、伽藍配置が明らかになる資料は見つかっていない。本調査地東側に隣接する右京区役所の改築工事に伴う発掘調査で築地跡(注1)と多数の瓦だまりが検出されており、今調査に於いて、それらの関連遺構の検出に期待がもたれた。

1回目A地区の調査は、敷地北西隅の署長公舎建設予定地に、12m×15mのトレンチを設定しコンクリート・栗石・表土を重機で掘削した後、人力で掘り下げた。表土の下は、いわゆる地山面とおもわれる黄褐色土・同礫混じり層及び砂礫層となっている。この地山面で、トレンチ西端で弧を描く様に曲がる溝(SD01)と、この溝を切り込んだ円形の石敷土壇(SK02)、東端で長円形の土壇(SK03)、北端で円形土壇3か所を検出した。他に、中央部で、現代土壇によって切られた小土壇3か所とピット状の小土壇を検出した。これらの遺構は、暗褐色・暗茶褐色の埋土で、炭を含むものもある。

2回目の調査は、敷地中央部の新庁舎建設予定地に、40m×15mのトレンチを設定し重機によって表土・攪乱層の掘削を行った。トレンチ内は、警察署旧庁舎・道場・元車庫をはじめ、昭和3年2月7日に火災で焼けた記録の残る旧太泰小学校の校舎等の建物基礎や、それに付属する溝・排水溝による攪乱が著しく、遺構の残り方は非常に悪い。トレンチ西部において、改葬骨を納めた甕2基、及び中に小壺を納めた同様な甕が発見された。トレンチ内では、数か所のピット及び小土壇が検出されているが、それらの関連については、現在のところ不明である。トレンチ南側の中央部で土器だまり(SK13)が、東端で北東―南西に延びる溝(SD16)が検出されたので、各々その延長部分を検出するために南に拡張した。土器だまり(SK13)の下層で、飛鳥時代の軒丸瓦を含む瓦だまりが検出された。溝(SD16)の南隣で、一辺が2.7mの方形のプランで、深さ1.2mあり、その中央部に梵鐘を铸造した鋳型が残る遺構が検出された。この埋土中には、炭や灰・焼壁・銅滓・粘土などが投げ棄てられたような状態で詰まっていた。その後、同様な遺構が京都大学校内遺跡で2基発見された。このような鋳造遺跡としては、大津市滋賀里町長尾の長尾遺跡、長野県上伊那郡飯島町の寺平遺跡(注2)が著名である。寺平遺跡では、検出された3基のうち2基に土台が完全な型のまま発見されている(注3)。

現地において、杉山信三氏(京都府文化財保護審議会委員)、坪井良平氏、高橋鋳物工場の上田一男氏・津田寛治氏から様々な指導と助言をいただいた。

梵鐘の鋳型は、久保哲正氏(この時点では、当センター調査員、3月16日付けで、府文化財



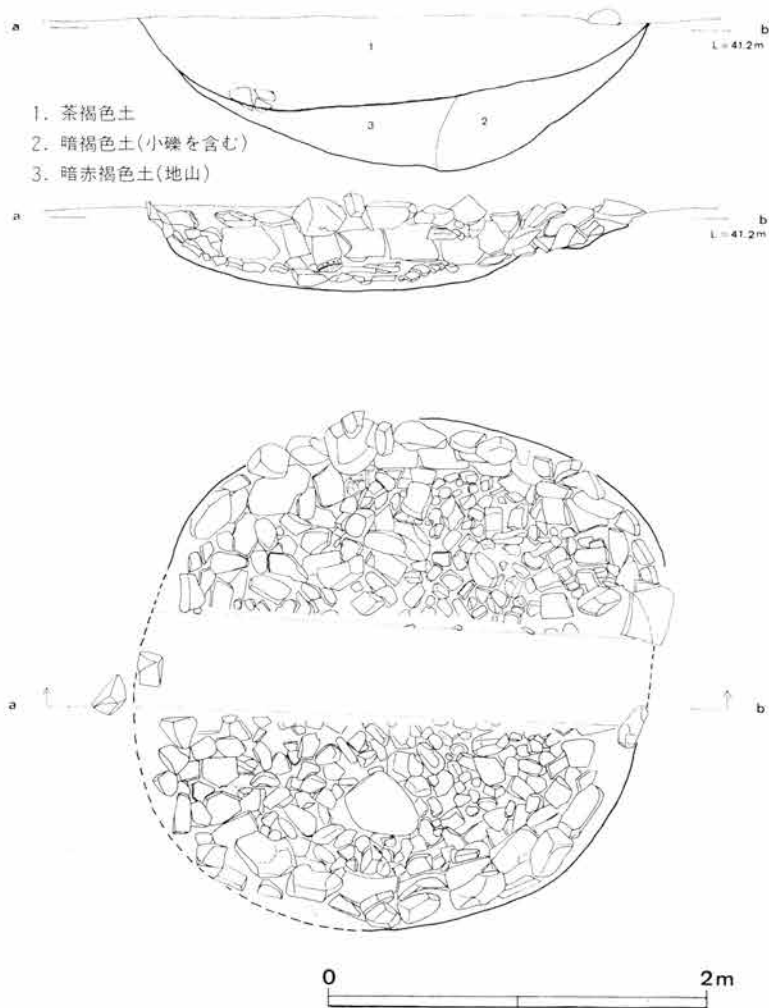
第3図 A地区遺構平面図・断面図

保護課へ異動。)の援助で、イソシアネート系樹脂(品名=サンコールSK50)を注入して凝結させた。その後、型ワクをはめ、ウレタン樹脂等で固定し、鋳型を切り取った。

梵鐘の鋳型、鋳造跡埋土中の遺物の整理をはじめとする2回目の調査の資料整理は、今後、進めていく予定であり、今回は割愛させていただいた。

(2) 検出遺構

上記のような理由で、今回は、1回目の調査で検出されたものに限らせていただいた。1回目の調査で検出された遺構は、いずれも、いわゆる地山面とおもわれる黄褐色土・砂礫層に掘り込まれたものである。



第4図 石敷土坑SK02平面図・断面図

溝 (S D01) トレンチ西端で検出した。弧を描くように湾曲する溝で、最大幅が2.2m、最小幅が0.9mある。溝は、最も深いところで40cmあり、西端で25cmを測る。長さ5mにわたって検出したが、北壁には、その延長部がないため、北へはあまり延びないものとおもわれる。埋土は暗褐色土及び暗茶褐色土で、上層では、わずかに黄褐色土がブロック状に混じる。埋土には平瓦・丸瓦・須恵器・土師器・黒色土器・炭などを含む、出土遺物から平安前期～中期のものと思われる。

石敷土壇 (S K02) 溝 (S D01) を切り込んだ円形の土壇で、直径1.3m、深さ20cmである。土壇の底には小石を敷き、側面には、瓦、やや大きな石をはりつけた状態で置く。側面と底の境目に軒丸瓦が置かれていた。また、底に敷かれた石の中で、硯として使用された平石が裏がえして置かれていた。埋土には、小破片の土師器・須恵器を含むが時期がわかるようなものはない。粘土等を張り付けた痕跡がないことから、水等を貯めておくものでないことがわかる。何に使用したものか、わからない。

土壇 (S K03) トレンチ東端で検出した。黄褐色土・砂礫層から掘り込まれている。東西に長い土壇で、長さ4.5m、幅1.7m、深さ35cmを測る。埋土には、多量の石と共に瓦・須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬が含まれる。出土遺物から平安前期のものと思われる。

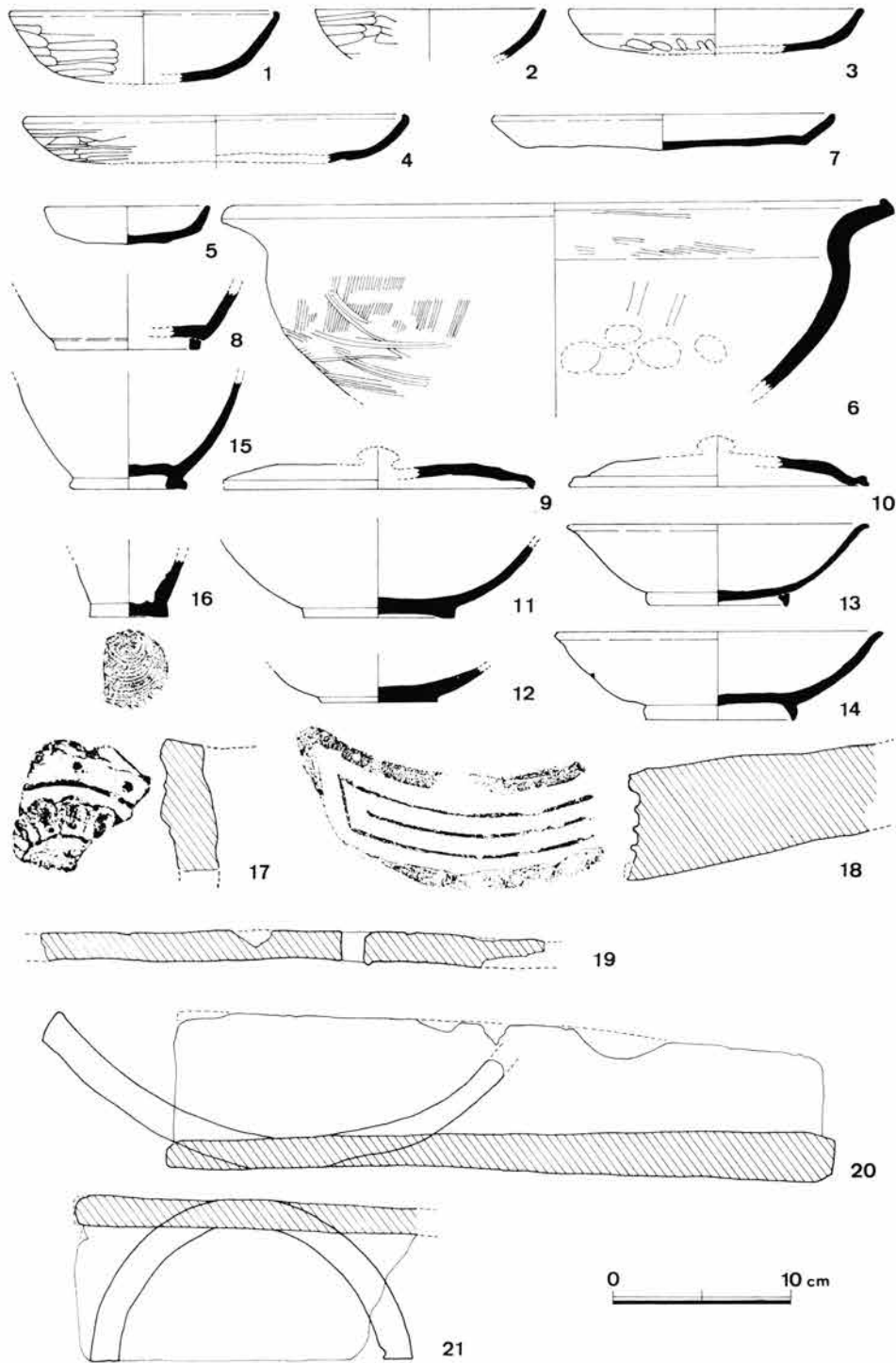
土壇 (S K04) トレンチ北端、S K05 の西側で検出した。径1.4m、深さ25cmを測る。埋土には少量の遺物を含む。

土壇 (S K05) トレンチ北端で検出した。径1m程度の楕円形で、深さ50cmを測る。埋土には瓦・須恵器・土師器・炭を含む。S D01 と同時期と思われる。

土壇 (S K06) S K05 の東側で検出した。S K05 を切っている。最大径2.2m、深さ40cmを測る。土壇 S K07・08・09 は、トレンチ中央で検出した。いずれも現代土壇によって切られている。S K07 は隅丸方形を呈し、S K08・09 は楕円状になる。ピット状土壇 S K10は、S K07 の西側で検出した。この土壇の径は約70cmである。これらの土壇は、いずれも深さ10cm前後の浅いものである。溝 S D01、土壇 S K03・05 には、平瓦に古い様相のタタキ目を持つものがあり、広隆寺との関連を想起させるが、旧境内とするには決め手に欠ける。

(3) 出土遺物

1回目の発掘調査で出土した遺物は、溝 S D01、土壇 S K03 からの出土のものがほとんどである。他は、掘削中に出土したもの、土壇 S K05 から出土したものが少量ある。遺物のなかでは、平瓦・丸瓦が多い。須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・製塩

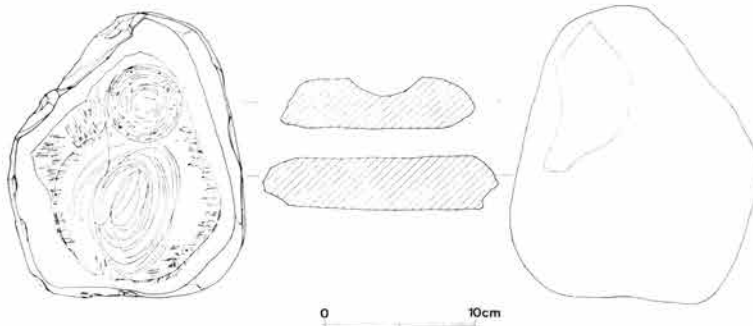


第5図 A地区出土遺物実測図・拓影
 1~5. 土師器 7~10, 15, 16. 須恵器 11, 12. 緑釉 13, 14. 灰釉
 17. 軒丸瓦 18. 軒平瓦 19, 21. 丸瓦 20. 平瓦

土器・陶磁器・土馬などがある。また、石敷土壇 SK02 で、石と共に敷かれていた軒平瓦・石製硯がある。

第5図1～7・9・15・19～21は SD01 から出土している。8・9・11～14・16は SK03 から出土している。10・18は掘削中に出土した。17及び第6図の硯は、SK02に敷かれていたものである。

1は、高台の付かない土師器杯Aで、口径15cm、高さ4cmで、口縁端部を丸くおさめる。内面はナデ、外面は口縁端部近くまでヘラ削りを行う。2は、土師器の碗Aで、復元口径は12.8cmとなる。内面はナデ、外面は口縁端部までヘラ削りを行う。3・4・5は、土師器の皿Aである。3は、復元口径は16.5cmで、内面及び外面の口縁上半部までナデる。他は、未調整で、指で押さえた痕がみられる。4は、復元口径が21.2cmで、内面はナデ、外面は口縁端部近くまでヘラ削りを行う。口縁端部は内側に丸くおさめる。5は、口径9.1cm、高さ2.1cmを測る。内面及び口縁外面はナデ調整、他は未調整のまま指圧痕が残る。口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。6は、土師器の甕で、復元口径が35.8cmとなる。口縁部が「く」字形に外反し、端部を内側につまみ上げ丸くおさめる。体部外面はハケ調整し、口縁部をナデる。内面の体部下半は指で押さえた後ナデる。口縁部及び体部上半は、ハケ調整の後ナデる。外面にススが付着している。1～6の土師器は胎土・焼成とも良好である。7は、須恵器の皿Aで、口径19cm、高さ2cmである。内外面とも回転ナデ仕上げである。底部外面にヘラ切り痕を残す。焼成がやや甘く、表面は淡灰色である。胎土に銀雲母・黒色粒・石英を含む。8は、高台の付く須恵器杯Bで、底部の復元径は8cmとなる。内外面とも回転ナデ仕上げである。9・10は、須恵器の蓋で宝珠つまみの付くものである。9は端部を内側に曲げ、10は端部を屈曲させた後内側に曲げる。8・9・10はともに焼成が良好で、表面は淡青灰色である。11・12は、緑釉の碗で、ともに黄緑色に発色した釉がかかり、底部は削り出している。11は、精製した胎土が選ばれている。12の胎土は、砂質でやや粗い。焼成は、ともにやや甘く軟質である。13・14は、灰釉の碗である。13は、口径17cm・高さ4.5cm、14は口径18.5cm・高さ5cmを測る。ともに、釉にバラつきがあり、張り付け高台で断面が三角形を呈する。焼成は良く、堅微で、胎土に石つぶを含み、重ね焼きによるゆがみがみられる。15は、須恵器でいわゆる壺Lのタイプである。底部径6.2cmを測る。高台は張り付けている。焼成は良好で、表面は灰色である。底部内面と高台に自然釉が付着している。16は、小型の瓶子で、底部外面に糸切り痕を残す。底部径4.5cmを測る。内面にロクロ挽きの痕をとどめる。焼成は良好で、外面は灰色で、自然釉の付着がみられる。17は、蓮華文軒丸瓦の一部である。外区外縁は丸みのある傾斜縁で、内縁に珠文

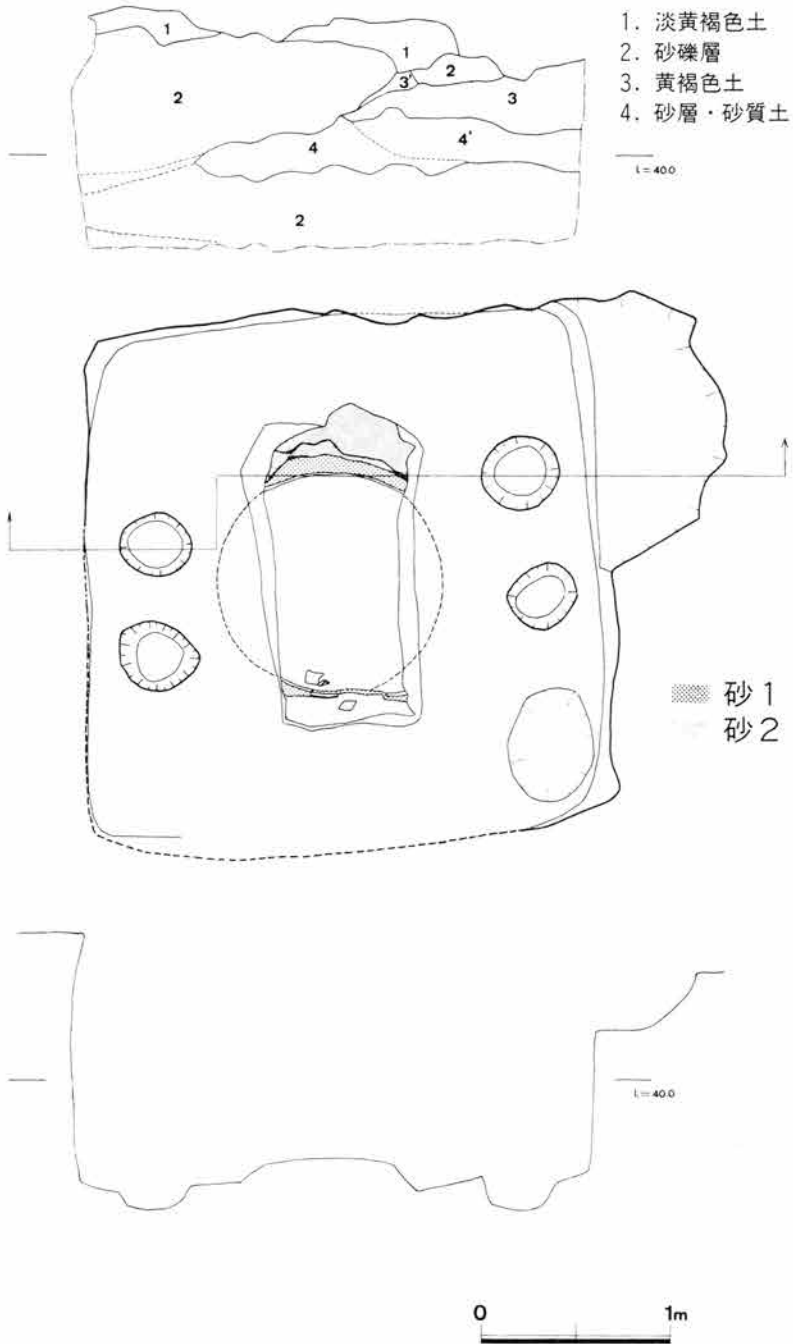


第6図 石敷土壙SK02出土石製硯実測図

を配する。内・外区の界に一条の圏線をめぐらす。内区は、短い単弁単子葉で、大きな中房を持つ。石と共に敷かれていたため、表面がやや磨滅している。18は、重画文軒平瓦で、一重画の中に一弧を配したものである。瓦当厚と、平瓦部との差は少ない。焼成は良好で、表面は暗灰色である。胎土に、石英・黒色粒を含む。平瓦部凸面に朱が付着している。19は、丸瓦で釘穴を穿ったものである。釘穴は、凸面から凹面に穿たれている。20は、平瓦で、長さ37.5cm、幅26cm以上ある。凸面は縄目、凹面は細かい布目が残る。21は、丸瓦で、長さ19cm以上、幅17.8cmある。凸面は横方向のナデ、凹面は布目が残る。丸瓦で35cm以上あるものもある。第6図の石製硯は、扁平な河原石を利用している。硯として使用した面に、直径5.2cm、深さ1.2cmの半球形の窪みを造り、墨をためる海としている。これは、先の尖った道具で石を突き壊した後、研磨している。墨をする陸の部分は、よく磨かれ、鏡のようで、その使用度をうかがわせる。また、使用範囲を示すかのような線刻がみられる。裏面は、安定を良くするために、一部を打ち壊している。以上が主な出土遺物である。他の出土遺物等と合わせてみると、溝SD01は、平安時代前期の遺物が中心であるが、上層に中期以後とおもわれるものを若干含んでいることから、平安前期～中期のものとおもわれる。土壙SK03は、平安前期のものとおもわれる。

3. 小 結

今回の発掘調査のうち、わずかに1回目のももの整理が終了しているにすぎないが、現在のところ、出土遺物等からみて、本調査地も、広隆寺の旧境内とおもわれる。最後に梵鐘鋳型の出土した方形土壙（SK22）について現在までにわかった事を記しておきたい。この土壙は、地山とおもわれる淡黄褐色土層・砂礫層を掘り込んでおり、一辺2.7mの隅丸方形の掘方で、深さ1.2mを測る。埋土には、土器片や炭・焼壁・銅滓・粘土塊などが混入していた。



第7図 梵鐘鑄造跡 SK22 実測図・断面図

この鑄造遺構は、出土遺物からみて10世紀以前のものおもわれる。焼壁には、細かいスサ状の混和剤が加えられている。焼けた粘土の中に瓦が混入しているものや、焼けていない粘土もある。銅滓には、緑色のものと、青緑色のものがある。また熱によって溶融した曲面をもち、溶融炉・あるいはふいごの一部とおもわれるものもある。平面及び曲面で、表面に銅が溶融したもの、砂が固まったようなものがある。梵鐘の鑄型土台とおもわれるものは、砂礫層の上に炭等の混入した土で土台を作り、その上に砂を敷くものである。この砂が梵鐘の下端を示すものとおもわれる。砂型の内径側で、粘土との境界が赤黒く焼け焦げている。(これが内型と接した面とすれば、内径約118cmを測る)。鑄型の両側に、各々二か所のピットがあり、径30~40cm、深さ10~20cmを測る。

上述したように、梵鐘を鑄造した遺跡は、大津市滋賀里町長尾の長尾遺跡、長野県上伊那郡飯島町の寺平遺跡、京都大学教養部構内遺跡^(注4)がある。長尾遺跡の鑄造遺構は、一辺3mの隅丸方形の掘方で、底面に3本の溝と四隅にピットを持つ。寺平遺跡の鑄造遺構は3基あり、そのうち2基は、一辺2.5m前後の隅丸方形の掘方をもつ。1・3号遺構には、梵鐘土台が完存する。2号遺構には、底面に3本の溝がある。京都大学構内^(注4)のものは、底部に2本の溝と四隅にピットを持つものと、梵鐘土台の完存するものがある。寺平遺跡では、梵鐘の竜頭鑄型片3個、撞座1個体をはじめ合計600個以上の鑄型片が出土している。長尾遺跡・京都大学構内では、梵鐘の乳やふいごの羽口・溶融片が出土している。

これらの遺構に共通する溝・ピットは、梵鐘の型を固定したり、鑄上がった後、梵鐘をつりあげる構架材の痕跡とおもわれる。

梵鐘の鑄造は、運搬が困難であった当時においては、梵鐘を発注した寺院などの近くで行われていたと考えられる。戦前まで、梵鐘を鑄造するのに、寺院内などで作業を行ったという。この鑄造遺構は、広隆寺境内の可能性が高く、寺院内にもうけられた工房址とおもわれる。

『広隆寺資財帳』に記された、承和9年(842)の鑄造の銅鐘は、周9尺6寸で厚4寸(径3尺2寸)であって、この鑄型より小さい。また、西本願寺が所蔵する久安6年(1150)銘の梵鐘は、幅2尺2寸である。広隆寺に現存する建保5年7月(1217)銘の鐘は、高さ約2尺の小鉄鐘であって、今回検出のものは、このいずれにも合致しない。このことは、広隆寺の工人が、他の寺院の梵鐘を鑄造したことを示すのであろうか。

このような鑄造遺構は、全国でも数例しか知られておらず、貴重な資料を得ることができた。

(石尾 政信)

- (注1) 浪貝 毅「北野廃寺跡と広陸寺旧境内」(『仏教芸術』第116号) 1977
- (注2) 林 博道「大津市周辺の寺院関係工房跡の調査」(『月刊文化財』第176号) 1978
- (注3) 友野良一『寺平遺跡』 長野県上伊那郡飯島町 1980
- (注4) 「京都大学教養部構内の遺跡」(現地説明会資料) 1982.3.27 京都大学構内遺跡調査蔵文化会・京都大学埋財研究センター 現地にて泉 拓良・清水芳裕・五十川伸矢氏から御教示をえた。

2. 法成寺跡立会調査概要

所在地 京都市上京区河原町通広小路上ル髭井町465

調査期間 昭和56年7月31日～昭和56年10月14日

調査面積 200m²

1. 調査目的

京都市立小児医療センター（仮称）建築工事に伴う事前調査として、当地が平安時代、藤原道長によって創建された法成寺の寺域に含まれると推定されることから、立会調査を行い遺構・遺物の有無を確認し、記録を作成するとともに遺構が検出された際には、その保存を計るための資料も合わせて作成することを目的として実施した。



第8図 調査地位置図

2. 調査概要

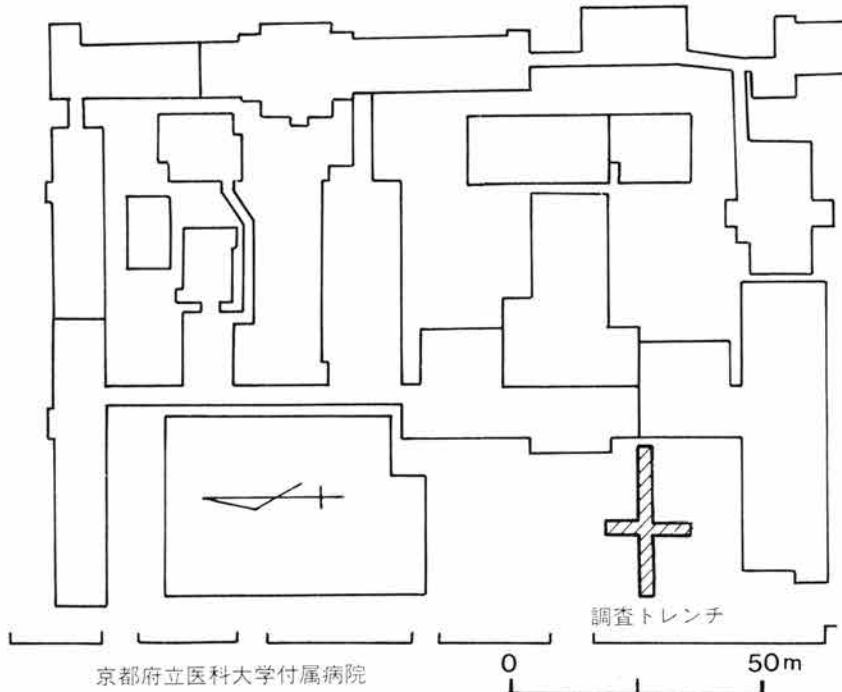
予定地内にトレンチを設定して、機械掘削で立会調査を行った。トレンチは十字形で、幅約3m、長さ東西約30m、南北約17mの規模をなす。調査は土層を確認しながら徐々に掘削を行い、地表下2mまで達したところで、トレンチの土層断面の観察及び分層をした。

層位は上層より、置土層（レンガ・コンクリート塊・瓦片を含む現代の地層）が約1mの厚さでおおわれていた。次の淡茶褐色砂礫層（拳大の礫を含む）は約50cmの厚さであり、さらに暗褐色砂礫層（粗砂を多く含む）があった。

機械掘削による平面の観察であるが、土層は置土層を除去すると、砂礫層が続くばかりで遺構は検出されなかった。砂礫層は鴨川の氾濫による土砂の堆積層であり、淡褐色砂礫層から近世の巴文軒丸瓦が出土しているので江戸時代頃の氾濫による堆積と考えられる。

調査はトレンチ土層断面図の作成と写真撮影をしたのち、さらにトレンチ東西部の西側半分を地表下約4mまで掘り下げた。土層は砂礫層が続いており、遺構は検出されなかった。土層が崩れやすくなっているため、安全面から写真撮影だけにとどめ、すぐに埋め戻した。

遺物として、地表下約2.5mで暗茶褐色砂礫層から、平瓦片・須恵器甕片各1点が全体的に磨滅を受けて出土している。時期は両方ともに平安時代頃の所産と考えられる。



第9図 調査トレンチ平面図

3. ま と め

今回の調査で確認されたことは、地表下約1mまでは現代の置土層であり、次に江戸時代頃の瓦を検出した淡茶褐色砂礫層、そして平安時代頃の平瓦片・須恵器片を検出した暗褐色砂礫層の三層である。いずれも遺構は検出されず、すべて鴨川の氾濫による砂礫の堆積によってもたらされた層である。調査目的であった、法成寺に関する遺構・遺物は確認されなかった。また昭和55年度に当地より約50m北で中央診療棟建設の際行われた試掘調査でも、砂礫層が確認されている。このことと合わせて、調査地周辺は氾濫による堆積層でおおわれていると考えられる。

(小泉 信吾)

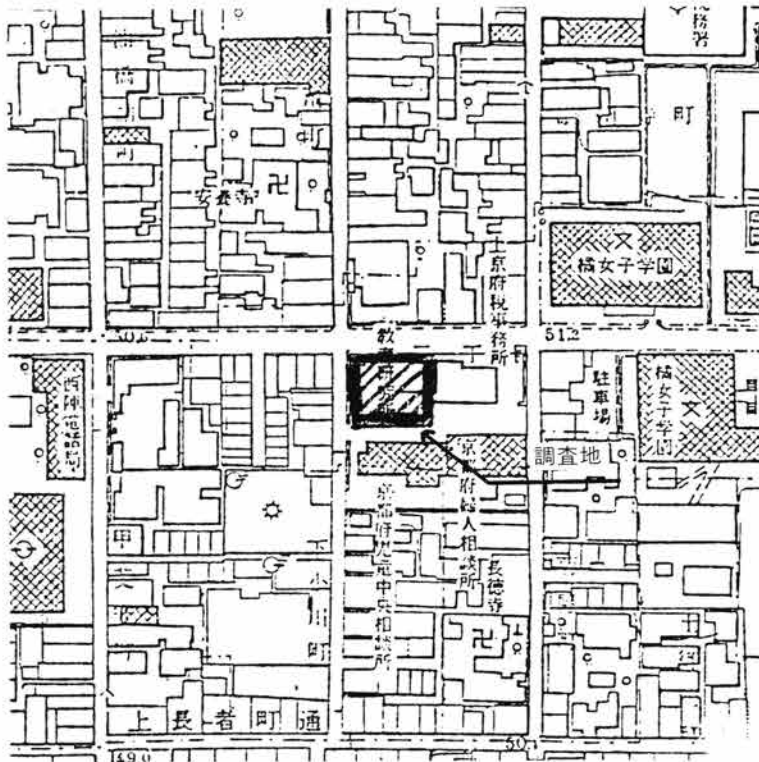
3. 平安京跡左京北辺二坊発掘調査概要

1. はじめに

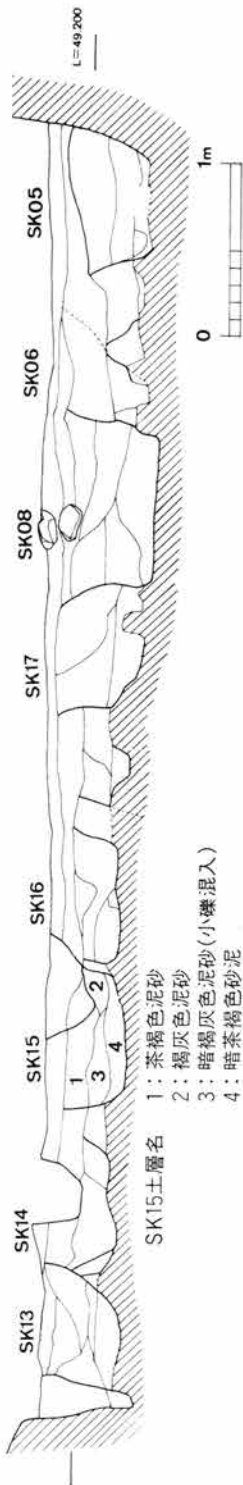
この報告は、京都府立精神薄弱者更生施設の新築工事に伴う発掘調査の成果に関するものである。

調査地は京都市上京区中立売小川東入ルに所在し、現在の上京児童相談所の北に接する。平安京条坊復原図に照らすと左京北辺二坊に当り官衙の密集するところで、当地はその左兵衛府町に属する。平安時代の後半になると里内裏や民衆の住宅が入り乱れる。中世の「京都」に至ると町屋の支配的な空間となった。織豊時代では「旧二条城」や聚楽第の造営に伴って道路の改変が著しく、以前の大路・小路は一新され、城下町の様相が一時的ながらも表われたであろう。

調査地の標高は約45mで北方へ徐々に高まる緩傾斜地である。この立地条件下で先述の



第10図 調査地位置図



第11図 断面壁北サソレルト

遺構の存在が予想されるが、数年来、この付近での発掘調査の成果によれば、地表下約2mまで各時期の遺構・遺物が見られる。中でも中世に関するものが圧倒的に多い。従って調査に至るまで、排土の処理方法、調査面積の決定、調査期間について当調査研究センターは、京都府教育委員会、京都府福祉課、児童相談所と共に協議を重ね調査計画を立てた。調査は昭和56年9月8日から同年10月30日まで実施した。

2. 調査経過

調査地は建設予定地のみを対象とし、約120㎡の調査区を設定した。調査の掘削は当初、地表下0.7mまで機械掘りにして、以後人力によって掘削した。堆積層は当遺跡の基盤層である黄褐色砂礫層及び部分的には黄褐色粘質土層(聚楽土)が地山となる。地山上に堆積する層は1.8mにも及び、中世から現代までの遺物包含層が数層確認できた。その中で、近世の層の一つは拳大から人頭大の河原石を厚く置き整地層をなす。中世の遺物包含層は、地表下1.3mから検出でき、この層で遺構を確認することができる。土質は有機質を多く含む茶褐色を呈する粘質土が主体である。

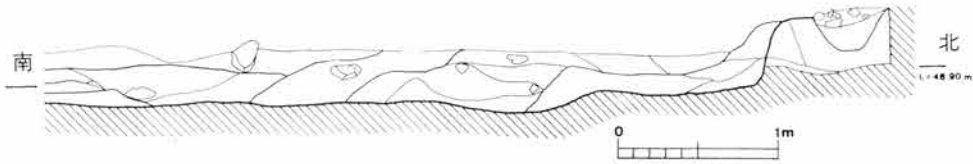
今回の調査で得られた成果は、中世末から近世に至る資料が多く、調査の主目的である平安時代の遺構・遺物は皆無に近い。

検出された遺構は、井戸3基、石室1基、土塋6基、土塋墓8基、落ち込み遺構1、掘立柱建物柱穴13個分などである。出土遺物では土師器皿が圧倒的に多く、近世陶磁器、中世陶器があるが、まれに緑釉瓦(軒平瓦)があった。また、織豊時代に関するもので金箔瓦(軒平瓦・軒丸瓦・方形裝飾瓦)が30点出土した。

3. 検出遺構

井戸 (SE01~03)

井戸 SE01 の掘形は円形を呈し、コンクリート製の井戸



第12図 中央セクション断面図

枠を用いており、地表面からすでに確認できた。井戸 S E02 は円形の掘形を呈し、直径 2.2m を測る。井戸本体は上半部が漆喰、下半部が石組みによって成形される。井戸 S E03 は円形の掘形、その径は 1.8m を測る。埋土は S E02 とほぼ同じ様相をなし、上半部では有機質土に焼土が混入する。遺物は土師質皿、棧瓦の破片や漆喰の残塊が検出された。下半部では割合、きれいな砂礫を埋める。この様子から井戸の廃絶は一時に行われたと思われる。

石室 (S X04)

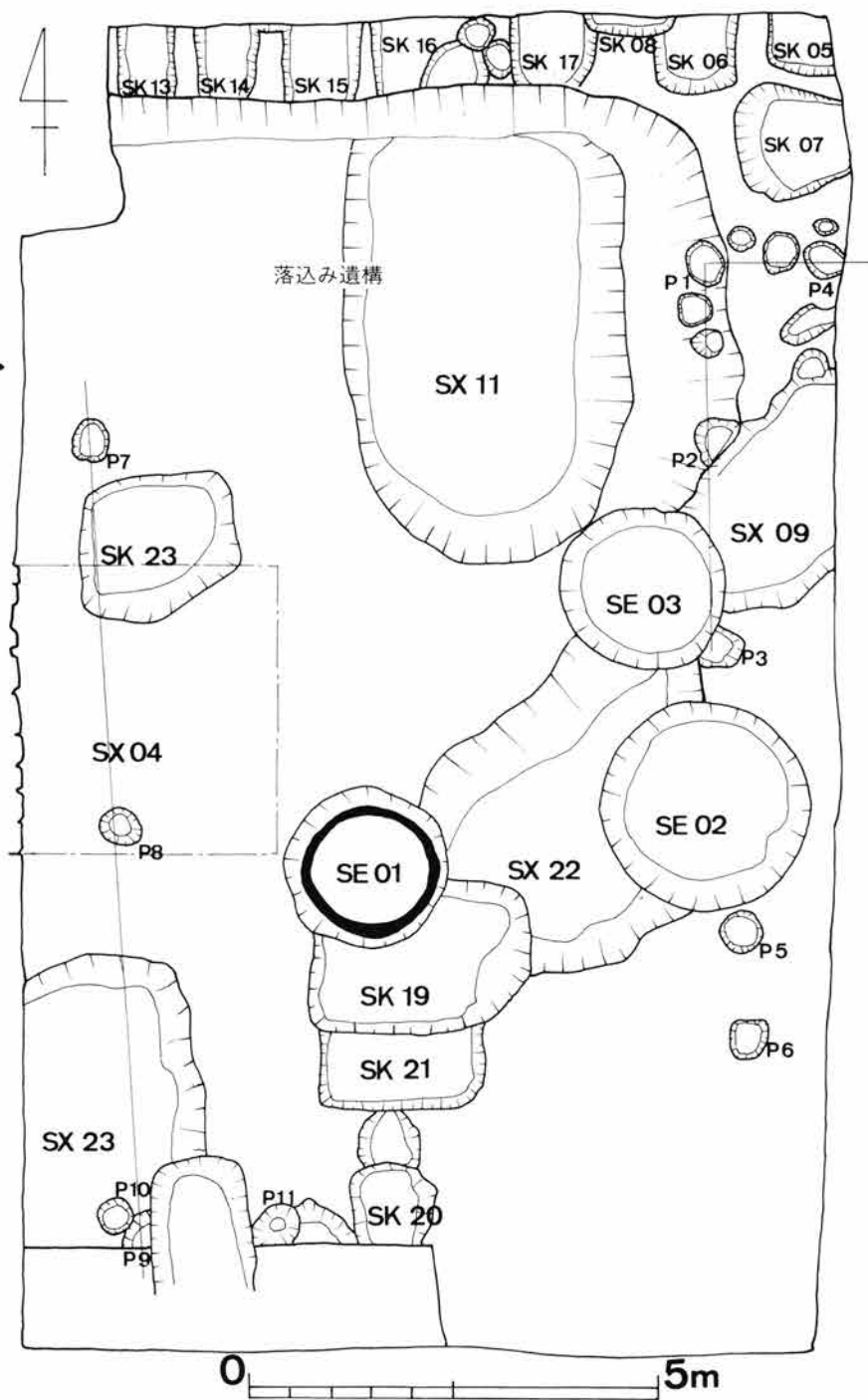
トレンチ中央部西側で検出された石室は基底部では東西 3.2m、南北 3.4m を測り、ほぼ正方形の掘形を呈し、垂直に 1m 程たちあがる石組み遺構である。特に基底部は花崗岩の切り石を基礎とする。上部から下位に至るまで丁寧に内面を揃え、メジには漆喰を塗り固める。床面は平らにして強く叩きしめる。そこには部分的に棧瓦を敷いたと思われる痕跡が認められる。裏込めには拳大の河原石を多量に用い、全体に強固な仕上げとなっている。埋土は黒褐色を呈する炭化物、有機質と赤褐色の焼土からなり、棧瓦・土師器皿・染付などが含まれる。

土 壙 (S K19・20・21・23)

土壙 S K19 はほぼ長方形の掘形をもち、長軸 2m、短軸 1.5m、深さ 0.5m を測る。この土壙内には大半が土師質皿、その他染付・貝類・炭化物が混在しており、ごみ棄て穴と思われる。土壙 S K20 は不定形な掘形を呈し、残存する深さは 10cm 程である。土壙 S K21 は S K19 によって破壊されているが、長方形の掘形が確認できた。長軸は 1.5m 深さ 5cm と浅い。埋土は暗褐色粘質土で遺物は皆無である。土壙 S K23 は石室下層より検出された。掘形はほぼ隅丸正方形で、その一角を欠くが一辺 1.4m、深さ 10cm を測る。

S X (09・22・23)

ここで言う「S X」とは、人為的あるいは自然的に出来た穴の掘形が不定形を呈し、遺物もほとんど含まず、その性格が単なる土壙状であったり河川・溝・落ち込み・井戸・柱穴等であり、特に調査中においてそれらを判定し得ないものについて表示する略記号である。

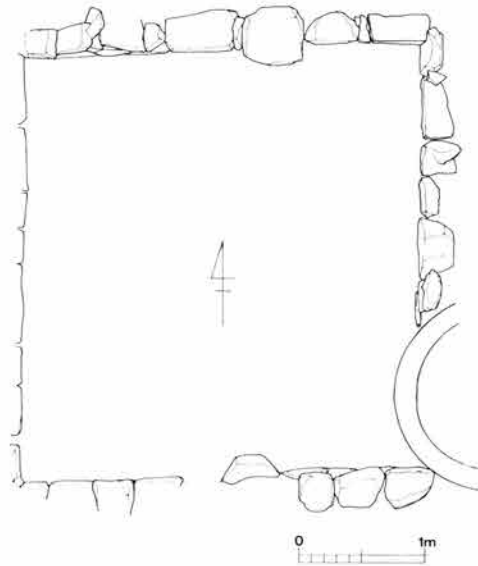


第13図 トレンチ全体遺構図

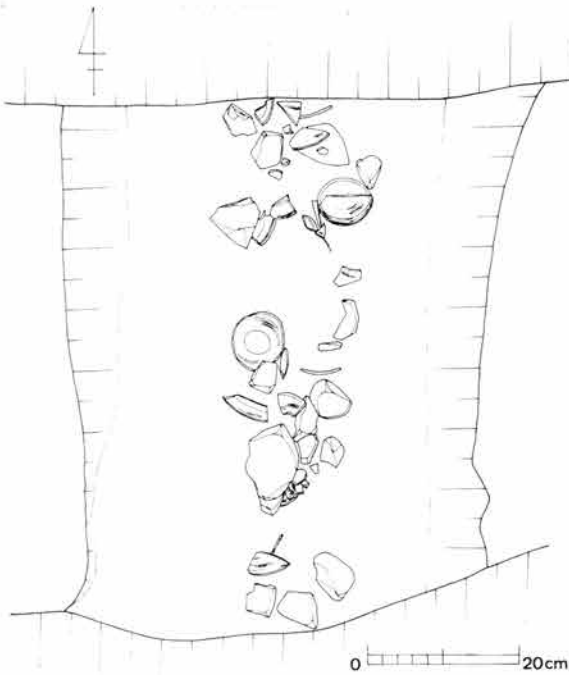
例えば SX09 とか SX22 は共に井戸 SE03 によって削平を受け、しかも掘形において不定形ではあるが、埋土は茶褐色粘質土であることが共通する。このことから両者は同一遺構の可能性が強く、具体的に溝・河川、あるいは土壇状と考えられるが決定し得ない。更に SX23 は直線的な二辺が直角をなし、正方形、又は長方形の掘形を示し、人為的なものではあるが、単に土壇であるとは言い切れない。

落ち込み遺構

トレンチ北半部で検出された落ち込み遺構は逆L字形を呈し、高低差は0.5mを測り、斜面は急勾配である。この遺構の角では一段と落ち込む(SX11)。落ち込みを形成する高まりは土壇墓(SK13~17)群の埋土と



第14図 SX04石室平面実測図



第15図 土壇SK15平面実測図

その地盤である茶褐色粘質土及び黄褐色粘質土(聚楽土)である。一方落ち込みを埋没させた土層は茶灰色砂礫・淡茶灰色砂・茶灰色粘砂質など多種を極め、土量の多さを物語る。遺物はこの斜面、及び基底部やSX11に金箔瓦が30点、これに伴う平瓦・丸瓦や土師質皿などがある。金箔瓦の種類は軒丸瓦(梅鉢文・葵文)、軒平瓦(唐草文)、方形装飾瓦(梅鉢文・桐文)などがある。この遺構の性格は大規模な掘削を行っている事や多量の瓦が落ち込みの近辺で出土していること等によって、建物の土壇・地境・道路跡等が考えられる。

土壙墓 (SK13~17・05・06・08)

トレンチ北辺で検出された土壙墓群は東西に7基並列して一群をなす。掘形は長方形と思われる。幅0.5~0.7m以上、深さ0.4mを測る。この一群は一見して柱穴列と考えられるが、SK15においては埋土が粘質よりも砂質が多く、土師質皿の完形品を4点の他、多数の土師器破片の出土状況が見られることから、一応、土壙墓と考えたい。

掘立柱建物の柱穴

掘立柱建物の柱穴は全部で13個検出されたが、建物として成立するのはP1・2・3とP7・8・9だけである。掘形は円形を呈し、その径は0.3mを測る。しかし削平が激しく深さは5cm程である。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器類では土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦器など、又、瓦類では棧瓦・金箔瓦(軒丸瓦・軒平瓦・方形装飾瓦)等がある。コンテナバットにして70箱を超え、その多くは近世の遺物である。図版に掲載した遺物は土師器・金箔瓦を中心に主要な遺構から出土したものである。

SX11の出土遺物(第16図1~11)

土師質皿小型1~5は口径8.0~8.5cm、器高1.6~2.2cmを測る。底部はやや平たく体部は外反しながら斜め上方へのび、口縁は丸くおさめる。体部外面は横ナデを施すが、指オサエの痕跡を残す。内面はきれいな横ナデ。色調は全体に褐色ではあるが白味を持つ。胎土は緻密で焼成は硬質・軟質共にある。

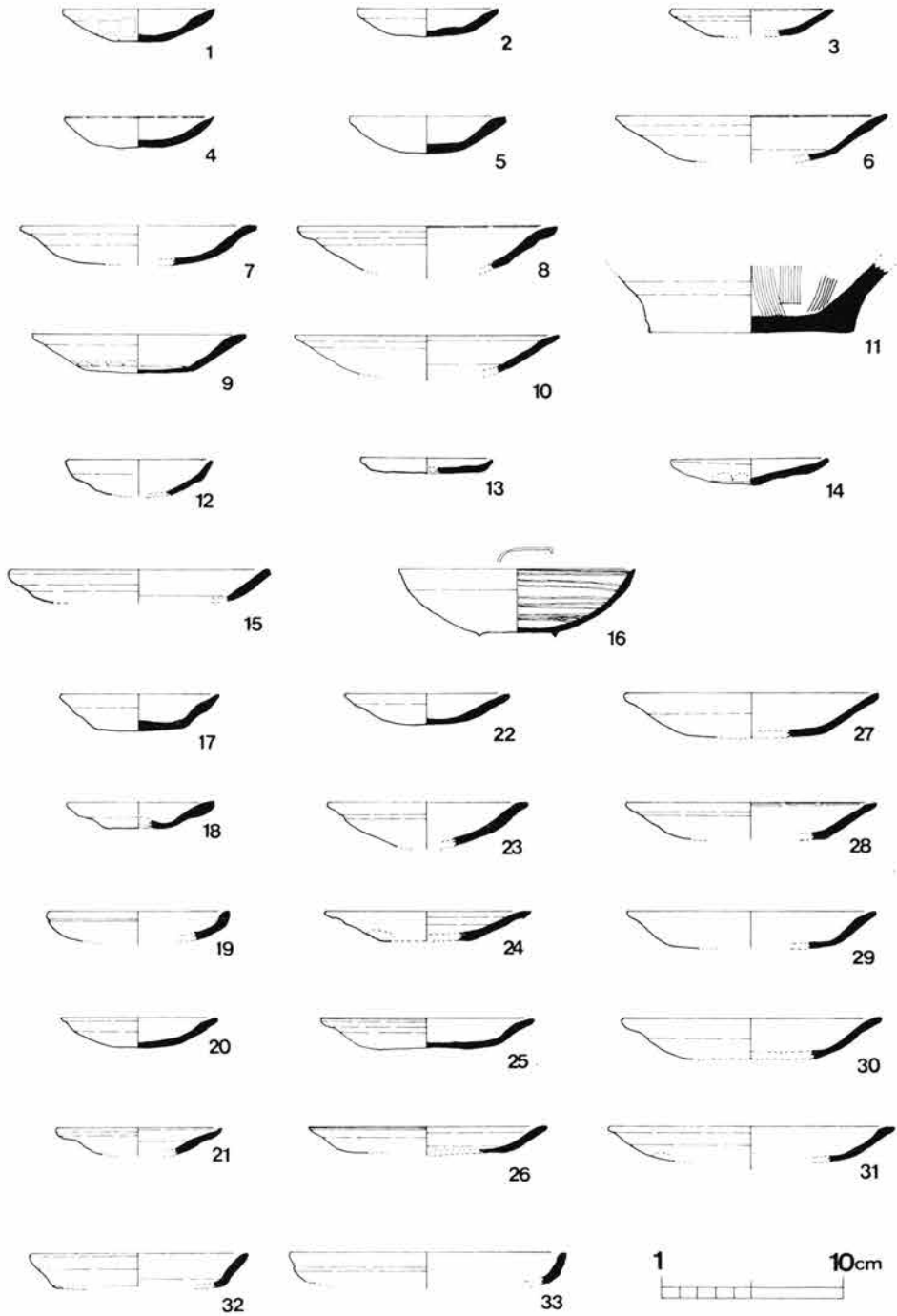
土師質皿大型(第16図6~10)

土師質皿6~8・10は口径14.2~15.2cm、器高2.5cmを測る。体部は外反ぎみに斜め上方に立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる(7・8)のものと、わずかに肥厚する(6・9・10)ものがある。口縁部は体部より器壁に厚みを持つ。調整は口縁部、体部の内外面には横ナデを施し、底部外面はオサエを留める。色調は淡い赤褐色を呈し、全般的に焼成は良く硬質である。胎土は緻密で雲母を多く含む。

これらの土師質皿は以上の事から、平安京跡(左京内膳町)の編年試案では16世紀前半に比定される。

土壙(SK08)の出土遺物(第16図12~16)

土師質皿12・14は口径8.4cm、器高2.0cmと1.4cmを測る。口縁部内外面はナデ調整、体部外面はオサエを残す。色調は淡赤褐色、胎土は緻密である。13は口径7.4cm、器高0.8cmを測る。瓦器碗16は口径13.2cm、器高3.8cmを測る。体部は内湾しながら口縁部へ続き、端



第16图 出土遺物実測図

部は丸くおさめる。暗文は内面のみに粗く施す。沈線はなく、見込みの暗文は不明である。高台は小さく逆三角形を呈する。

これらの土器類は、左京内膳町試案や『上牧遺跡発掘調査報告書』の瓦器編年試案によれば14世紀前半に比定される。

土壙墓（SK15）の出土遺物（第16図17～31）

土壙墓群からは少しずつ遺物は出土しているが、SK15においては完形品3点をはじめ数多くの土師質皿が出土した。これらの土師質皿は、大型、中型、小型に分けることができる。小型17～22は口径9cm前後、器高は1.5～2.0cmを測る。体部は外反しながら斜め上方に伸び、口縁部では器壁を厚くするもの17・18・20があり、厚くならないもの21・22がある。いずれも口縁部外面を強くナデ、体部と底部外面は指圧痕を留めるものが多い。色調は赤褐色や淡黄褐色を呈し、胎土は良好である。中型23～25は口径11cm、器高1.6～2.4cmを測る。体部は内湾しながら斜め上方へ伸び口縁部で外反し、端部は丸くおさめる。全体に横ナデを施す。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は軟質である。大型26～31は口径14cm台、器高は2.2～2.5cmを測る。体部は内湾しながら斜め上方へ伸び、口縁部ではなめらかに外反し、端部では丸くおさめる。体部外面はオサエ、口縁部内外面は横ナデを施す。

これらの土器は左京内膳町試案によると15世紀後半に比定されている。

土壙墓（SK17）の出土遺物（第16図32・33）

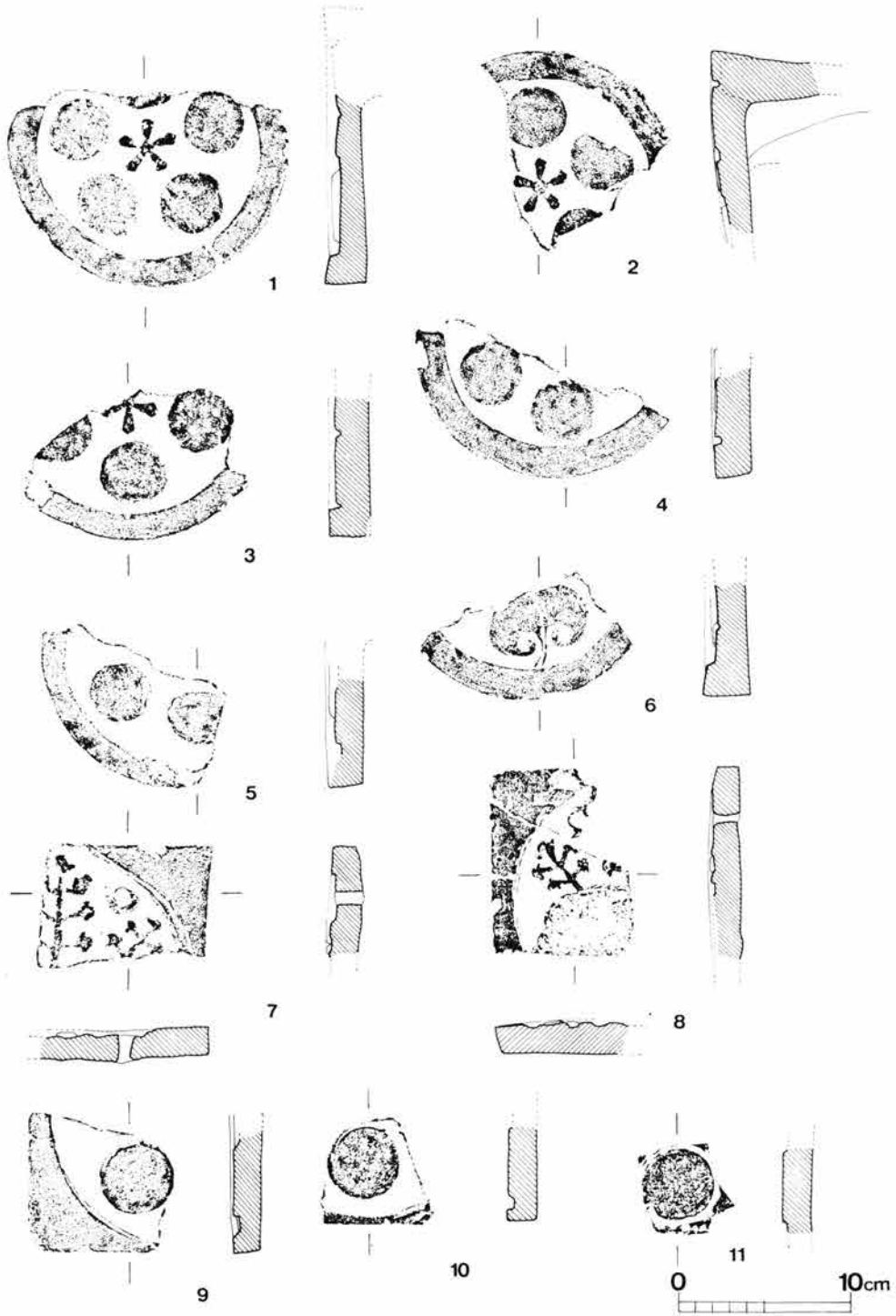
土師質皿32は口径11.8cm、器高2.0cmを測る。体部はわずかに外反しながら口縁につづき、端部は丸くおさめる。体部の器壁は一定して厚い。体部は内外面とも横ナデ、底部外面はオサエである。色調は淡褐色を呈する。胎土は緻密で雲母を含む。土師質皿33は口径15.2cmを測る。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は強い横ナデを施すため直線的に立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。色調は淡褐色を呈する。

落ち込み遺構及びSX09の出土遺物（第17図）

落ち込み遺構廃絶時に係わるものとしての金箔瓦はその数30点に及ぶ。瓦当だけでみれば完形品は1点であるが、各々復原可能な重要な資料ばかりである。金箔瓦は軒丸瓦・軒平瓦・方形裝飾瓦に大別でき、文様は梅鉢文・葵文・桐文・唐草文の4種類がある。本稿では瓦当、家紋の種類と製作手法にふれ、資料の紹介としたい。

軒丸瓦（第17図1～6）

梅鉢文は前田家の家紋と言われる1～5のもので、中心に5本の剣先を等しく外に向けている。1では瓦当径16cmを測る。接合方法は2では丸瓦を瓦当にさし込み、瓦当裏面と瓦当上位に粘土を補填する。この場合、丸瓦端部にキザミを入れる。金箔の貼りつけ方は周縁で



第17図 金箔瓦拓影及び実測図(1)

は1×2cm角単位に切って赤い漆を使用して定着させている。1～5にそれらの痕跡が見られる。また周縁や家紋の突出した部分にだけ貼りつけている。瓦当の色調は灰黒色を呈し、胎土は全体に緻密で砂粒を少し含む。6は葵文かと思われる。色調は灰黒色で胎土は軟質である。

軒平瓦 (第18図)

文様はすべて唐草文である。中心飾が中央に大きく位置し、支葉は2葉で均整唐草文と呼ばれる。唐草文は細く薄い成形をしている。1は瓦当部のみ完存する唯一の軒平瓦である。瓦当幅28cmを測る。脇区は上・外区に比して大きい。この脇区には金箔を施さない1～4・10・13のものがある。金箔はたいてい上・下外区、唐草文など軒丸瓦と同じく突出した部分に施されている。また幅2cmほどに金箔を切り、赤漆を用いて定着する方法も軒丸瓦と同様である。瓦当部と平瓦の接合方法は、5～13では瓦当上外区と平瓦凸面端部とにキザミを入れ、粘土を補填して瓦当を成形する。瓦当の色調は全体に黒灰色を呈し、胎土は砂粒を含み焼成の軟質が目立つ。

方形裝飾瓦 (第17図7～11)

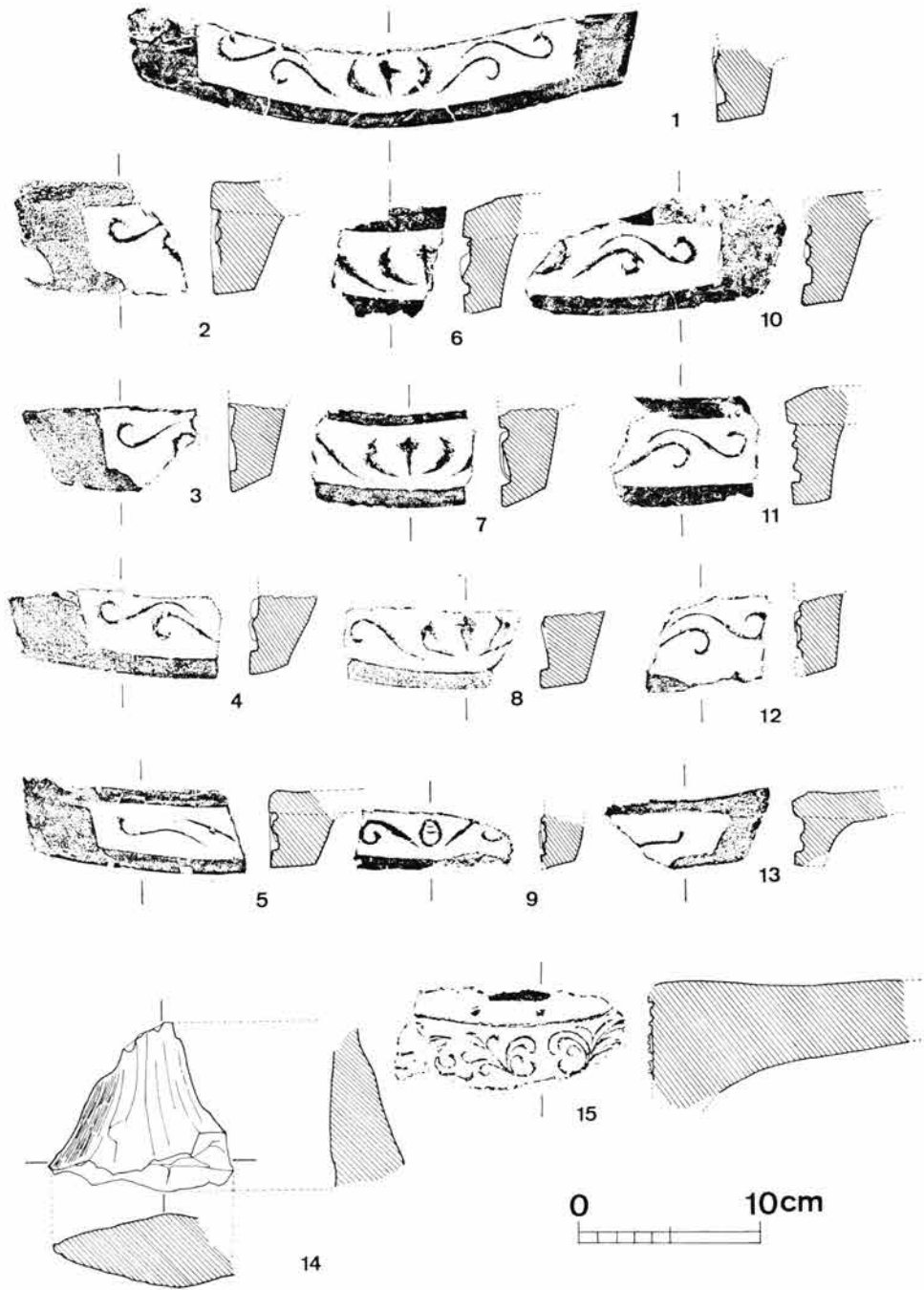
7・8は桐文である。大きさは不明である。金箔は周縁と家紋の突出した部分に施される。7では孔があり、8にもその痕跡が確認できる。大棟の飾瓦として使用されたい。9～11は梅鉢文である。軒丸瓦と同様のモチーフである。金箔は周縁と家紋の肉厚した部分に施されている。

14 (第18図) は実測図の平面でみると上方では破損するが尖る。表面は平行にミガキを細かく施し、裏面は指オサエのみである。下方の割れ口は他の瓦と接合するためのキザミが施されている。このようにみると、わずかに金箔を残す道具瓦ではないかと考えられる。

15 (第18図) は緑釉瓦である。瓦当面の支葉の唐草文は線が細く、肉薄である。施釉は淡い緑色でムラは無い。胎土は白く砂粒を多く含む硬質である。

3. お わ り に

落ち込み遺構は、中世末期においてそれ以前の土壙墓群を切り崩しての大きかりな掘削によるものである。この性格については敷地の地境、建物の土壇(基壇)、あるいは道路跡等が考えられるが、いずれにせよ人為的なもので、30点に及ぶ金箔瓦の共伴から、単に民衆の生活の領域に属するものでなく、いわゆる「旧二条城」、または聚楽第に関連する遺構と思われる。



第18図 金箔瓦拓影及び実測図

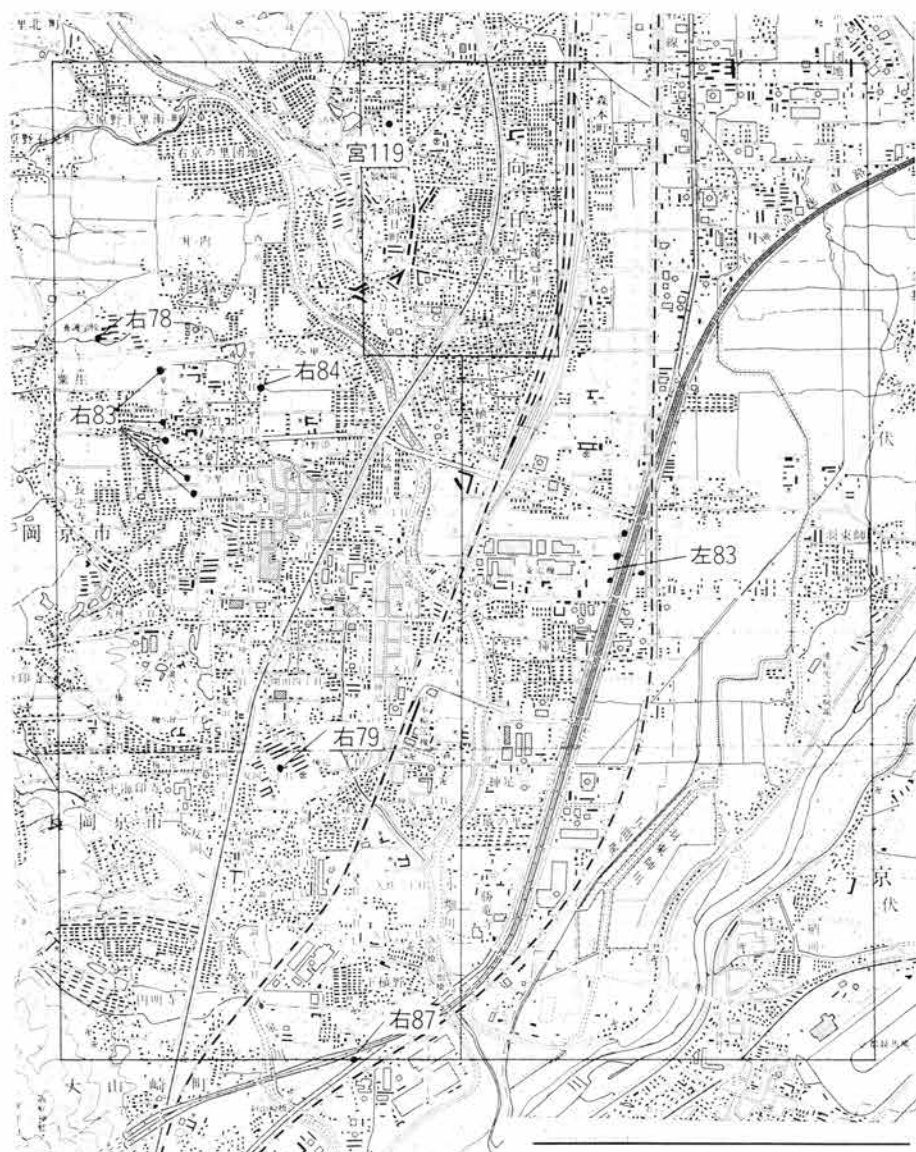
平安京跡に関連する遺構は発見できなかった。それは上述の落ち込み遺構やそれ以前の土壙墓群、そして近世の石室・井戸等により平安京を形成する基盤層(黄褐色粘質土=聚楽土)が消滅したからである。

以上のように中・近世の成果が主流になるが、これもまた、「京都」の歴史を知る上で貴重な資料になると思う。 (竹井 治雄)

長岡京跡の発掘調査概要

はじめに

昭和56年度、当調査研究センターが主体となり、調査を担当した長岡京跡内における発掘調査は凡例のとおりである。



第19図 長岡京跡関係調査地位置図

4（凡例の表番号）は昭和53年度に行われた長岡京跡右京第12次の調査地の西に接する部分で、長岡京時代の溝、平安時代の建物跡などを検出した。5・6は共に学校敷地内での調査であるが、すでに学校建設の折、旧地表が削平されており、遺構は残存していなかった。7は道路建設予定地内という性格上、長岡京右京域内に南北に長いトレンチを入れるという様な形となった。3月末まで行った調査で、長岡京に伴う条坊関係の遺構を含め、多時期にわたる建物跡や井戸・溝などを検出した。8は主に今里車塚古墳を対象としたものである。調査によって後円部の一部および、前方部の一部を確認し、本古墳復元への新しい資料が得られた。9は長岡京跡の南辺に近いと考えられる位置であったが、長岡京関係の遺構等は得られなかった。しかし古墳時代の住居跡を確認し、当時の居住面の広がりを知る上での一資料が得られた。10は国道171号線沿いに幅の狭いトレンチを入れた。長岡京時代の遺物が検出されたが、顕著な遺構は確認できなかった。

当センター以外の機関が担当した長岡京内での発掘調査も多く行われた。宮内第100次調査では長岡京に関連する築地の構造が明確化され、宮内第109次では朝堂院西第1・2堂が検出された。右京第77次・第90次の調査では、それぞれ西一坊大路、西二坊大路の側溝が確認されるなど、条坊関係遺構もいくつか調査された。また左京第82次調査で、銅鐸鋳型が発見されるなど、長岡京以前の好資料も増加している。

（長谷川 達）

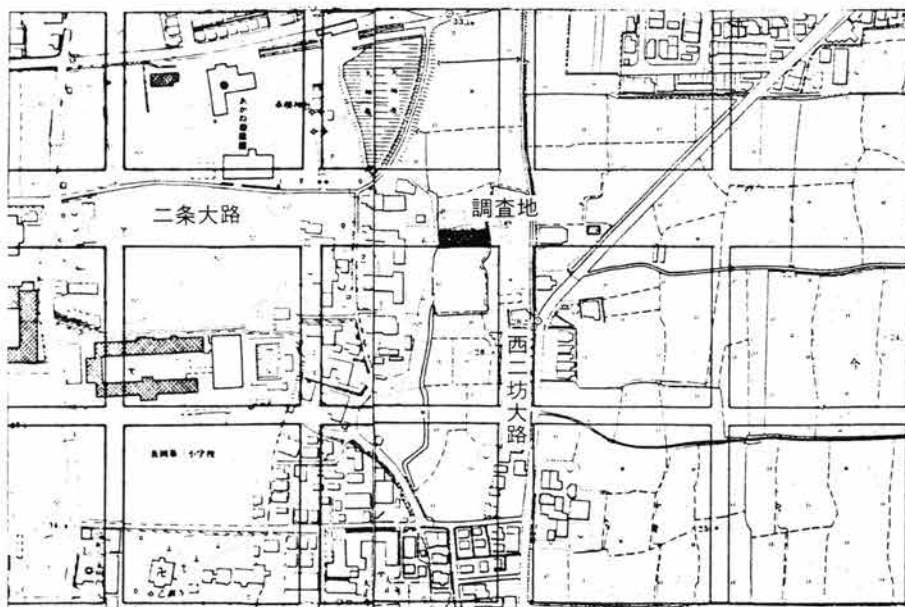
4. 長岡京跡右京第76次発掘調査概要

(7 ANITT IV 地区)

1. はじめに

京都府土木部都市計画課が進めている外環状線街路改良工事に伴う土地買収の為の代替地が、長岡京市今里四丁目に設けられ、その地が長岡京跡の一部に当ることから、土地造成を行う京都府土地開発公社から依頼を受け、遺構の有無を確認し記録保存を図るとともに、重要な遺構が検出された場合には、保存の為の資料を作成することを主な目的として調査を行った。当該地は、長岡京市井ノ内から大山崎町下植野に至る河岸段丘の縁辺に東接し、長岡京跡の推定二条大路に当る。また、当該地に西接して、弥生時代から古墳時代、そして平安時代の集落を検出した外環状線 I T T 北部地区^(注1)の調査地がある。こうしたことから、当該地では、長岡京の遺構の他、平安時代や古墳・弥生時代の遺構の検出も期待された。

調査は、造成地のうち幅 6 m の道路部分を対象とし、当センター調査員山口 博・小山雅人が担当し昭和56年6月5日から始め、その後梅雨の長雨にたたられながら、7月25日まで



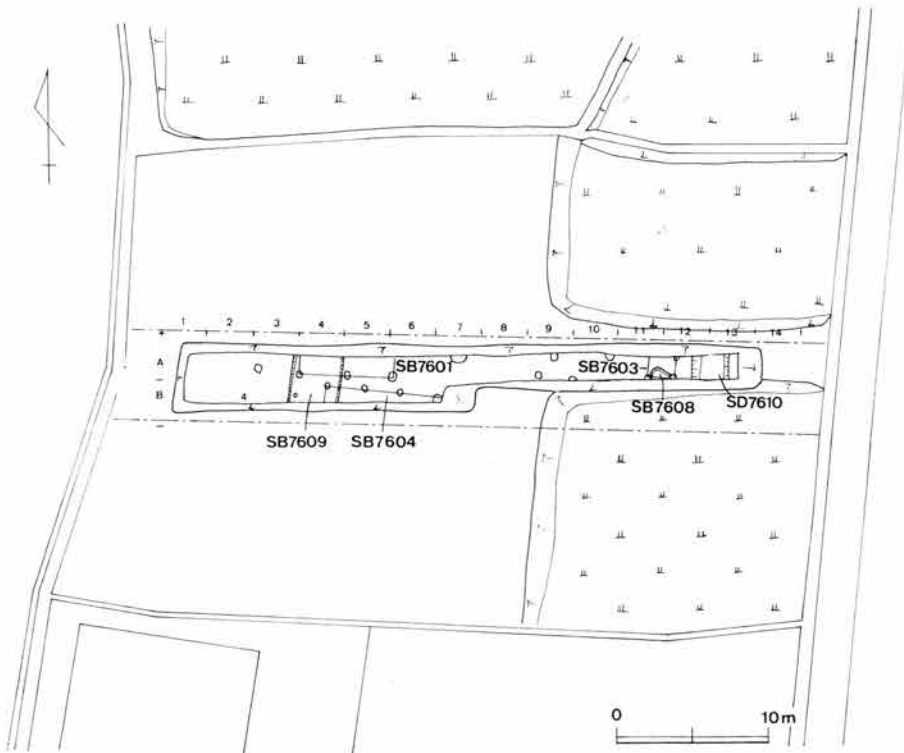
第 20 図 調 査 地 位 置 図

実施した。その間、橋本 稔・徳網克己・高島 登・上野 真・小塩礼子の各氏には、調査補助員・整理員として参加いただき、長岡京市今里及び向日市鷄冠井町在住の有志の方々には^(注2)作業員として御労力を賜わった。また、長岡京市教育委員会及び長岡京跡発掘調査研究所からは、さまざまな御指導・御協力を得、京都府乙訓土木工営所には、調査の便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表したい。

2. 調査の経過

調査は、擁壁工事の関係やその他種々の事情から、造成地内の道路部分に幅4m、長さ18mのトレンチをまず入れ、その後進入路部分に幅2m、長さ20mのトレンチを入れることとなった。重機によって盛土を除去し、その後人力によって掘削に入った。

調査地の地区割は、調査地の北西端付近に任意の原点(1, A)を置き、そこを起点に東西南北に3m方眼に割り、原点(1, A)から東へ順に数字で、南へアルファベットをつけて地区割として、杭の北西の一角を持ってその地区名とした。



第21図 調査地平面図

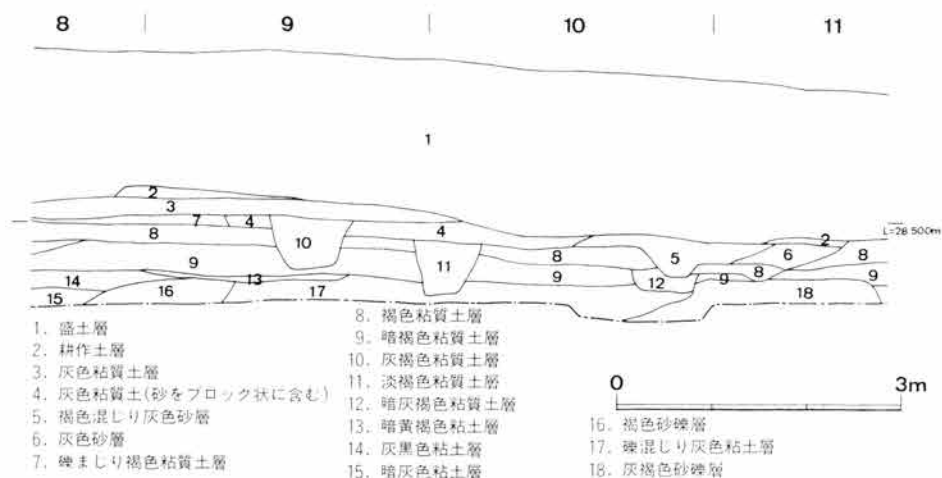
調査はまず、西の4m幅のトレンチの盛土を除去することから始めた。厚さ約150~180cmの盛土・耕作土を除去すると、西半部では、褐色の粘質土が、東半部では灰色の粘質土が検出された。この灰色の粘質土層は、褐色の粘質土層に乗っており、平安時代の遺物が出土した。そこで、人力により、この灰色粘質土層を除去し始め、褐色の粘質土層を検出し、この面で遺構検出作業を行ったが、6月中は連日の雨で水汲みに終止した。その後、この褐色の粘質土層の面でピットが切り込んでいることが判明し、東へトレンチを延長した。ここでも同様にいくつかのピットを検出し、この褐色粘質土の面で掘立柱建物跡3棟（S B 7602・7603・7604）を確認した。また、この面では、所々に砂層や砂礫層が堆積し、洪水を受けた形跡が認められた。

その後、図面作成・写真撮影を終え褐色の粘質土層を除去し、暗褐色粘質土の上面で遺構検出作業を行った。褐色粘質土層からは、長岡京期頃の遺物が出土し、暗褐色粘質土層の上面から切り込まれている南北方向の溝（S D 7606）をトレンチ東端部で検出した。この溝は、砂礫で埋まっており、また褐色粘質土層の上面と同様、暗褐色粘質土層の上面にも、所々砂層や砂礫層の堆積が認められた。

この後、暗褐色粘質土層の除去作業を徐々に行い、遺構検出作業を行った結果、竪穴住居跡2基（S B 7608・7609）を検出した。また、弥生時代の土壌1基（S K 7610）を認めた。

その後、図面作成・写真撮影を行った後に、トレンチ北壁と西壁に沿って、土層観察等の為の小トレンチを入れ、土層断面図を作成し、調査を終了した。

東接地の7ANITT地区では、耕作土・床土層の下に、平安時代の土器包含層である灰色粘質土層があり、その下層に長岡京期頃の遺物を含む褐色粘質土層が存在し、そしてその



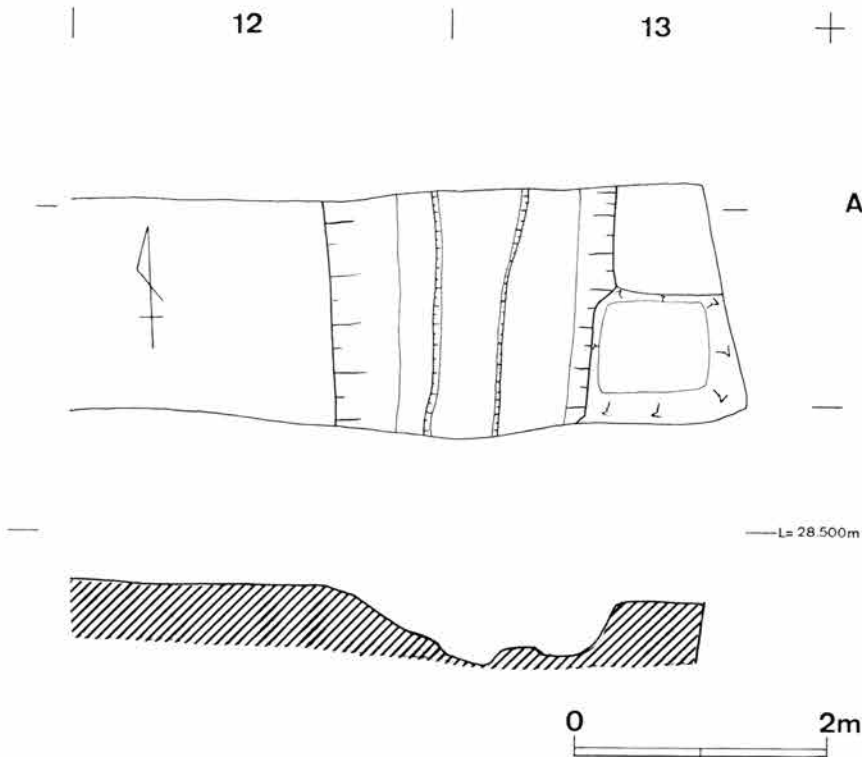
第22図 トレンチ北壁土層図

下に古墳時代や弥生時代の土器が出土する暗褐色粘質土層があって、地山の黄色粘土層となっていた。^(注3)しかし当調査地では、黄色粘土層はほとんど認められず、その下層の灰黒色粘土層が最下層の遺構面となっていた。また、平安時代の遺物包含層の灰色粘質土層も西へ行くと認められない。これらは、当該地が西の段丘と東の小畑川の氾濫原との丁度境に当り、西から東へ傾斜している土地の為、堆積していなかったり、後世の削平を受けた為であろう。当該地は、トレンチの西端部と東端部とで、暗褐色粘質土層の上面で約70~80cmの高低差を持っている。

3. 検出遺構

今回の調査地で検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟（S B7602・7603・7604）、南北方向の溝（S D7606）、竪穴住居跡2基（S B7608・7609）そして弥生時代の土壇（S K7610）などである。その他、若干のピットを検出しているが、建物跡としてまとまるには至っていない。

S B7602 は、トレンチ 西半部で検出したもので、東西方向に2間分検出した。柱間寸法



第23図 S D7606 実測図

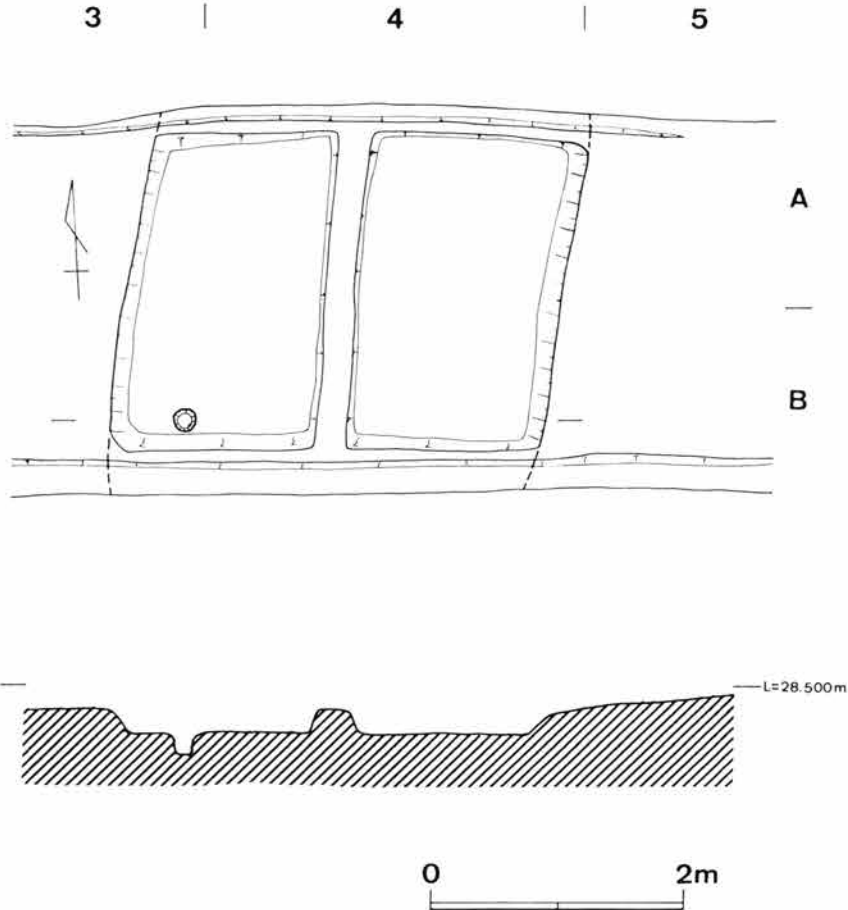
は約 270cm を測る。対応する柱穴はトレンチ外にも存在しているものと見られる。

S B7603 は、トレンチ 東端部付近で検出したもので、東西 1 間の建物跡である。南北方向は、トレンチ内では 1 間分を検出したのみで、トレンチ外へも延びているのであろう。柱間寸法は、東西約 150cm、南北約 180cm を測る。

S B7604 は、S B7602 の南側で検出した建物跡で、東西方向に 3 間分を検出している。北側で対応する柱穴が認められないことから、トレンチの南側の外に対応する柱穴が存在する模様である。柱間寸法は、約 240cm を測る。

これら 3 棟の掘立柱建物跡は、褐色粘質土層の上面で検出したものであり、平安時代の建物跡である。それぞれ、北に向かって少し東へ振って建てられている。

S D7606 は、暗褐色粘質土層の上面で検出した溝で、ほぼ南北方向に流れている。大部分砂礫で埋められており、溝中からは、軒平瓦（第25図-24）や須恵器杯身（第25図-18）、円



第 24 図 S B7609 実 測 図

面硯(第25図-19),土師器皿(第25図-5)などが出土している。幅約230cm,深さ約60cmを測る。底面のやや西よりに,幅約50cm,深さ約20cmを測る浅い溝状の落ち込みを持っている。この部分が恐らく,常時水の流れていた部分であろう。この溝からは,平城京の軒平瓦や長岡京期頃の土器が出土しており,また東接地の調査で長岡京の西二坊大路の西側溝を検出しているところから,この溝は西二坊大路の西側溝であろう。

S B7608 はトレンチ東端部付近で, S B7603 の下層から検出された。東北コーナー部分のみがトレンチ内にあり,他はトレンチ外であるので,長さ等は不明である。深さは約30cmを測る。

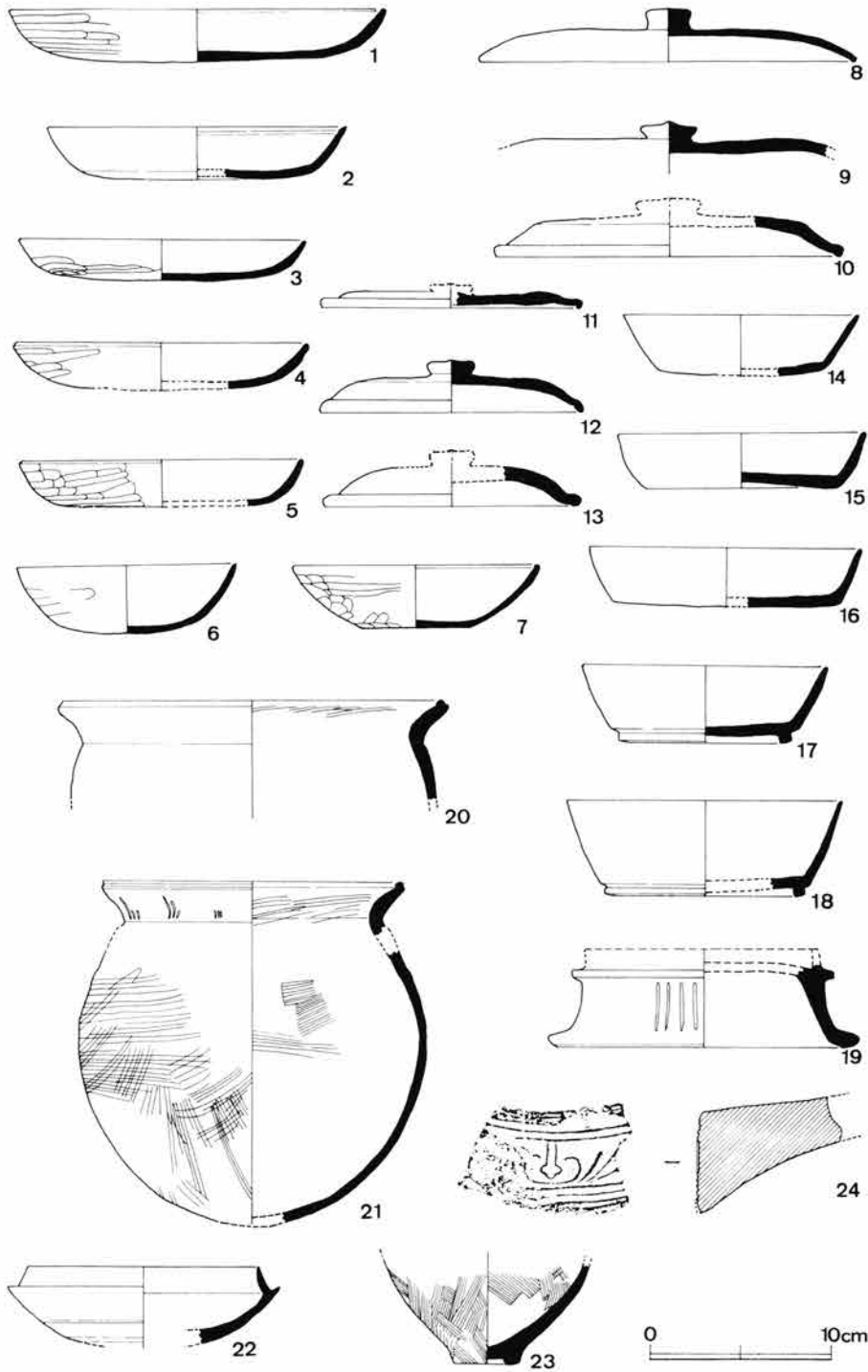
S B7609 は, 4 m幅のトレンチのほぼ中央部近辺で検出したものである。南北の端は,トレンチ外にそれぞれある。東西長約380cmを測り,深さは検出時点で約20cmある。住居跡西南部で柱穴を1個確認した。遺物は,古墳時代頃の土師片が出土しているが,みな破片が小さく,調整等は不明のものが多く,詳しい年代は判らない。ただ,暗褐色粘質土を掘り下げ中,この住居跡の上から須恵器の杯身(第25図-22)が出土しており,東接地の調査でも述べられているように,古墳時代の遺構は暗褐色粘質土層の途中から切り込まれているが,土層の識別が困難であり,削り過ぎて初めて検出できるという状態から,この遺物も, S B7609 に伴うものの可能性がある。

S K7610は, 4 m幅と2 m幅のトレンチの境付近で検出したもので,トレンチ北側に半分以上出ている。東西長約120cm,深さ約50cmを測る。境内からは,弥生式土器の甕(第25図-23)等が出土している。

4. 出土遺物

今回の調査では,弥生式土器や土師器・須恵器・瓦や円面硯などが出土している。

土師器は,皿(1・3~5),碗(6・7),蓋(8),甕(20・21)などが出土している。1は,外面全面にヘラ削りを施し,口縁端部は内側に少し肥厚している。3は,底部外面と体部下半にヘラ削りを施し,口縁端部は丸くおさめている。4は,外面全面にヘラ削りを施し,口縁部は外傾する端面を有している。5も外面全面にヘラ削りを施し,口縁部は,外傾する端面を持っている。6・7は外面全面にヘラ削りを施し,6はやや丸底風の底部を持ち口縁端部を丸くおさめ,7はやや平底で,口縁端部を内側に折り返して肥厚させている。8は,つまみを有し,口縁端部を内側に折り返して肥厚させている。調整は,器表の荒れが激しく大部分残っていないが,外面はヘラ削りを施した後にヘラミガキを行い,内面はナデている。20は,口頸部を「く」の字状に外反させ,端部は,外傾する端面を有し,内側へ肥厚してい



第25図 出土遺物実測図

1, 3, 4, 6~9, 11~13, 15~16. 褐色粘質土層 2, 10. 灰色砂層 5, 17~20, 24. S D7606 22. 暗褐色粘質土 21. ピット 23. S K7610 1, 3~9, 20, 21. 土師器 2, 9~18, 22. 須恵器 19. 円面硯 23. 弥生式土器 24. 軒平瓦

る。調整は、口縁部内面に横方向のハケ目を施してあるのが読みとれるが、残りは、剥落していて不明である。21は、やや球形の胴部に「く」の字状に外反する口頸部を持ち、胴部外面には不定方向のハケ目を施し、口頸部外面は縦方向のハケ目を施した後横ナデを行っている。口頸部内面は横方向のハケ目を施し、胴部内面は、ハケ目を施した後、ナデつけている。

須恵器は、杯身(2・14~18・22)、杯蓋(9~13)などが出土している。杯身は、高台を有するもの(17・18)と高台を有しないもの(2・14~16)がある。2は、高台を持たず、平底の底部から外上方にはほぼ直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に沈線を有している。口縁部・体部外面及び内面には回転ナデを施している。14~16も、平底の底部から直線的に外上方に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸くおさめている。15は、底部がやや上げ底風を呈する。口縁部・体部外面及び内面には回転ナデを施す。17・18は、ともに体・底部の境のやや内側に高台を有し、外上方に直線的に立ち上がる体部を持つ。口縁端部は丸くおさめ、体部外面・口縁部及び内面には回転ナデを施している。9は、平坦な天井部につまみを有し、口縁部は欠失している。10・11は、平坦な天井部と内側に屈曲する口縁部からなり、11は全体に扁平である。13は、やや丸味を帯びた天井部を有している。12は、平坦な頂部にやや扁平な宝珠つまみを有し、屈曲した口縁部を持つ。22は、丸味を帯びた底部を持ち、口縁部は内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめ、受部は外上方にのびる。底部及び体部下半には回転ヘラ削りを行い、他は回転ナデを施している。

硯(19)は、須恵器の円形の硯で、硯面の周囲には一段高い圏線がめぐり、脚部の裾は外方へ屈曲している。硯足には、細長い透し孔を持っている。

23は、弥生式土器の甕の底部で、内外面にハケ目を施し、底部は上げ底状を呈している。

24は、平城宮式の6663形式の軒平瓦である。

以上の遺物のうち、5・17・18・19・20・24はSD7606から、23はSK7610から出土したものである。21もピット内から出土したものであるが、そのピットはトレンチ幅が狭小の為対応するピットが認められず、建物跡としてはまとまっていない。残りは、包含層中からの出土であるが、2・14は灰色の砂層から、22は暗褐色粘質土層から出土した以外は、褐色粘質土層から出土したものである。

5. 小 結

今回の調査では、平安時代の掘立柱建物跡3棟(SB7602・7603・7604)、長岡京期頃の南北方向の溝(SD7606)、古墳時代の竪穴住居跡2基(SB7608・7609)そして弥生時代の土壇(SK7610)を検出した。特にSD7606は、位置関係からみて西二坊大路の西側溝で

ある可能性が高い。また、今回の調査でも、東接地の7ANITT中央部地区^(注6)の調査で検出した平安時代や古墳・弥生時代の集落の跡を検出した。当調査地は、西方の段丘と以前の調査地との間にあり、今回の調査で段丘のすぐ横まで集落の及んでいることが判明した。今後調査が進めば、この集落の範囲がどこまで及んでいたのかが明確となつてこよう。特に、段丘上との関係が注目される。 (山口 博)

(注1) 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会)1980

(注2) 今回の調査に参加していただいた作業員の方は下記の通りである。(敬称略)
小山陽太郎, 山田 真一, 橋本 洋一, 中小路徳造, 大根 精一, 能勢 龍一

(注3) 注1に同じ

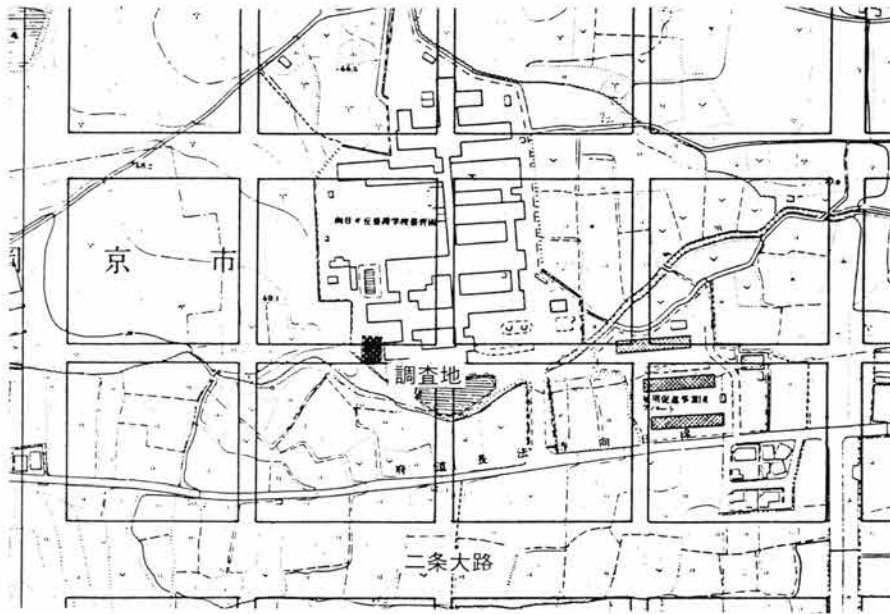
(注4) 注1に同じ

(注5) 注1に同じ

(注6) 注1に同じ

5. 長岡京跡右京第78次発掘調査概要 (7 ANGAR II 地区)

1. はじめに



第26図 調査地位置図

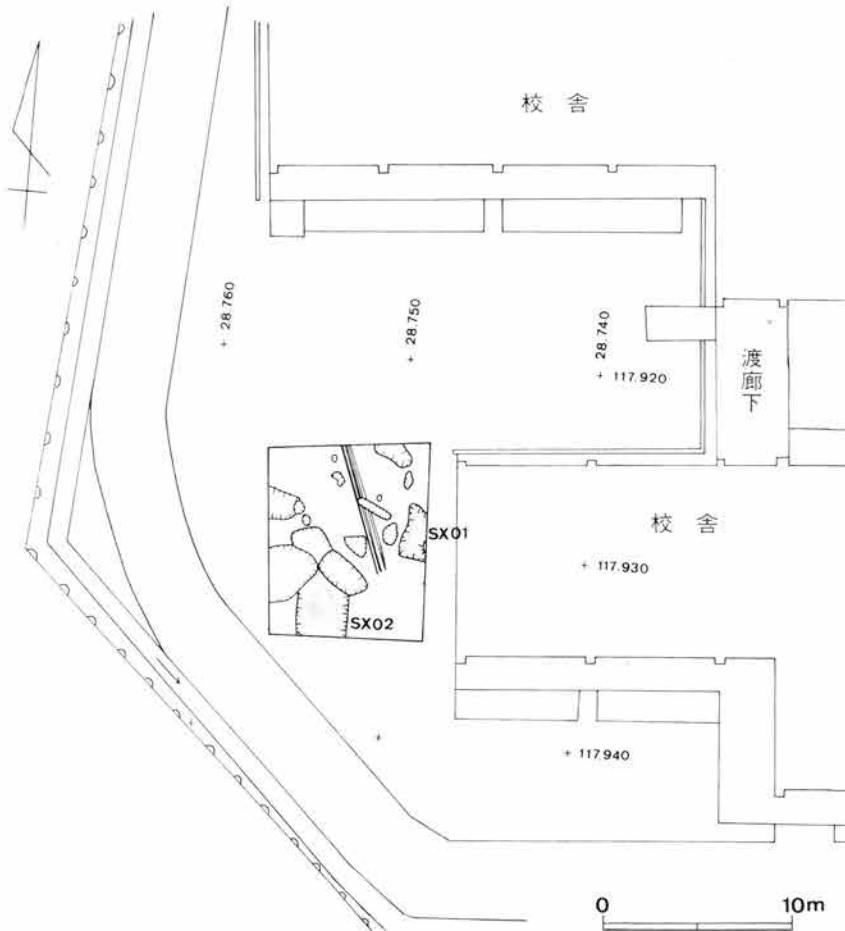
今回、京都府立向日ヶ丘養護学校においてプレイルーム建設の計画が持ち上がり、当該地が、長岡京跡の推定二条四坊の地に相当するところから、遺構の有無を確認し、記録保存を図るとともに、必要な場合には保存の為の資料を作成することを主な目的として、調査を実施した。調査を実施した向日ヶ丘養護学校は、長岡京市井ノ内朝日寺に位置し、周辺には、弥生時代等の集落跡である井ノ内遺跡や前方後円墳の狐塚古墳が存在している。また昨年度本養護学校のグラウンドの東端部が発掘調査され、中世の掘立柱建物跡や古墳時代の旧流路が検出されている^(注1)。今回の調査地は、前年度調査地の西南約80mの所で、養護学校敷地の西南端に位置している。調査地の西方は竹林となっており、その竹林より調査地は現在2～3m低くなっている。

現地調査は、昭和56年8月3日から8月18日まで行い、調査補助員として橋本 稔・上野 真・小熊秀明氏、整理員としては小塩礼子氏の参加を得、向日市鶏冠井町有志の方々には作業^(注2)

員として御勞力を賜わった。また現地の向日ヶ丘養護学校には種々調査の便宜を図っていた
 だき、長岡京跡発掘調査研究所の方々や京都大学理学部地質学鉱物学教室研修員 橋本清一
 氏には、さまざまな御協力・御指導をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

2. 調査の経過

プレイルーム建設予定地に8m×10mのトレンチを入れ、重機により盛土を除去した。盛
 土は厚さ約30cmあり、これを除去したところで黄色粘土層の地山を検出し、以後人力により
 遺構検出作業にはいった。この黄色粘土層の面で、遺構精査を行った結果、褐色の砂礫で埋
 まった土壌状の落ち込み2か所（SX01・02）の他には、盛土と同様の土で埋まった現代の



第27図 調査地平面図

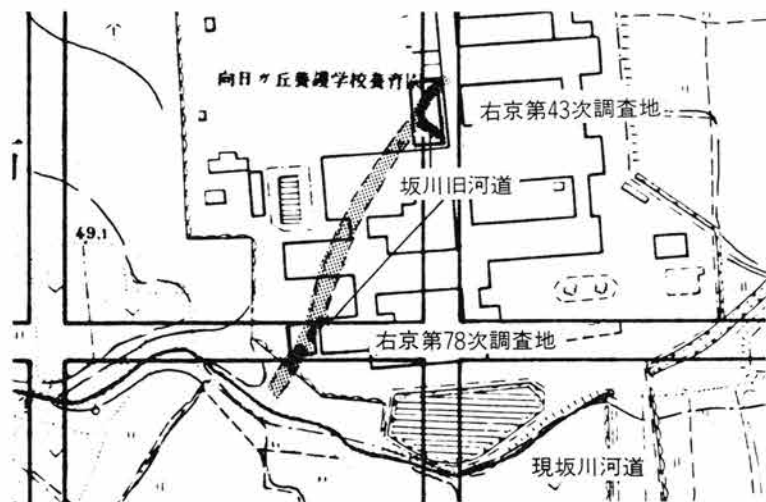
攪乱墳や重機の爪跡と思われる3本の平行に走る溝状のものを確認したにとどまった。重機の爪跡状のものや、現代の攪乱墳は、養護学校造成時のものと考えられる。現在、調査地は西側の竹林よりかなり低くなっており、この養護学校造成時にかなりの削平を受けた模様である。

褐色の砂礫で埋まった土壌状の落ち込み(SX01・02)は、SX01が南北長約300cm,東西長約140cm以上,深さ約60cmを測り、SX02が東西長約260cm,深さ約15cmを有している。ともに遺物の出土は皆無であったが、橋本清一氏の御教示によれば、前年度調査を行った右京第44次調査(7ANGAR地区)において検出した古墳時代の旧流路(SD4308・4309)^(註3)と同じ砂礫で埋まっているとのことであった。こうしたことから、今回検出したSX01・02も、古墳時代頃の旧流路の一部である可能性が強く、養護学校造成時に削平を受けて、流路の深い部分が一部残存したものであろう。

これらの遺構を掘り上げ、写真撮影・実測図作成を行い、トレンチの西壁と南壁に沿ってサブトレンチを入れ、下層に遺構等のないことを確認したうえで、現地調査を終了した。

3. 小 結

今回の調査においては、古墳時代頃の流路の一部と考えられる土壌状の落ち込み(SX01・02)の他は、上述の様に攪乱墳を検出したにとどまった。養護学校建設時に、大幅に削平を受けたものとみられ、現在の時点では、前記の流路の一部の削り残された部分を除き遺構



第28図 右京第44次・78次調査位置関係図

は存在していない。ただ、S X01 や 02 に、その姿を留めている旧流路は、現在養護学校の南を流れる坂川が、古墳時代頃当調査地あたりから、右京第44次調査地あたりへと養護学校西側の竹林を迂回しながら、養護学校内を東北流していたことを示すものであろう。

（山口 博）

（注1）引原茂治他「長岡京跡 昭和55年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財 発掘調査概報（1981-1）』京都府教育委員会）1981

（注2）調査に参加・協力いただいた作業員の方は下記の通りである。（敬称略）

橋本 建一、大根 清一、五十棲春一、山内 芳治、中小路徳造、木村 芳久、古谷 幸一

（注3）注1に同じ

6. 長岡京跡右京第79次発掘調査概要

(7 ANNKN 地区)

1. はじめに



第29図 調査地位置図

今回の調査は、京都府立乙訓高等学校の武道館建設に伴い、当地が長岡京跡の推定右京七条二坊の一部に当ることから、遺構の有無を確認し記録保存を図るとともに、必要な場合には保存の為の資料とすることを主な目的として実施した。当該地は、長岡京市友岡1丁目1-1に存在し、長岡京市井ノ内から大山崎町下植野に至る比高数m程度の河岸段丘の縁辺に位置し、調査地のある乙訓高校を挟み、その外の東と西ではかなりの比高差を持っている。調査地の西、道路を距てた地は一段かなり高くなっており、乙訓高校東側の現水田は、3m以上低くなっている。こうしたことから、乙訓高校の敷地は、その前身である競馬場造成時に西側の段丘を削り、東側の低地を埋めて造成したものらしく、今回調査地周辺は、造成時に削平を受けている可能性がある。ただ周辺からは弥生式土器の採集もあり、乙訓高校の東北の隣接地では、試掘調査によって弥生時代の遺構・遺物が検出・出土している。また、南方のこの乙訓高校が存すると同じ段丘上には、友岡廃寺が存在し、また古墳時代の住居跡が

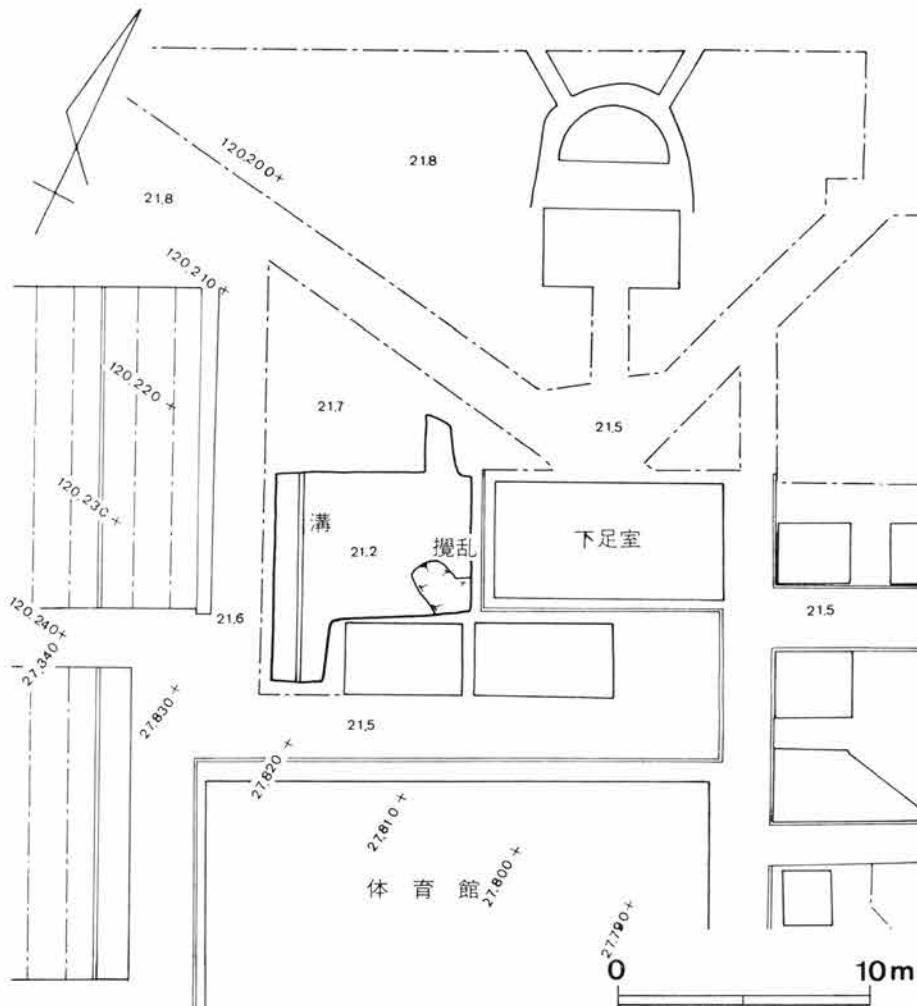
(注1)

(注2)

検出されている。当該地も、競馬場造成時の削平がそれ程ひどいものでなければ、遺構等の残存している可能性は高い。

現地調査は、昭和56年8月19日から8月31日まで行い、調査補助員として橋本 稔・上野真・小熊秀明の諸氏、整理員として竹原京子・森井千佳子の兩名の参加・協力を得た。また、向日市鶏冠井町在住の有志の方々^(注3)には作業員として御労力を賜わり、乙訓高校からは調査の為の便宜を図っていただいた。さらに長岡京跡発掘調査研究所からは、御指導・御協力を得た。記して謝意を表したい。

2. 調査の経過



第30図 調査地平面図

武道館建設予定地に、11×15mのトレンチを入れ、一部南と北へ4m幅のトレンチを拡張した。重機により盛土を除去し、以後人力で掘削に入った。厚さ約30～50cmの盛土を除くと、地山と思われる礫の混じった黄褐色の粘土層となる。この面で遺構精査を行ったところ、幅約30cmの南北に延びるコンクリート製の溝とトレンチ南東部で短径約240cm長径約540cm深さ約15cmの浅い現代の土壇状の落ち込みを検出した。それぞれ遺物は現代のものが極く少量出土したのみである。現在の乙訓高校は、前述した様に競馬場の跡地を利用したもので、現在もその形跡をとどめている。このコンクリート製の溝は、乙訓高校の西側の境界とほぼ平行して走り、おそらく競馬場当時の馬場の内側の排水溝であろう。現代の土壇状の落ち込みは、競馬場から高校となる時に、若干の盛土をして建設した際の盛土工事の時にできたものであろう。盛土と同様の土が落ち込んでいた。

その後、トレンチの南壁と西壁に沿って小トレンチを入れ深掘りを行い、下層に遺構面の存在していないことを確認した。

3. 小 結

今回の調査地では、南北方向に走るコンクリート製溝と現代の攪乱墳を検出したにすぎない。コンクリート製の溝は、競馬場の馬場の内側の側溝と考えられ、前述した様に、競馬場建設時に調査地一帯の高校敷地西半部にかなりの削平を行い、東半部を埋めて造成したものであろう。こうしたことから、高校敷地西半部においては、遺跡の残存する可能性は薄い、東半部においては、昨年度の試掘調査の結果等からも、遺跡の残っている可能性はかなり高い。

(山口 博)

(注1) 長岡京跡右京第56次発掘調査 長岡京市調査員戸原和人氏の御教授による。

(注2) 長岡京跡右京第62次発掘調査 長岡京市調査員山本輝雄氏の御教授による。

(注3) 調査に従事していただいた作業員は下記のとおりである。(敬称略)

橋本 建一、中小路徳造、大根 清一、山内 芳治、木村 芳久、古谷 幸一、五十棲春一

7. 長岡京跡右京第83次発掘調査概要

（7 ANINC 地区）

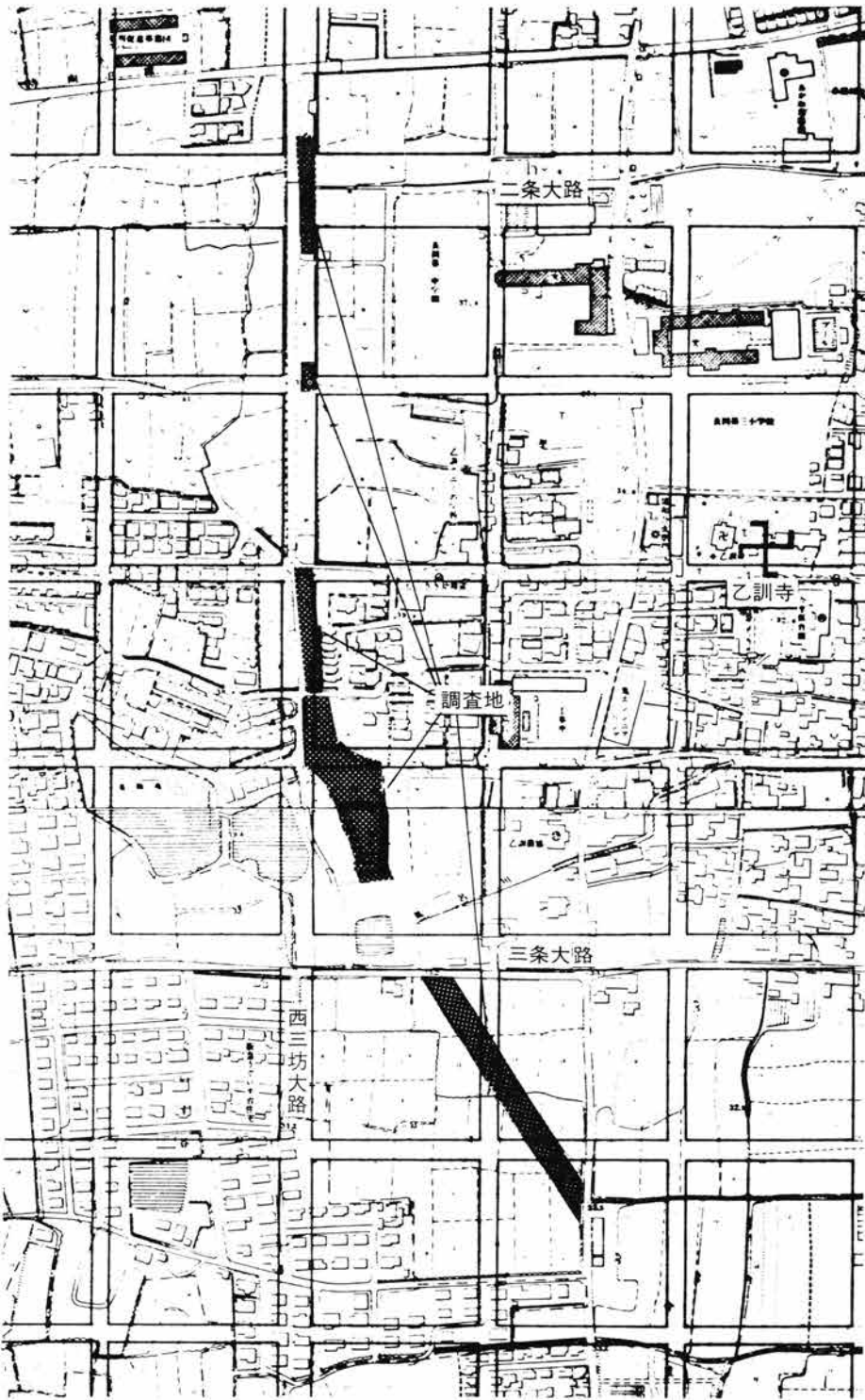
1. はじめに

長岡京市では、都市計画街路石見・淀線の街路改良工事の計画があり、当該地が桓武天皇によって延暦3（784）年から延暦13（794）年まで都の置かれた長岡京の跡の一部に当たっているところから、長岡京市都市計画課と長岡京市教育委員会が協議を行い、遺構の有無を確認し、記録保存を図るとともに、重要な遺構を検出した場合、保存の為の資料を作成することを主な目的として当調査研究センターに調査の依頼をし、実施した。

調査地は、長岡京市井ノ内から大山崎町下植野に至る比高数mの河岸段丘上に位置し、前記の長岡京跡の他に、弥生時代から平安時代までの集落跡である今里遺跡に当たっている。また弥生式土器等の散布地である井ノ内遺跡に近接し、東方には白鳳時代（奈良時代前期）の古瓦が出土する乙訓寺（注1）が存在する。こうしたことや、都市計画街路予定地における下水道幹線埋設の立杭掘削にともなう立合調査の結果から、長岡京の条坊や弥生時代から中世にかけての集落跡、そして古墳の存在などが期待された。

調査は、長岡京市教育委員会、長岡京市都市計画課、京都府教育委員会等が協議を行った結果、今年度は今里西ノ口一帯と今里藤ノ木の地区を中心に行い、すでに擁壁工事が行われた今里蓮ヶ池のあたりに、試掘調査の為のトレンチを3か所入れることとなった。そして、調査の実施は長岡京市都市計画課から委託を受け、当調査研究センターが行った。

調査は、昭和56年10月26日から始め、昭和57年3月25日までの予定で当センター調査員長谷川 達・山口 博・小山雅人・竹井治雄が担当した。その間、調査補助員・整理員として石原德行、岩間信哉、岡井 透、岡崎文和、小野康裕、川端慶司、五島 勝、坂本 守、篠原俊一、秀野恒弘、園山隆輔、高島利洋、竹田 満、田村泰造、中尾雅之、中村洋平、畑 哲史、肥後弘幸、福富 仁、森村 敦、世統武彦、赤司 紫、和泉まゆみ、臼井千映子、岡田裕子、小倉美奈子、甲斐富美子、木戸裕美、木村美智代、小浦千歳、小塩礼子、楠原弘美、砂山ちさと、竹原京子、田村昌子、出口ひとみ、中西 恵、中村美也、伴 圭子、藤井純子、藤野雅世、藤原千草、村崎夏美子、吉沢素子、川上淑子、木倉千恵子、古住和子、山本ヒナ子、白井和子の各氏の参加を得、向日市・長岡京市在住の有志の方々には、作業員（注3）として御労力を賜わった。また所長の中山修一先生はじめ、長岡京跡発掘調査研究所からは、



第31図 調査地位置図

数々の御協力・御指導を得、長岡京市教育委員会及び長岡京市都市計画課からは、調査の実施に当って便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。

調査は、今尚、南方部の地区を中心に続行中であり、今回の報告は北方部の調査地区を中心にA～Kまでの各トレンチ（第32図参照）のうちA～Hまでのトレンチの現状での主要な検出遺構等を概略報告する。

2. 調査の概要

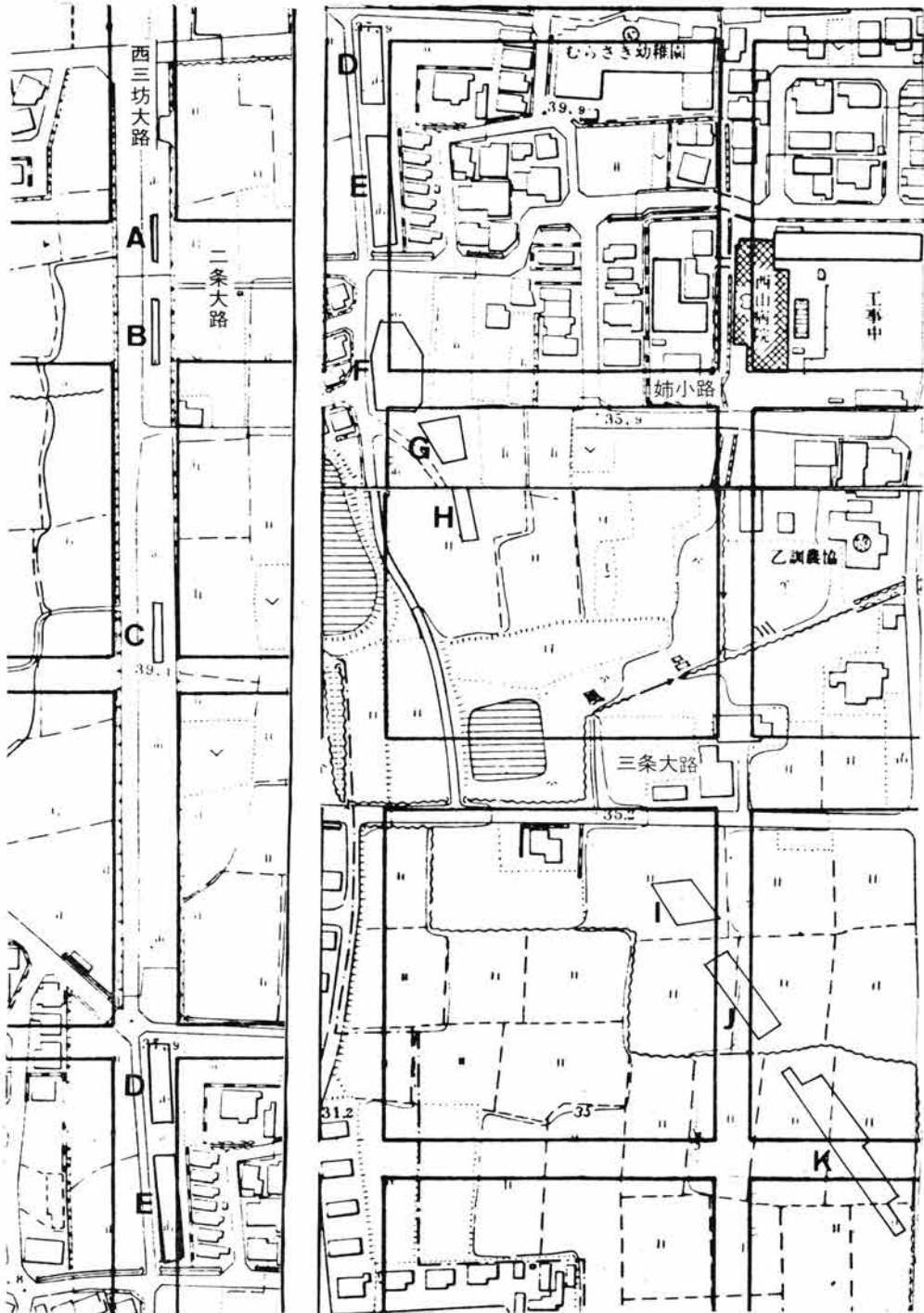
調査は、前記したように昭和56年10月26日から始め、第32図に記してあるようにA～Kのトレンチを入れ、北方のAトレンチから順次掘削にはいった。その結果、古墳時代の土壙や奈良時代頃の掘立柱建物跡・井戸跡、そして長岡京の条坊の側溝と考えられる溝などを検出した。また他には、中世頃の小さな自然流路や古墳時代から奈良時代頃の遺物が出土する大きな流路を検出している。

A・B両トレンチを中心とする北方部地区では、南北方向に流れる中世の遺物が出土する溝状遺構（S D8302・8303）と東西方向及び南北方向に流れる奈良時代頃の遺物が出土する溝（S D8301・8315）柱穴群、そして古墳時代の土壙（S K8318）、溝（S D8317）等を検出した。その後、AトレンチとBトレンチを長岡京市都市計画課と協議した後、一部拡張した。

Cトレンチは、土壙（S K8320）の他は若干のピットを検出したにとどまった。

これらA～Cトレンチでは、耕作土層の直下で遺構面となっており、遺物包含層はほとんど存在せず、後世の削平をかなり受けている可能性が強い。そして、これらA～Cの各トレンチに関しては、工事等の関係から12月に関係者への説明会を開き、埋め戻した。

中央部のD～Hトレンチでは、奈良時代を中心とする多くの掘立柱建物群（S B8321・8322・8323・8324・8325・8326・8328・8329・8330・8335・8339・8351・8352・8353・8357・8358・8360・8376）と井戸跡（S E8332）、溝（S D8331・8333・8334・8355・8362・8363・8364・8375）柵列（S A8359）と S K8338 などの多数の土壙を検出している。これらの遺構のうち掘立柱建物群は、大きく分けてほぼ真南北の軸線にのるものと、大きく真南北の軸線から振れている二つのタイプがある。溝のうち、S D8355 と中世の遺物が出土する S D8375 は、ほぼ真東西方向へ流れているが、それ以外は東北方向や東南方向へ流れている。また F～Hトレンチでは、灰色粘質土で埋まった中世の遺物が出土する溝群と奈良時代頃の柱穴と同じ暗褐色粘質土で埋まっている溝群を多数検出している。これらの溝群は幅約15～20cmで、深さ約 5～10cm のもので、灰色・暗褐色粘質土で埋まった溝とも現在の畦畔とはほぼ同様の方向性を持っており、奈良時代を中心とする時期の柱穴を切っている。



第32図 トレンチ位置図

南方部では、I・J両トレンチにおいて、多数の柱穴を検出し、現時点において、Jトレンチ東南部付近ではほぼ真南北の軸線にのる総柱の掘立柱建物跡2棟を確認している。Iトレンチでは、中世の遺物を含む黄色混じりの灰色粘質土の大きな落ち込みがあり、柱穴は、Jトレンチほど多くは検出されていない。中近世頃の削平の為に失われたものかと思われる。Kトレンチでは、その北端部近くで、幅約12.3mある流路を検出し、流路中からは、古墳時代から奈良時代の土器や流木などが出土している。また、この流路の南方からは、黄色粘土と黒色粘質土がブロック状に含まれている土壌を多く検出したが、掘立柱建物跡はトレンチ内には存在していない。黄色粘土と黒色粘質土をブロック状に含む土壌中からは、遺物の出土がほとんどみられなかった。ただ、黒色粘質土で埋まった土壌中から、埴輪片などが出土したことは、以前の立合調査での調査結果^(注4)のように、この近辺に古墳が存在していたことを十分に窺わせる。

今年度の調査では、以上のような調査結果を得た。次章以下に、A～F及びHトレンチの主要な遺構と若干の遺物について述べる。

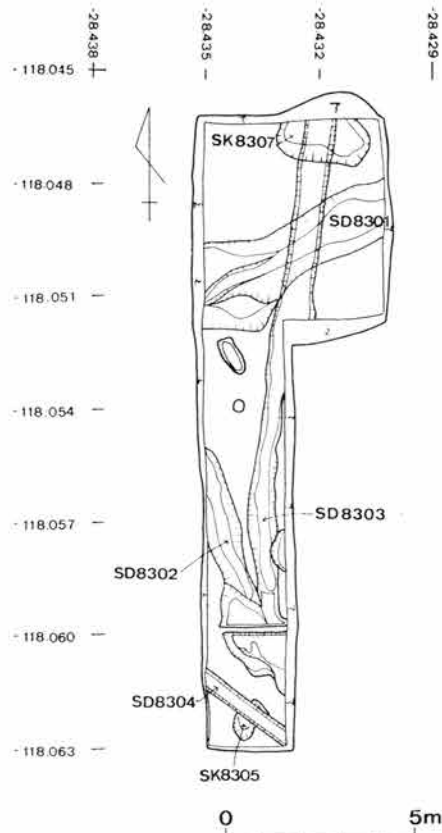
3. 検出遺構

Aトレンチ（第33図）

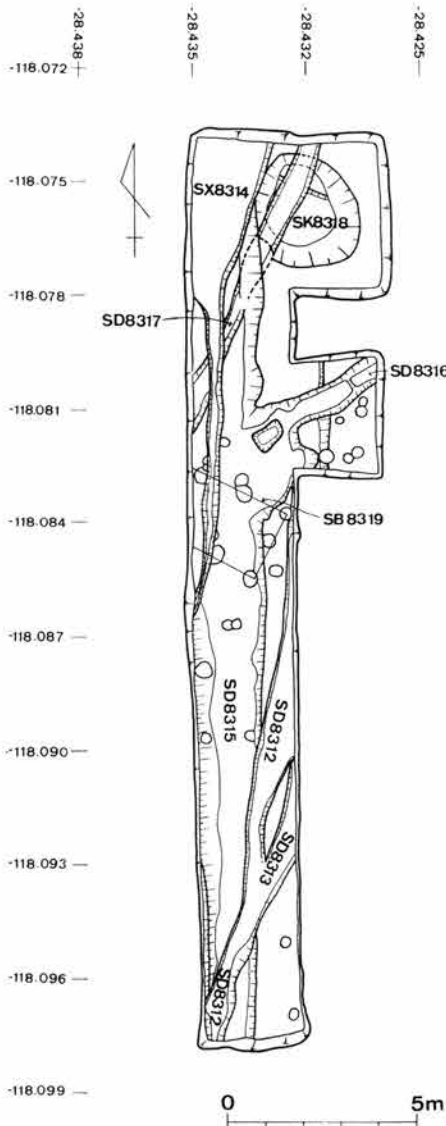
Aトレンチでは、東西方向の溝（SD8301）と南北方向の溝（SD8302・8303）、東南に流るれ溝（SD8304）等を検出した。

SD8301は、砂礫で埋まっており、非常に磨滅した奈良時代の須恵器の小片が若干出土し、幅約150cm、深さ約30cmを測る。当初長岡京の二条大路の側溝である可能性も考えられたが、東側へ拡張した結果、東北方向へ屈曲して流れており、二条大路の側溝である可能性は消えた。

SD8302・8303は、褐色混じりの灰色粘質土や砂で埋まっており、層中から瓦器片が出土した。SD8302は、幅約30～40cmを測り、深さは凹凸があり、約10～30cmを有している。SD8303は、幅約30cm、深さ約10cmを測り、SD8302に合流している。SD8302からは、瓦器片の他



第33図 Aトレンチ平面図



第34図 Bトレンチ平面図

に土馬(第40図-25)が出土した。
SD8304は、幅約30cm、深さ約5cmの浅い溝状遺構で灰色の砂で埋まり、やはり瓦器片が出土した。

SK8305は、拡張部の北端部で検出したもので、東西径約200cmを測り、深さ約30cmを有する。SD8301と同様の砂礫で埋まり、遺物の出土はなかった。

Aトレンチで検出した溝は、以上の結果から自然流路である可能性が高い。

Bトレンチ(第34図)

Bトレンチからは、古墳時代の土壌(SK8318)と溝(SD8317)そして、奈良時代頃の遺物が出土した溝(SD8315)、その溝に先行する掘立柱建物跡(SB8319)、黒色粘土で埋まった浅い落ち込み(SX8314)、中世の遺物が出土した溝(SD8312・8313)を検出した。

SD8312・8313は、東北から南東へ延びる深さ約5~10cmの浅い溝で、途中で合流し、幅は約30~40cmを測っている。

SX8314は、黒色粘土で埋まった深さ約10~15cmの浅い落ち込みで、南方へ溝状に延びている。恐らく、浅い沼状のものであったと思われる。

SD8315は、南北方向に延びる幅約120cm以上、深さ約15cmの溝で、肩もゆるやかに落ちている。溝中からは、奈良時代頃の遺物が出土し、東北方から幅約30cmを測る溝(SD8316)が流入している。

SB8319は、南北1間、東西2間以上の掘立柱建物跡で、柱間寸法は南北約180cm東西150cmを測る。

SD8317は、SK8318を切って存在し、西南方向へ延びている。幅約30cm、深さ約15cmを測る。溝中からは、古墳時代末の須恵器高杯(第40図-24)などが出土している。

S K8318は、径約250cmを測り、深さ約80cmを有する。北側に、幅約40cmの段を一段有している。この土壌中からは、古墳時代の須恵器の杯身（第40図—22・23）杯蓋（第40図—18・19・20・21）などが出土している。

Cトレンチ（第35図）

Cトレンチからは、いくつかのピットの他は、径約50cm、深さ約30cmを測る小土壌（S K8320）を検出したにすぎない。この土壌中からは、宝珠つまみを持ち、内面の返りを有する須恵器の杯蓋が出土している。

トレンチ中央部付近で、一辺約40cmの方形掘方を有する柱穴を検出し、一部拡張してその柱穴に続くものを探したが、対応するような柱穴は確認できなかった。このトレンチでは、耕作土直下で地山の黄色粘土層となっており、また柱穴の深さも約10cmしか残存していないので、対応する柱穴は後世の削平により失われた可能性がある。

Dトレンチ（第36図）

Dトレンチでは、現在掘立柱建物跡6棟を検出している。

S B8321 は、南北4間、東西2間以上を有し、柱間寸法は南北で約180cm、東西で約210cmを測る。

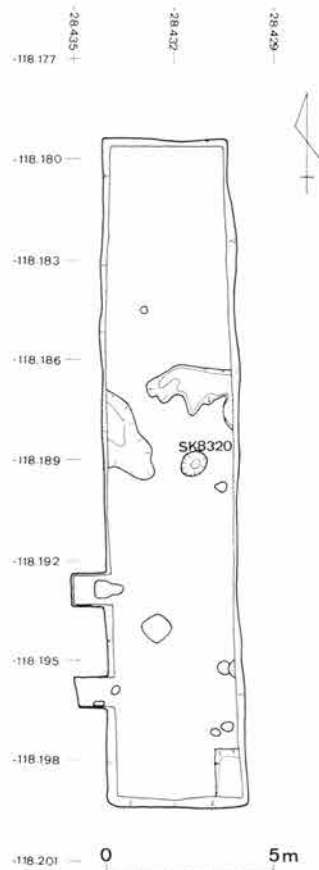
S B8322 は、南北1間、東西2間以上の規模を持ち、柱間寸法は南北約180cm、東西180cmと210cmを測る。

S B8323 は、S B8321 などの南で検出したもので南北1間、東西1間以上の規模を有し、柱間寸法は、南北約150cm、東西約180cmを測る。

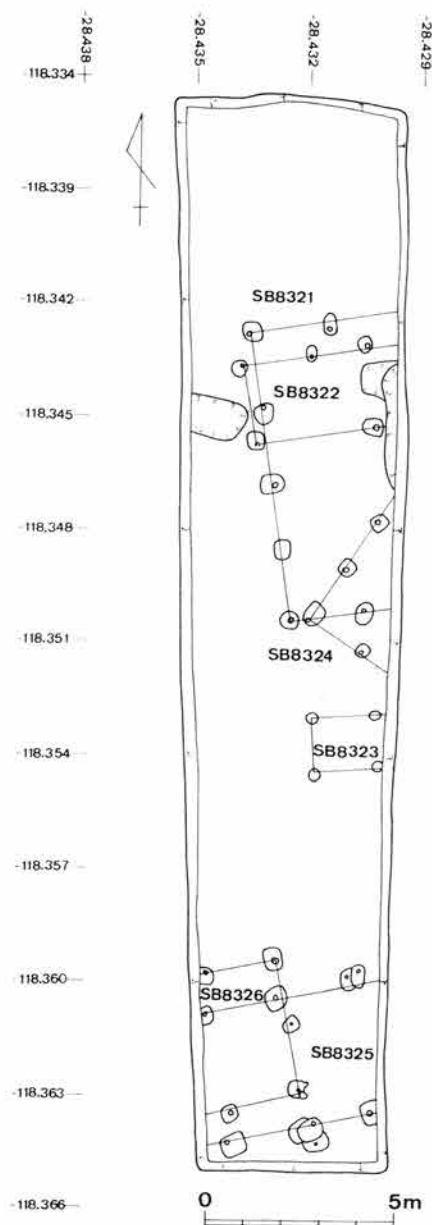
S B8324 は、南北1間以上、東西2間以上有しており、柱間寸法は南北約150cm、東西約150cmを測る。Dトレンチ内では、最も西に偏して建てられている。

S B8325 は、東西に4間以上の規模を持つ建物で、東西両側ともトレンチ外に延びているので判然とはしないが、恐らく南北方向は2間の規模を持つものと考えられる。柱間は東西約195cmを測り、南北は約180cmを有するものかと推定される。

S B8326 は、南北2間、東西2間以上を測り、柱間寸法は、南北で約180cm、東西で約180cmを測る。



第35図 Cトレンチ平面図



第36図 Dトレンチ平面図

以上の掘立柱建物跡は、S B 8321・8322・8323・8324 と S B 8325・8326 の二つのグループに分かれて建てられており、また S B 8321・8322・8325・8326は、同様の角度で西へ偏している。

Eトレンチ (第37図)

Eトレンチでは、掘立柱建物跡5棟(S B 8328・8329・8330・8335・8339)と井戸(S E 8332)と溝(S D 8331・8333・8334)そしてS K 8338等の土壌を検出している。

S B 8328 と 8329 は、共に東西・南北両方向とも約 210cm の柱間寸法を有し、ほぼ同様の振れで西へ偏している。S B 8328 は、東西1間以上の規模を有し、南北は柱穴の存在が予想される所に現代の攪乱が存在している為、1間しか確認されていない。S B 8329 は、東西2間以上、南北2間以上の規模を持つ。

S B 8330 は、東西・南北とも3間以上を確認している。柱間は、南北 195cm、東西 180cm を測る。

S B 8339 は、南北2間、東西3間以上の規模を有し、柱間寸法は、南北で約 240cm、東西で約 240cm を計る。S B 8330 などよりは、西に偏している角度が小さい。

S B 8335 は、東西1間、南北2間の規模を持ち、柱間寸法は、東西で約 240cm、南北で約 150cm を測る。前記の4棟の建物跡とは異なり、ほぼ真南北方向に建てられている。

S E 8332 は、一辺約 150cm の掘方を有し、深さ約 180cm を測る。井戸枠の一部が残存している。井戸内からは、須恵器の杯身(第40図-3, 7, 10, 14, 16)や壺の頸部(第40図-15)や瓶子形の壺(第40図-17)などが出土している。井戸の掘方の方向から、S B 8328 や 8330 という掘立柱建物とは時期が異なる可能性が強い。

SD8331 は、ほぼ東西方向に延びる溝で、幅約40cm、深さ約10～15cmを測る。

SD8333 は、東南方向に延びる幅約100cm深さ約10cmを測る溝である。

SD8334 は、トレンチの西南コーナーからやや弧状に東北方へ延びる溝で、幅約60cm、深さ約5～10cmを測る。

Fトレンチ（第38図）

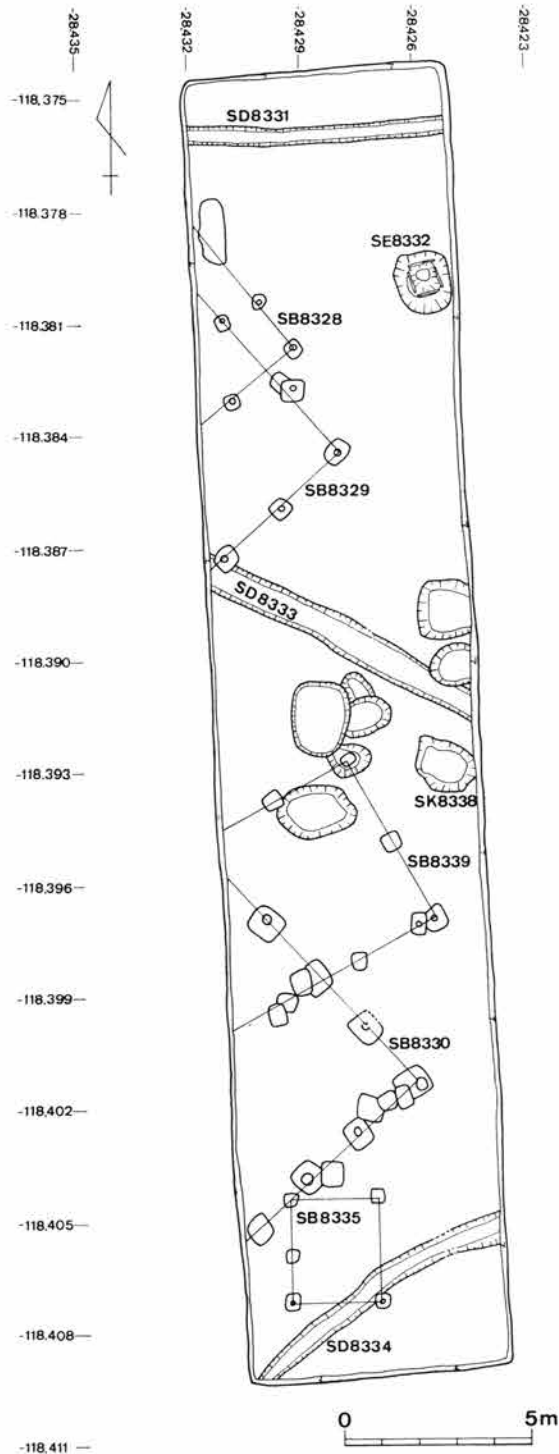
Fトレンチからは、掘立柱建物跡6棟（SB8351・8352・8353・8357・8358・8360）と溝（SD8355・8362・8363・8364）柵列（SA8359）及び自然流路と思われるSD8350等を検出した。

SB8351 は、南北3間、東西3間の規模を有し、東側に廂を持っている。柱間寸法は、南北で約180cm、東西は身舎部分で約210cm、廂部分で約270cmを測る。

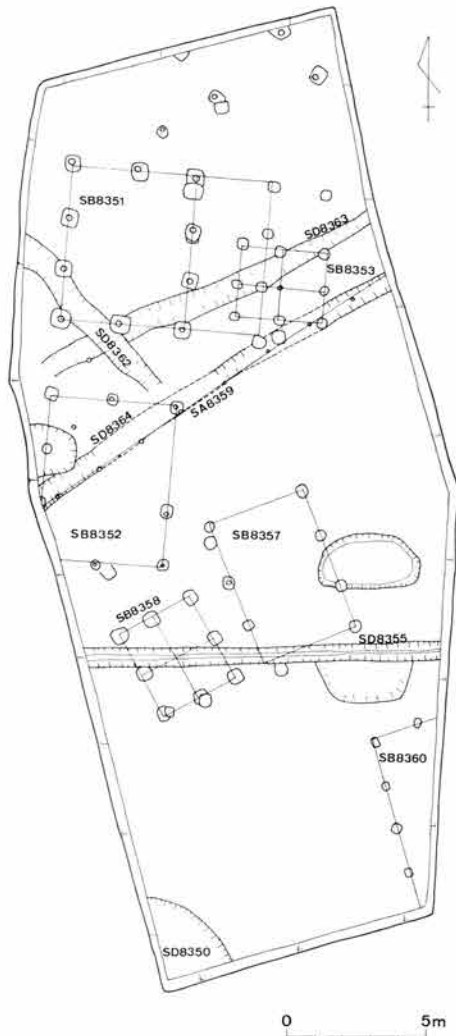
SB8352 は、SB8351の南側にはほぼ柱筋を揃えて建てられており、南北3間、東西2間の規模を有している。柱間寸法は、南北で約180cm、東西で約210cmを測る。

SB8353 は、東西2間、南北2間の規模を持つ総柱建物で、柱間寸法は、東西約150cm南北約135cmを測る。

SB8357 は、南北3間の規模を持ち、東西方向は距離約450cmを測ることなどから、恐らく2間の規模を有し



第37図 Eトレンチ平面図



第38図 Fトレンチ平面略測図

ていたものと思われ、後世の溝などの為、柱穴が消滅したものであろう。

柱間寸法は、南北で約180cmを測り、東西は約225cmを有していたと考えられる。

S B8358 は、南北2間、東西2間の規模を持つ建物跡で、柱穴は S D8355 によって切られており、中央にも柱穴が1個存在していた可能性が強く、恐らくは総柱の建物であったと思われる。柱間寸法は南北で約165cm、東西で約150cmを測る。

S B8360 は、南北3間以上、東西1間以上の規模を持ち、柱間寸法は、南北で約165cm、東西で約180cmを測る。

S D8355 は、ほぼ東西方向に延びる溝で、幅約60~90cm、深さ約25cmを測る。溝中からは奈良時代末の遺物が出土しており、また F トレンチの南端部付近が仮称姉小路の推定地であることから、姉小路の側溝である可能性が高い。

S D8362 は、幅約100cm、深さ約10~20cmを測り、西北から南東へと延びている。S D8363 や S B8351 の柱穴との重複が見られ、S B8351 より先行し、S D8363 より後出の

ものである。溝中からは奈良時代の遺物が出土している。

S D8363は、幅約100cm、深さ約30cmを測り、南西から北東へ延びている。

S D8364は、S D8363 の南に存在し、ほぼ同方向に延びる溝で、幅約80cm、深さは最も深い所で約40cmを測る。この溝が埋まった後に柵列 S A8359 が作られている。

S A8359 は、S D8364 をほぼ踏襲して東北方向へと続いている。柱間寸法は、約180cmを測る。S B8358 などの建物群と同様の方向性を持ち、これらの建物群と北方の建物群とを区切るものと思われる。

S D8350は、自然の流路で、トレンチ西南端でその一部を検出した。溝中は、砂礫で埋ま

り、磨滅の激しい須恵器の小片が少し出土した。幅については不明であるが、深さは検出した部分で約80cmを測る。

Fトレンチで検出した掘立柱建物跡は、SB8351・8352・8357がほぼ真南北の軸線に揃えて建てられており、その他の3棟は大きく西へ偏して建てられている。

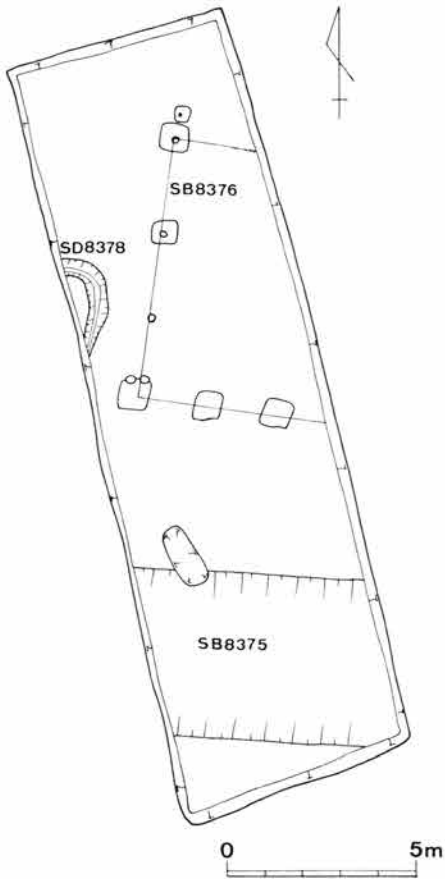
Hトレンチ（第39図）

Hトレンチでは、掘立柱建物跡1棟（SB8376）と溝（SD8375・8378）を現在確認している。

SB8376は、南北3間、東西2間以上の規模を有し、柱間寸法は、南北で約240cm、東西で約180cmを測る。ほぼ真南北方向の軸線に沿った建物跡である。

SD8375は、ほぼ東西方向の大溝で、幅約450cm、深さ約80cmを測る。溝中からは、中世の瓦器片や滑石製の鍋に混じって、土師器・須恵器片も出土している。

SD8378は、トレンチ西壁際で検出した溝で、南から北へ延びて西へほぼ直角に屈曲している。幅約40～60cm、深さ約30cmを測る。古墳時代の遺物が、非常に少量ではあったが出土している。



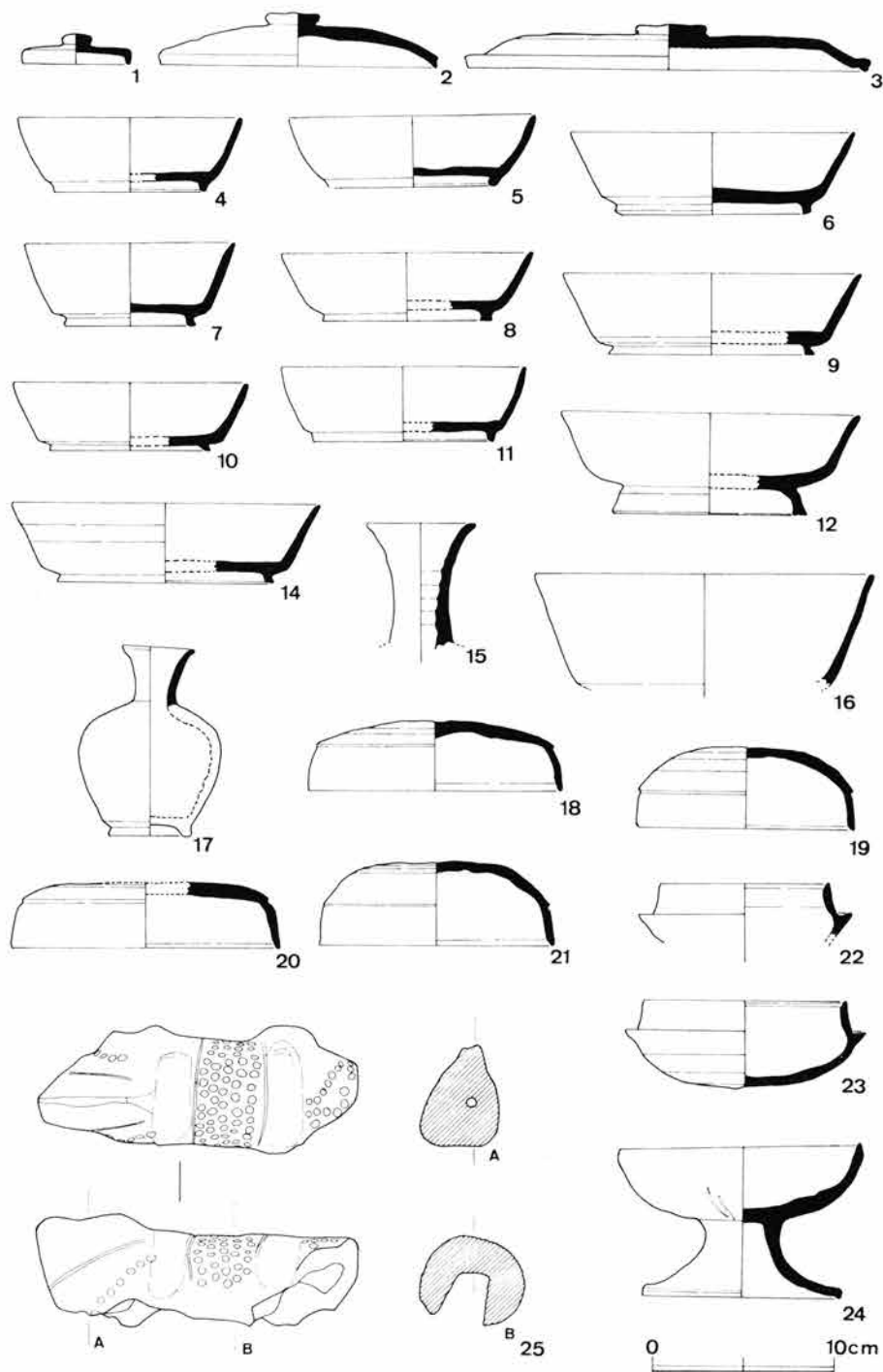
第39図 Hトレンチ平面略測図

4. 出土遺物

今回の調査では、古墳時代や飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器や瓦器、中世の陶器、そして土馬や瓦などが出土している。今回は、遺物が整理続行中でもあるので、その一部を報告する。

今回図示した遺物は、BトレンチとEトレンチから出土した須恵器と土馬である。

Eトレンチからは、壺の蓋（1）、杯蓋（2・3）、杯身（4～14・16）、壺（15・17）などが出土している。1は、口径6cm、器高1.7cmを測り、平坦な頂部につまみを有し、直角に下がる端部を持つ。杯蓋（2・3）は、平坦な頂部と屈曲する縁部からなり、扁平な宝珠つまみを附している。2は、口径15.4cm、器高3cmを測り、縁部の屈曲がやや小さい。3は、口



第40図 出土遺物実測図

1~2, 4~6, 8, 11~12-E トレンチ灰褐色粘質土 3, 7, 14~17-S E8332 9-S K8338
 18~23-S K8318 24-S D8317 25-S D8302 1~24-須恵器 25-土馬

径22.2cmを測る。

杯身(4～14・16)は、高台を持ち、ほぼ直線的に立ち上がる体部を有している。4・5は、高台の位置が、体・底部の境にあり、4が口径12.4cm、器高4.1cm、5が口径6.8cm、器高は3.8cmを測る。6は、体・底部の境よりやや内側に高台を附し、口径7.8cm、器高4.4cmを測る。7も高台が体・底部境の内側に附され、口径11.6cm、器高4.6cmを測る。8・11は、高台位置が体・底部のほぼ境に有り、8が口径13.8cm、器高3.8cm、11が口径13.4cm、器高4.2cmを測る。9・10・14は、体・底部の境のやや内側に高台を持ち、9が口径16.4cm、器高4.6cm、10が口径13cm、器高3.9cm、14が口径17cm、器高4.2cmを測る。12は、体・底部の境のかなり内側に外下方に伸びる高台を有している。口径16.5cm、器高5.6cmを測る。16は、口径18.6cmを測る。

15は、筒形の体部に長頸のつく壺の口頸部で、口縁部径6cmを測る。17は、小型の瓶子形の壺で、底部に高台を有し、口縁部が外反気味に終わり、端部は丸くおさめている。底部に糸切り痕を残している。

これら以上の須恵器のうち、3・7・10・14～17はSE8332から、9はSK8338から出土したもので、残りは、包含層の灰褐色粘質土層から出土したものである。

19～24の須恵器は、Bトレンチから出土したもので、SD8317から出土した高杯24を除き、SK8318から出土した。

杯蓋(18～21)は、天井部と口縁部の境に鋭い稜線を持ち、口縁端部に内傾面を有し、天井部の3分の2にヘラ削りを施している。18・20は、扁平な天井部を持ち、18は口径14cm、器高3.9cm、20は口径14.8cm、器高(現存高)3.6cmを測る。19・21は、天井部がやや丸味を帯びて平坦な面を持ち、19が口径12cm、器高4.3cm、21が口径12.8cm、器高4.6cmを測る。

杯身(22・23)は、やや内傾して高く立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部に内傾面を有している。22が口径9.2cm、23が口径11.2cm、器高4.8cmを測る。

高杯(24)は、ラップ状に拡がる短い脚部を持ち、丸味を帯びた杯部を有している。口径13.4cm、器高8.4cmを測る。

土馬(25)は、AトレンチのSD8302から出土したもので、顔と足と尾部を欠失している。細い竹管やヘラ描きの沈線によって鞍などの馬具を表現している。

5. 小 結

今回の調査では、D～Hトレンチを中心に奈良時代頃の掘立柱建物跡を多く検出した。こ

これらの建物跡は、ほぼ真南北の軸線に沿うものと大きく西に偏して建てられているものがある。これらの建物群は、出土遺物から奈良時代頃のものであるが、奈良時代末頃の遺物も多く出土しており、真南北の軸線に沿う建物跡（S B 8335・8351・8352・8353）は、長岡京期の可能性がある。

S D 8331・8333・8334・8363・8364 等の溝は、掘立柱建物に先行する時期のもので、S D 8364 が埋まった後に柵列（S A 8359）が作られており、S A 8359 などと同様の性格を持つものかと考えられる。

掘立柱建物跡は、B トレンチからJ トレンチまでで検出しているが、K トレンチ北端部付近の自然流路から南では検出しておらず、この流路が集落の南の限りとなっていた可能性が高い。また、C トレンチでは、建物跡を検出していないとはいえ、土壌やピットを検出したことは、D トレンチ以下で検出している建物跡がC・D 両トレンチ間まで及んでいたことは十分予想される。

今回の調査で検出した集落跡は、^(注5) 時期的には、外環状線街路改良工事に伴う調査で検出された弥生・古墳時代と平安時代の集落の時間的空隙を埋めるものであり、この調査地の東に白鳳時代創建と考えられる乙訓寺が存在していることが注目される。

今回の調査は、まだ続行中でもあり、資料整理も充分行えていない。今回の報告は、極く大雑把な概要であり、その詳細については、今後資料整理を行った上で報告したい。

(山口 博)

(注1) 梅原末治「乙訓寺礎石及古瓦」(『京都府史跡勝地調査会報告』第1冊京都府) 1919

吉本亮俊「乙訓寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967

(注2) 高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要(下水道西幹線今里地区立合調査)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979

(注3) 今回の調査に作業員として従事していただいた方は下記の通りである。(敬称略)

井本千代治、高橋 治一、吉田 武三、西村定太郎、渡辺 常次、岡田 明彦、田中 虎吉、岩崎 又男、木下栄太郎、山内 芳治、五十棲春一、大根 清一、吉田 保定、橋本 建一、中小路徳造、角倉 光雄、木村 芳久、古谷 幸一、生島 幸雄、村上 藤一、吉田藤三郎、榎田キミエ、前川 秀子、今井 幸子

(注4) 注2に同じ

(注5) 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980

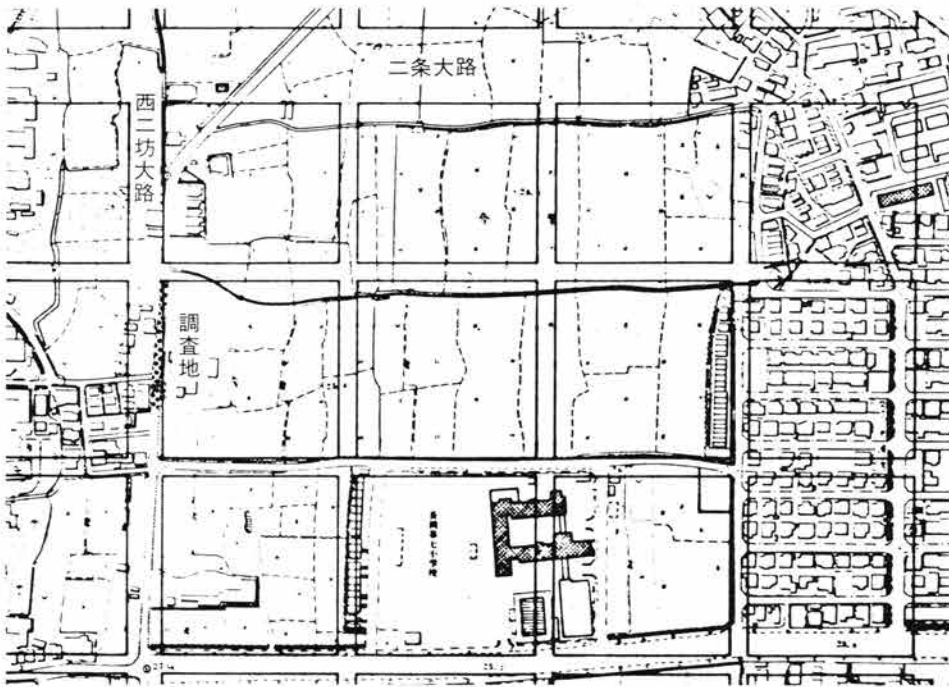
8. 長岡京跡右京第84次発掘調査概要

（7 ANITT VI 地区）

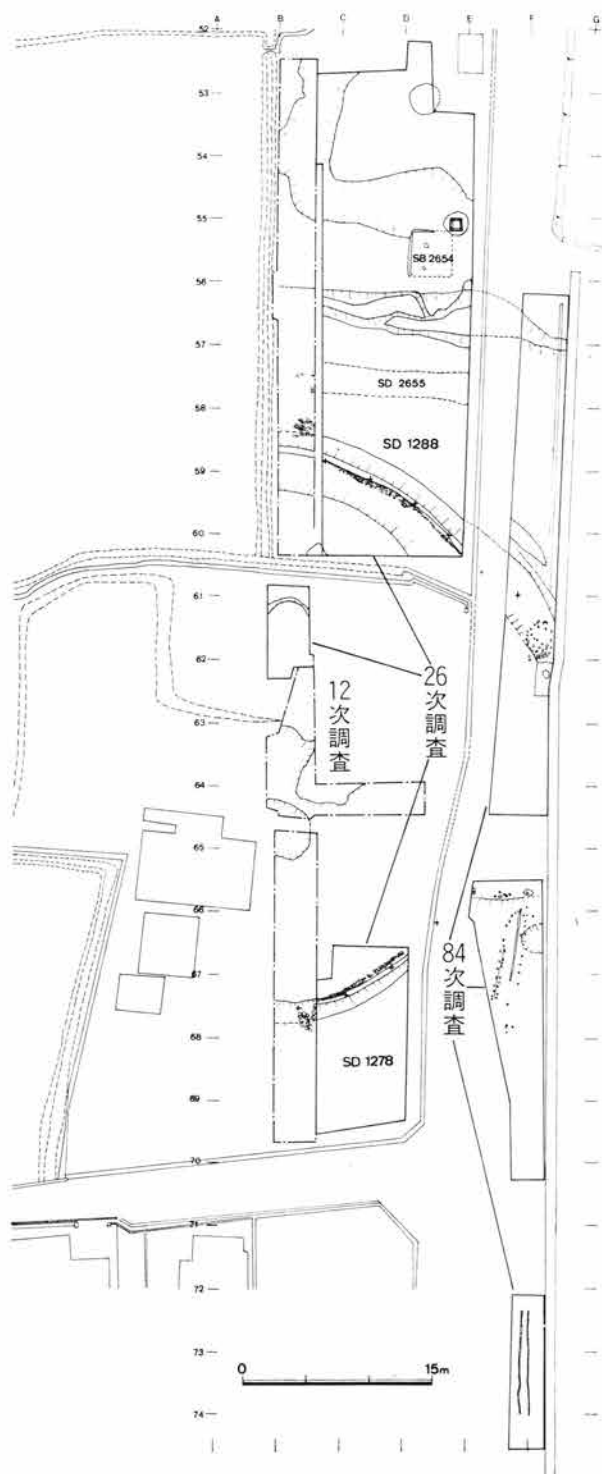
1. はじめに

今回報告する発掘調査概要は、長岡京市今里地区における都市計画街路（外環状線）改良工事に伴うものである。昭和52年以來、京都府教育委員会による発掘調査が継続していたが、^(注1)今回から、当調査研究センターが継承することになった。

この街路改良工事は、長岡京市今里3丁目～4丁目にかけて、南北方向の道路を新設するもので、総延長530m、幅員22m（一部25m）である。この道路予定地が、長岡京復元図によれば、右京三条二坊にあたり、また、今里車塚古墳を横断するため、長岡京の条坊をはじめとする遺構の存在が予想された。今里車塚古墳は、これまでの調査で周濠を持つ5世紀前半の前方後円墳であることが判明している。今回は、前方部と後円部を継ぐくびれ部を横断することから、くびれ部・前方部の形、規模を確認できる好機であった。そのうえ、道路の下



第41図 調査地位置図



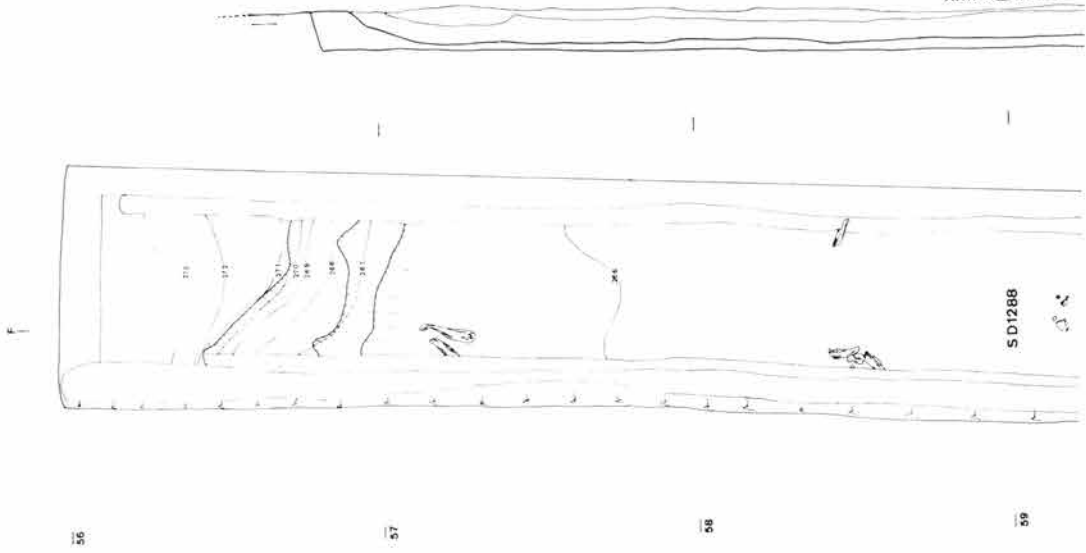
第 42 図 調査地平面図

2 m 近くまで掘削し、水道管の埋設を合わせて行うため、地下遺構の破壊は确实であった。このため、道路建設の担当機関である京都府土木建設部都市計画課及び、京都府乙訓土木工営所、水道工事を行う長岡京市水道部と、当調査研究センターとの間で協議が重ねられた。この協議によって、京都府教育庁指導部文化財保護課の指導のもと、当センターが主体となって、事前に発掘調査を実施することになった。

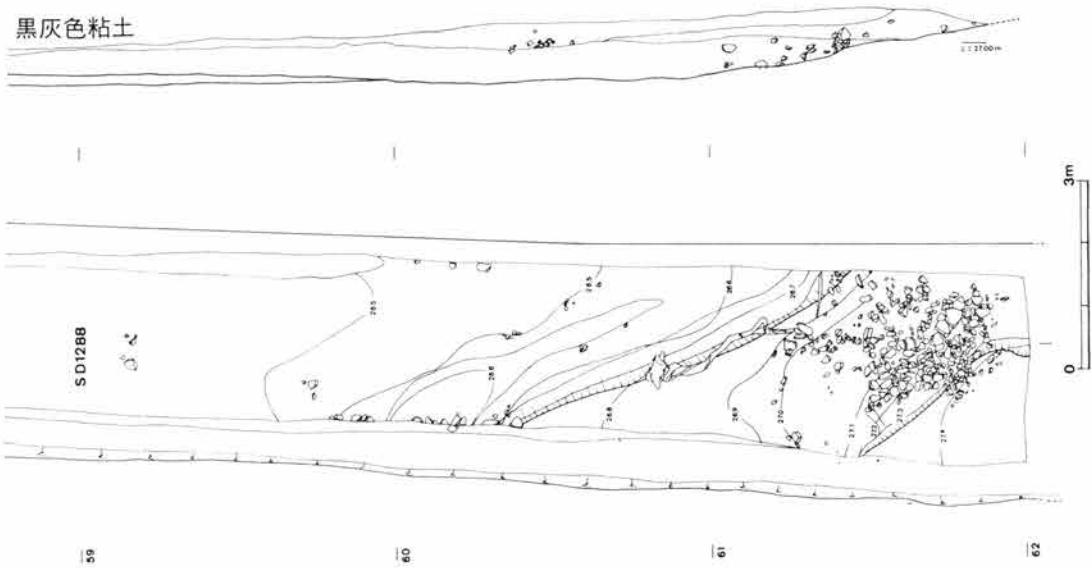
現地調査は、昭和56年11月11日から12月26日の期間に行った。現地調査は、当センター調査員、長谷川 達・小山雅人・石尾政信が担当した。

調査にあたって、京都府乙訓土木工営所、長岡京市水道部、長岡京市教育委員会、向日市教育委員会、長岡京跡発掘調査研究所、地元今里自治会、周辺土地所有者の方々の協力を得た。現地調査には、諸大学学生諸氏、地元長岡京市今里地区、向日市鶏冠井地区有志の方々の参加・協力があった。^(注2) また、現地調査において、高橋美久二氏をはじめとする前回までの調査担当の

黒灰色粘土



黒灰色粘土



第43図 遺構平面図・北トレンチ(北周濠)

人々の御指導・御協力を賜わった。心より謝意を表したい。

2. 調査概要

都市計画街路改良工事に伴う発掘調査（7ANITT・IST地区）は、これまで3次にわたって実施され、多大な成果をもたらしている。北方部（7ANITT地区）のうち北地区では、弥生時代・古墳時代の集落跡、長岡京時代の溝跡・轍群、平安時代の川跡・掘立柱建物群など、南地区では、地表面ではその痕跡が残っていなかった今里車塚古墳（前方後円墳）の後円部を検出している。南方部（7ANIST地区）では、弥生時代の川跡、長岡京西二坊大路の両側溝、三条坊間小路の両側溝などを検出している。この二つの道路側溝から、長岡京の条坊が平安京型ではなく、平城京型であること、三条坊間小路が、小路より広く大路であったのではないか等が新しく確認されている。

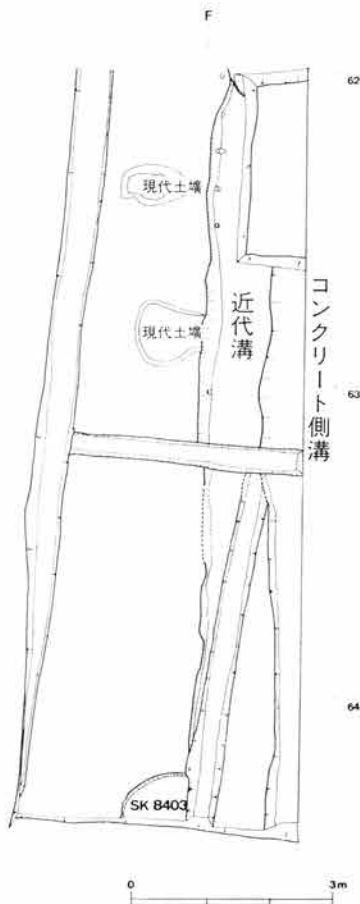
今里車塚古墳後円部の基底部に、4m前後の間隔で柱根が発見されている。この柱根の間隔と周濠の形・大きさ等から古墳の規模が推定されている。

今里車塚古墳後円部の基底部に、4m前後の間隔で柱根が発見されている。この柱根の間隔と周濠の形・大きさ等から古墳の規模が推定されている。

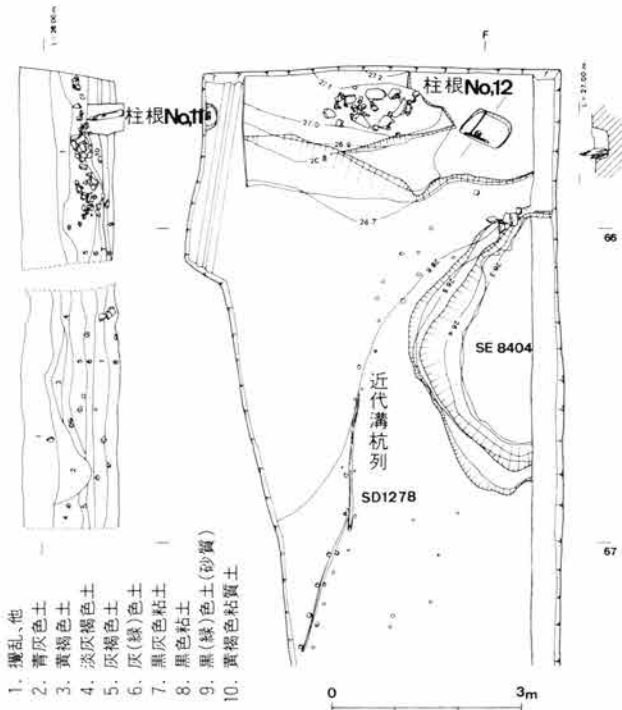
今里車塚古墳の復元図によれば、今回の調査地が、前方部と後円部が接合する地点、いわゆるくびれ部を横断することから、その当該部分を発掘調査することになった。

発掘調査は、前回調査地（12・26次調査）に道路を迂回させた後、旧道路部分に南北に細長いトレンチを設定した。一部は、民家進入路のため調査できなかった。北トレンチは4m×40m、中央トレンチは3m×22m、南トレンチは3m×12mとした。掘り進む過程で、くびれ部の柱を検出するため、中央トレンチの拡張を行った。発掘面積は、約300m²である。地区割は、これまでのものを踏襲した。

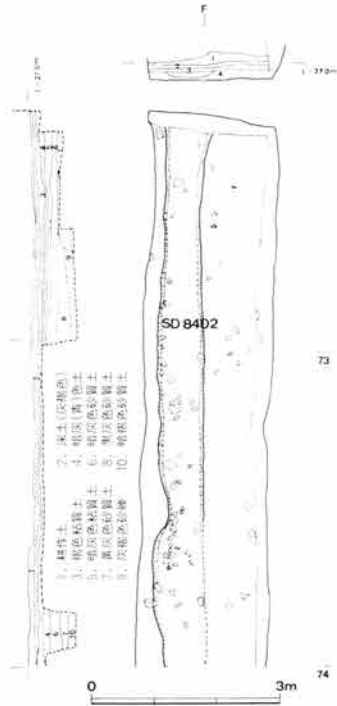
北トレンチでは、北端上層で、幅0.7m前後の浅い溝（SD8401）周濠（SD1288）の延長部と後円部の一部を検出した。ここで、復元図によれば、くびれ部に相当する地点で柱根（No.10）を検出したが、前方部方向の柱は、コンクリート側溝の下となるため検出



第44図 遺構平面図・北トレンチ南部（墳丘部）



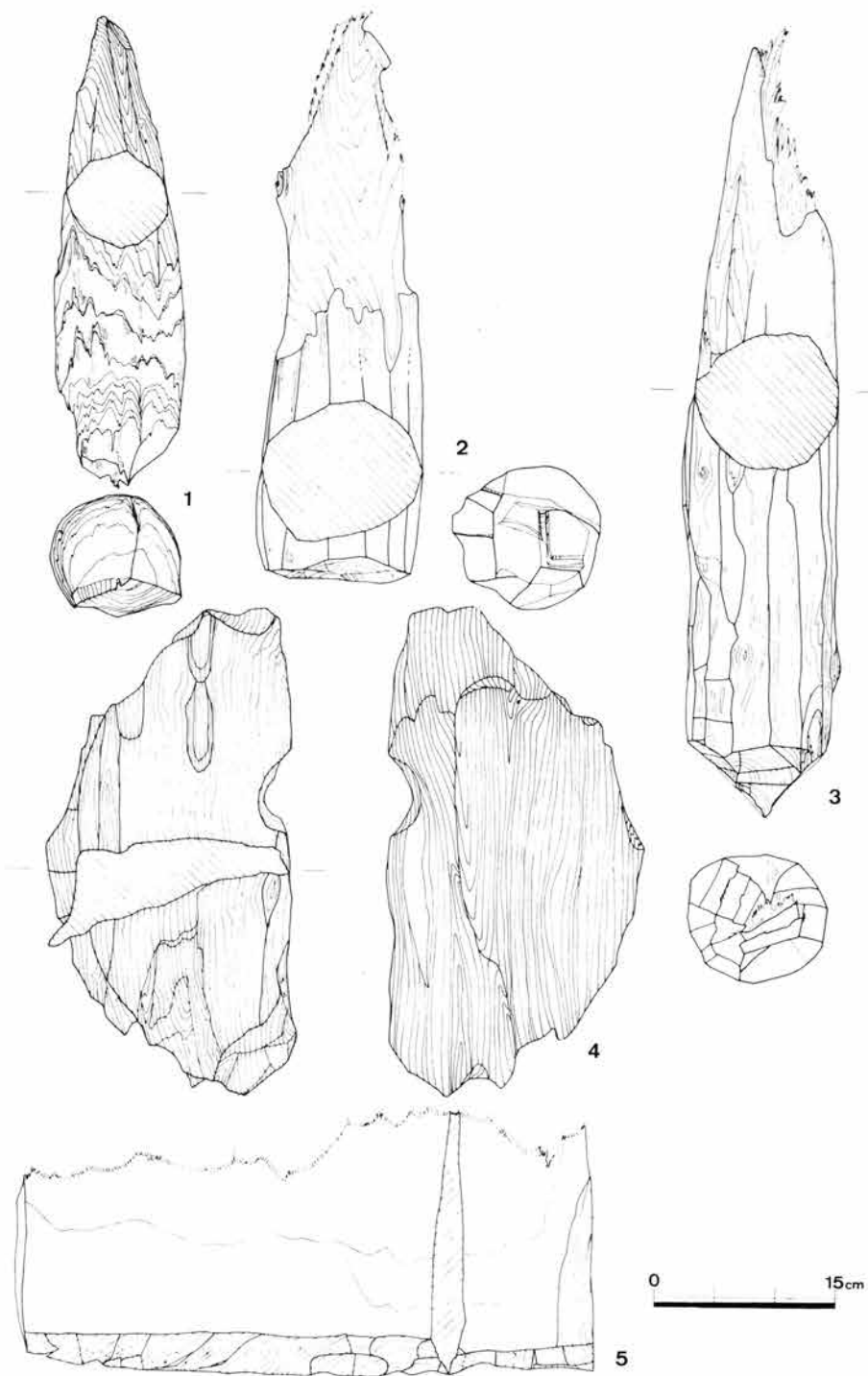
第45図 遺構平面図・中央トレンチ（南周濠）



第46図 遺構平面図・南トレンチ

は不可能であった。くびれ部にあたる地点で柱を検出したが、葦石・転落石の出土状況と墳丘の曲線からみて前方部へつながらるものとは思われない。中央トレンチでは、南周濠（SD 1278）とくびれ部の柱根（No. 11）、前方部の柱根（No. 12）及び葦石転落石を検出した。柱根 No. 12 は、その外（南）側に盾状の板材が置かれている。周濠 SD1278 の上層で、南北方向の近代溝とその側板・杭を検出した。この溝の下層から墨書のある削り屑が2点発見された。また、東端で径3.5mの中世井戸（SE8404）1基を検出したが、側溝の沈下・破損等が生じるおそれがあるため、井戸の掘り下げは断念した。南トレンチでは、幅1m前後の浅い南北溝（SD8402）を検出した。この溝は、明瞭でなく、深い部分でも10cm以下で、埋土にほとんど遺物を含まない。

出土遺物は、そのほとんどが今里車塚古墳の南・北周濠からのものである。周濠の中には、古墳時代～長岡京時代の遺物が含まれ、墳丘に近いところでは、転落した葦石と共に多量の埴輪が出土している。遺物は、現在整理中なので、主なものの記述にとどめざるをえない。長岡京時代の遺物は、これまで出土したものほとんど変わらない。二彩の小壺の蓋、緑釉の碗とおもわれるものがある。古墳に伴う遺物としては、前回出土した笠形木製品が二点出土



第47図 出土遺物実測図
1. 柱根No.10 2. 柱根No.12 3. 柱根No.11 4. 笠形木製品 5. 盾形木製品



第48図 埴輪 実測図

している。朝顔形埴輪で、赤色顔料（ベンガラとおもわれる）が塗られた非常に残りのよいものもある。

第47図1～3は柱根で、前回の調査では大型の柱に相当する。底は、ナタ状のもので無造作に切り落としてあるが、側面は、面とりをしている。最大のものは、柱根 No. 11 で長さ64cmある。4は、笠形木製品で南周濠から出土した。平坦面の穴は、近代溝の杭で打ち抜かれたものであろう。5は、柱根 No. 12 の南側、すなわち埴丘の外側に据置かれていたものである。底部は、ノミのようなもので両側から削られている。盾のようなものであったのか。

第48図は、北周濠の最下層から出土した朝顔形埴輪で、二重口縁状に大きく開くもので、口縁部の復元径は58cmとなる。外面及び内面に、赤色顔料が塗られている。

3. ま と め

今回の発掘調査で、今里車塚古墳のくびれ部及び前方部を確認するという目標は、中央トレンチに於いて、くびれ部・前方部で、それぞれ柱根を検出したことから達成しえたものとおもう。北側では、想定したような前方部方向への葺石の延長等はみられなかった。

柱根は、各々今里車塚古墳の復元図に示された地点で検出されていることから、前方部側の調査が実施されていないので即断はできないが、復元図に近いことが判明した。

また、周濠は、長岡京造営のため埋められたことを再確認することができた。しかし、西二坊大路（平安京一道祖大路）が周濠及び埴丘を通過していたかどうかはつかみきれなかった。

今回の発掘調査資料は、現在整理中のため、大幅に割愛せざるを得なかった。これらの資料は、以後まとめていきたい。

（石尾 政信）

(注1) 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財調査概報(1980)』京都府教育委員会) 1980

(注2) 補助員

竹田 満, 中尾 雅之, 上田 那明, 田中 義明, 鈴木 克也, 橋本 稔, 小寺 信子
伊藤 悦子, 高島 利洋, 小出 正憲, 清水 隆, 末沢 幸一, 阪口 浩章 他
作業員

小山 陽三, 生島 幸男, 角倉 光雄, 中小路 徳造, 村上 藤一, 山内 芳治, 吉田 藤三郎
吉田 保定, 五十棲 春一, 大根 清一, 木村 芳久, 橋本 健一, 古谷 幸一

(敬称略)

9. 長岡京跡右京第87次発掘調査概要

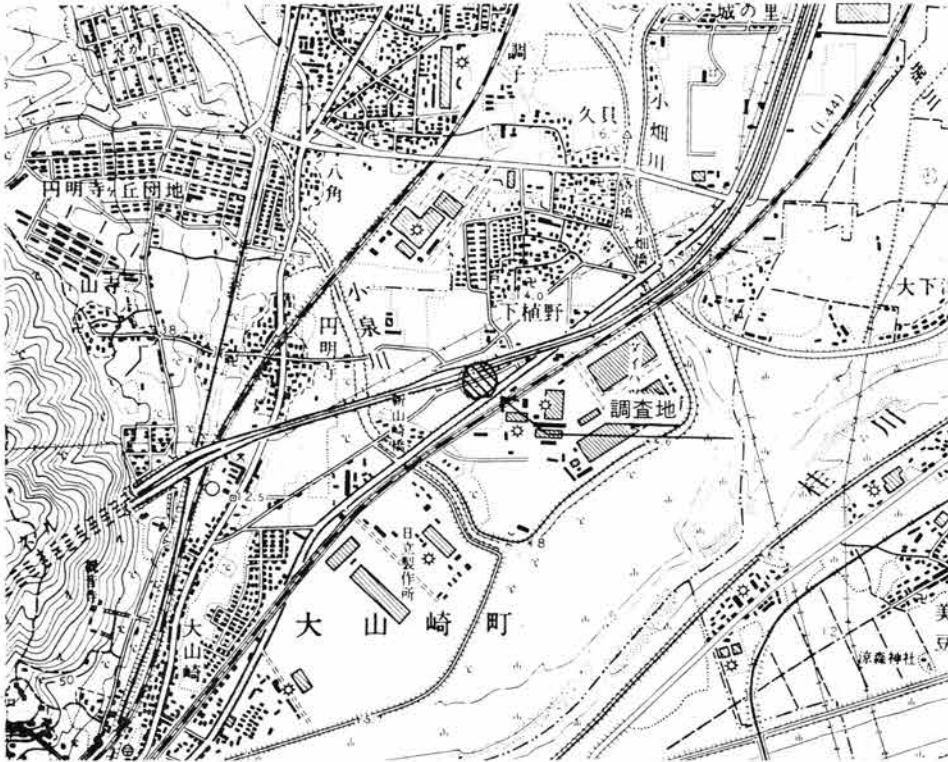
（7 ANTGT 地区）

1. はじめに

この概要は、府道下植野大山崎線の道路拡幅工事に伴う発掘調査に関するものである。

調査地は京都府乙訓郡大山崎町下植野五条田他にあり、長岡京条坊復原図（平城京型）によれば、右京九条二坊に該当するもので、京域の南限を解明する上で大変重要なところである。また、この地より北西へ200mに位置する乙訓第二中学校において、昭和55年の調査で弥生末期の竪穴住居跡が確認されていることから、遺構の存在が十分、予想された。地勢は標高10～11m、北西から南東へ傾斜する低位段丘であり、現在の水田の畦畔は乱れていない。しかし、桂川の氾濫（旧河川）が国道171号線沿いまで及んでいるため、調査を開始するまでは遺構が存在するかどうか疑問をもっていた。

この調査は、京都府乙訓土木工営所から依頼を受け、京都府教育委員会、大山崎町教育委



第49図 調査地位置図

員会、長岡京跡発掘調査研究所等の諸機関の協力を得て、昭和56年11月15日から同年12月9日まで実施した。

この調査を担当したのは調査課調査員 長谷川 達・竹井治雄 であるが、全期間を通じ主に竹井が調査に当った。なお、調査補助員・整理員として有志学生^(註1)の協力を受けた。

2. 調査経過

調査は道路拡幅工事と並行して実施した。全長300mの工事区間中の西半部約200mは立会調査を行い、遺構・遺物を検出すれば、工事を停止することになっていた。東半部の約100mの範囲には幅2m、長さ10m前後のトレンチを4か所入れた。本来ならば、工事区全域を調査するのが望ましいが、排土の置場や用水路の確保等の条件下でやむを得ず前述のような調査区の設定となった。

調査の成果としては、A地区では古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、鎌倉時代の掘立柱建物跡、その他暗渠排水溝・土塋等が検出された。B地区では「落ち込み」、C地区ではB地区落ち込みに対応する「溝状遺構」、D地区では暗渠排水溝等が検出された。

なお、西半部の立会調査では、工事の掘削面が浅いため遺構・遺物は確認できなかった。

調査地の基本的層位は、現在の水田の耕作土、床土、以下第1層淡茶灰色粘砂質土層、第2層黄褐色粘質土層、第3層茶灰色砂礫層の順に堆積する。第1層は土師器・瓦器を含み、旧耕作土と思われる。第2層は、今回の調査地及びその周辺に広く分布し、各時代の遺構が検出される層である。なお、この層に縄文土器も含まれている。この層は、粘質土であるが、下方にいくほど砂質の割合が強まり、徐々に堆積したことを示し、したがって縄文時代の遺構が存在する可能性もある。第3層は灰色を呈するが、小礫・中礫の表面はやや風化している。遺物は見られず、いわゆる「地山」である。

この基本的層位はA・B地区とD地区で見られ、B区東部とC区では第2層はなく、「落ち込み」によって削平されたと思われる。

3. 検出遺構

竪穴式住居跡 (S B8501)

A地区の西半部で検出された竪穴式住居跡である。トレンチが狭小なため、住居跡の一隅を確認したのみで全体の規模は明らかではないが、すくなくとも一辺4.5m以上のものであった。住居跡の壁は垂直に立ち上がり、残存する壁高は0.3mを測る。壁溝は3～5cmと浅く

残る。床面には部分的ではあるが、厚さ3cmほどの黄褐色粘性土を貼りつけている。柱穴・炉・貯蔵穴等は見あたらない。埋土は、おもに暗茶褐色粘質土であり、その中に黄褐色土、炭化物および若干の遺物が混在する。床面や壁の近辺から、須恵器杯身がほぼ完全な状態で出土した。なお、この堅穴住居跡は壁溝と断面観察とによって建て替えを行った可能性もある。

掘立柱建物跡（S B8502）

A地区中央部やや西よりで東西に4個の柱穴を確認した。掘形は、ほぼ円形を呈し、直径0.5m、深さ0.8mとわりあい深い。柱間寸法は1.4mを測り、埋土は各々一様に黒褐色粘質土であることから、これらは掘立柱建物あるいは柵列であろう。この方位は、東西より南へ約30°程傾く。遺物は埋土より土師器一片を採集した。

土 壙（S K8503）

A地区の西端に位置する土壙は、堅穴式住居を壊して穿たれたものである。土壙の掘形は隅丸方形であり、一辺約1.1m、深さ0.6mを測る。埋土は大きく二分でき、上層では暗茶褐色粘質土、下層では炭化物まじりの青灰色粘質土が堆積し、遺物は上層において小片の土師器を検出した。

掘立柱建物跡（S B8504）

堅穴式住居跡の埋土を切って建てられた掘立柱建物に伴う3個の柱穴を確認した。掘形は円形を呈し、直径0.3m、深さ0.4mを測る。柱間寸法は約1.8mを測り、埋土は第1層とよく似た淡茶灰色粘質土である。P1の埋土からは、ほぼ完存の土師器皿・瓦器皿が出土した。

暗渠排水溝

A地区中央部、B地区西側、C地区西側、D地区中央部にそれぞれ南北に走る幅0.3m、深さ3～5mの水田に伴う暗渠排水溝を検出した。これは現在の水田畦畔より東に振れ、真南北方向に近く、遺物は全くみられないが、埋土の淡茶灰色粘質土等から、中世及び中世以降の遺構であると思われる。

B地区の東半部を占める大きな落ち込みは、平面プランでは北東から南西にかけて弧を描いて検出され、東側へ緩やかに落ち込む。高低差は0.6mを測り、最も低い部分では幅約1mの溝状の窪みになる。底面は比較的水平に東へ進み、茶褐色砂礫が露出する。この肩に対応する立ち上がりはC地区では見られない。C地区東部で幅1.0mの溝状遺構を確認した。落ち込みの埋土はB地区では茶褐色粘質土を主体に砂質と砂礫の互層をなすところがあり、最深部の溝状の窪みには砂と黒褐色粘質土が堆積する。C地区ではB地区と異なり、茶褐色粘質土が均一になり、漸位層の様相を示し、堆積層は薄く、C地区東半部でなくなる。出土物には須恵器杯身・杯蓋・土師器がある。

溝状遺構

C地区東部より検出された南北に走る溝状遺構である。埋土は暗褐色粘質土の単一層の中に礫が混入する。出土遺物は弥生の甕の底部が数点ある。

4. 出土遺物

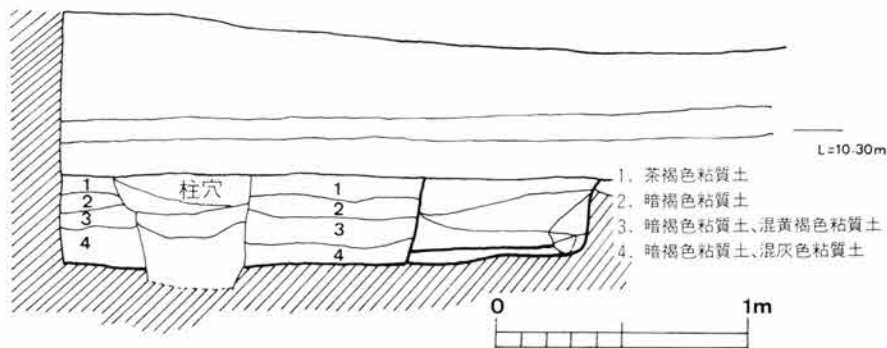
今回の調査において出土した遺物は土器類ばかりで、その量も比較的少なく、整理箱に一箱も満たない。その中で遺構に伴い、しかも実測の可能な土器は20数点を数える。第54図に掲載した実測図は古墳時代の住居跡・落ち込み、弥生時代の溝状遺構、そして鎌倉時代の掘立柱建物より出土したものであるが、そのうちの若干について説明を加えることとする。

溝状遺構 S D85 出土の遺物 (第54図10~14)

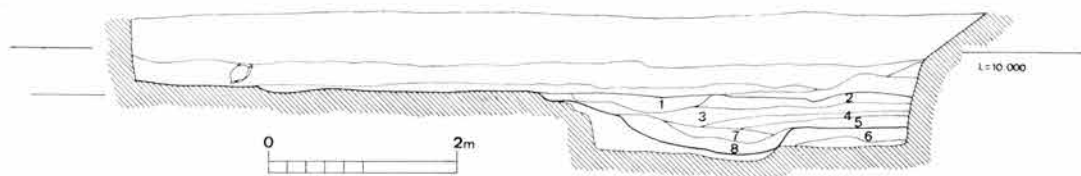
遺物は弥生土器のおそらく甕であろうと思われる底部が5点出土した。ただし、(14)は底部から大きく体部が開くので、壺の底部かもしれない。これらは内外面共に摩耗が著しく、調整の観察はできない。色調は淡黄褐色を呈する。焼成はやや軟らかく、胎土はそれ自体粗く、石粒を多く含む。

堅穴式住居跡 S B8501 出土の遺物 (第54図1~3)

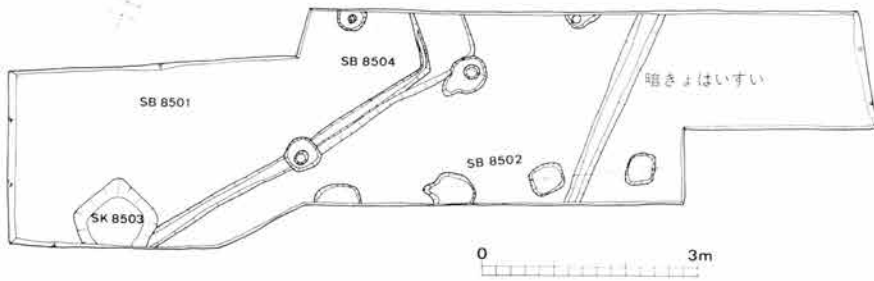
遺物は須恵器杯身、土師器甕2個体、その他小片が数点出土した。須恵器杯身(1)は口径



第50図 A地区北壁断面実測図堅穴住居(部分)



第51図 B地区南壁断面実測図



第 52 図 A 地区 遺構 平面 実測 図

12.7cm, 器高 5.5cm を測る。立ち上がりはやや内傾し、端面は凹みを持ち、端部を丸くおさめている。受部は外上方へのびるが比較的短く、先端は丸味をもつ。底部は時計回りの方向にヘラ削りがほどこされ、平坦で安定感が良い。底部ヘラ削り以外はすべてナデによる調整が行われている。これらのことから陶邑編年のⅡ期前半に相当するものと思われる。

甕(2)は口径 8.9cm を測る。短い口縁部が斜め上方へのび、端部はまっすぐおさまられる。体部は薄く、丸味をもつものである。内面はナデ、外面は刷毛調整が行われている。色調は茶褐色で、胎土は密であるが砂粒を含む。

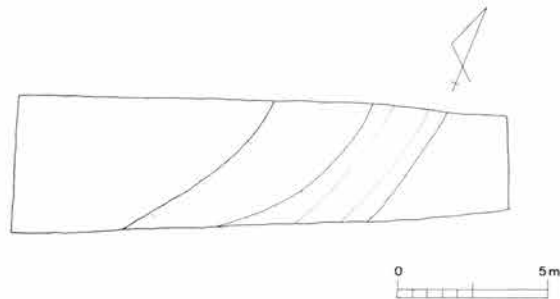
甕(3)は口径 16.2cm を測る。口縁部は斜め上方へほぼ直線的にのびる。端部はまっすぐおさまられている。体部は丸味を持ち、器壁は薄い。内面はオサエもしくはナデ、外面は刷毛をほどこしたのかもしれない。色調は赤褐色に黒色斑がみられる。胎土は割合に密で、砂粒を多く含む。

落ち込みの出土遺物(第54図7・8・9)

須恵器杯蓋(7)は口径 12.7cm, 器高 4.5cm を測る。天井部は全面ヘラ削りで、割合平らに仕上げられている。稜線は明瞭であるが小さい。口縁部はわずかに外へひらき、稜線の径より口径の方が大きい。削り方向は時計まわり。内面は回転ナデを施す。陶邑編年のⅡ期前半に相当するものと思われる。

高 杯(8)

脚部は短く、杯部との接合部では一段と細い。裾部は大きくラッパ状にひろがり、端部は平坦になる。外

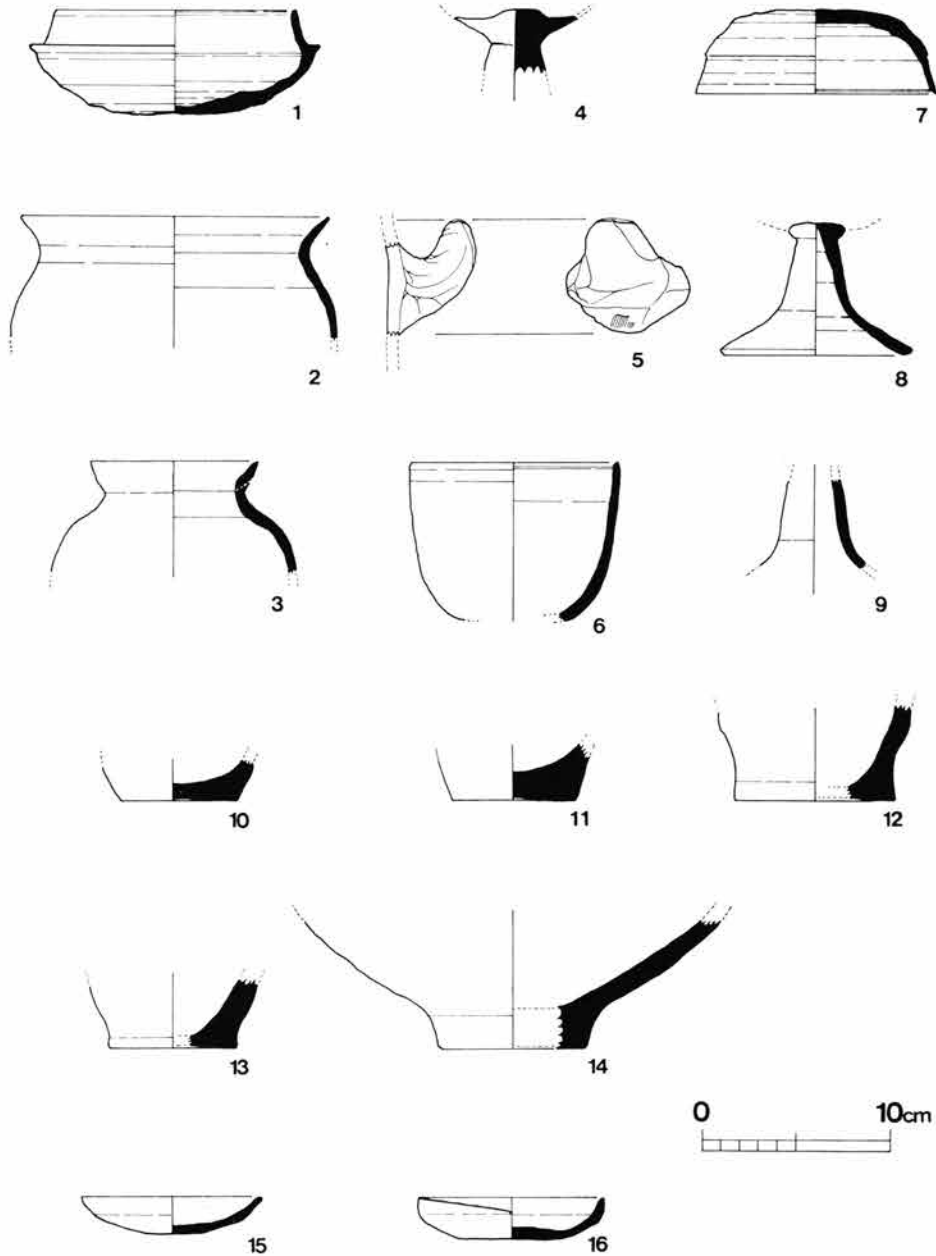


第 53 図 B トレンチ 落ち込み 平面 実測 図

面は縦のミガキが認められ、内面は横のケズリが施されている。

竪穴住居跡上層の出土遺物 (第54図4・5・6)

竪穴住居跡を検出する際に第1層淡茶灰色と住居跡の上面で出土したため、一応住居跡の



第54図 出土遺物実測図

遺物と分けた。出土した遺物は土師器高杯（4）、甗の把手（5）、土師器鉢（6）である。

（6）の底部は丸底と思われ、体部は鋭く、内湾気味に直立し、端部は丸くおさめられている。口縁内面には浅い沈線が一条施されている。体部外面はオサエの後、ミガキが施されているようだ。

掘立柱建物の出土遺物（第54図15・16）

これらは柱穴（P1）の柱根を抜き取った後に混入した土から出土した。（15）は土師器皿、口径9.6cm、器高2.0cmを測る。体部は斜め上方へまっすぐにのび、口縁はわずかに外反し、端部は丸くおさめられている。体部、口縁の内、外面はナデ、底部は外面に指オサエが施されている。（16）は黒灰色を呈する瓦器皿である。口径9.8cm、器高2.2cmを測る。体部は内湾しながら口縁へ続き、まっすぐに立ち上がり、端部は丸くおさめられている。内・外面の風化が著しいため、暗文は不明であるが、その痕跡から鋸歯状暗文が施されていたであろうと思われる。

5. む す び

今回の調査でA地区において検出した竪穴住居跡は、乙訓第二中学校で検出された竪穴住居跡よりは少し新しいが、この付近まで居住空間の広がりを示す資料である。B地区の落ち込みは河川跡、単なる地境等が考えられ、将来の調査成果を待って決められるものである。

調査の主な目的である長岡京跡に関する遺構、遺物は全く検出されなかったが、遺構が存在すれば検出される基盤層を確認した。それ故、京城の南限を解明する手掛りは残されている。
（竹井 治雄）

（注1）補助員 福富 仁、水野 春樹、小野 康裕（敬称略）

10. 長岡京跡左京第83次発掘調査概要 (7 ANFKI 地区)

1. はじめに

この概要は、国道171号線の歩道付設工事に伴う発掘調査に関する成果の報告である。

調査地は京都府向日市上植野字南淀井と長岡京市馬場字北石ヶ町にまたがり、延長約300mの工事区間が調査の対象地であった。当地は長岡京条坊復原図によれば、左京四条二坊から同五条二坊の広い範囲にあたり、数条の東西溝の検出が期待された。そして、調査地の周辺の遺跡は、この長岡京跡に関するものばかりでなく、南方には弥生時代の古市遺跡があり、東方の羽束師あたりでは住居跡が発見されている。また東南方向約200mの地点は雲ノ宮遺跡として知られ、畿内第Ⅰ様式の土器類が多数出土している。

このような遺跡の状況から本調査の主目的は長岡京跡の遺構・遺物の検出、確認を掲げ、つづいて下層の古墳・弥生時代のそれまで確認する調査であった。

調査の成果としては、長岡京やその他の遺構は検出できなかったが、若干の遺物を採集することができた。しかし、現水田の畦畔の乱れの原因や、これに関連して長岡京跡の遺構が検出できなかった遠因を見出すことによって、将来の調査の参考になればと考える。

この調査は当調査研究センターが昭和57年2月8日から同年2月15日の1週間を費し実施

した。この間に、長岡京跡発掘調査研究所、向日市、長岡京市の両教育委員会等の諸機関の協力を得て無事調査を終了することができた。



第55図 調査地位置図

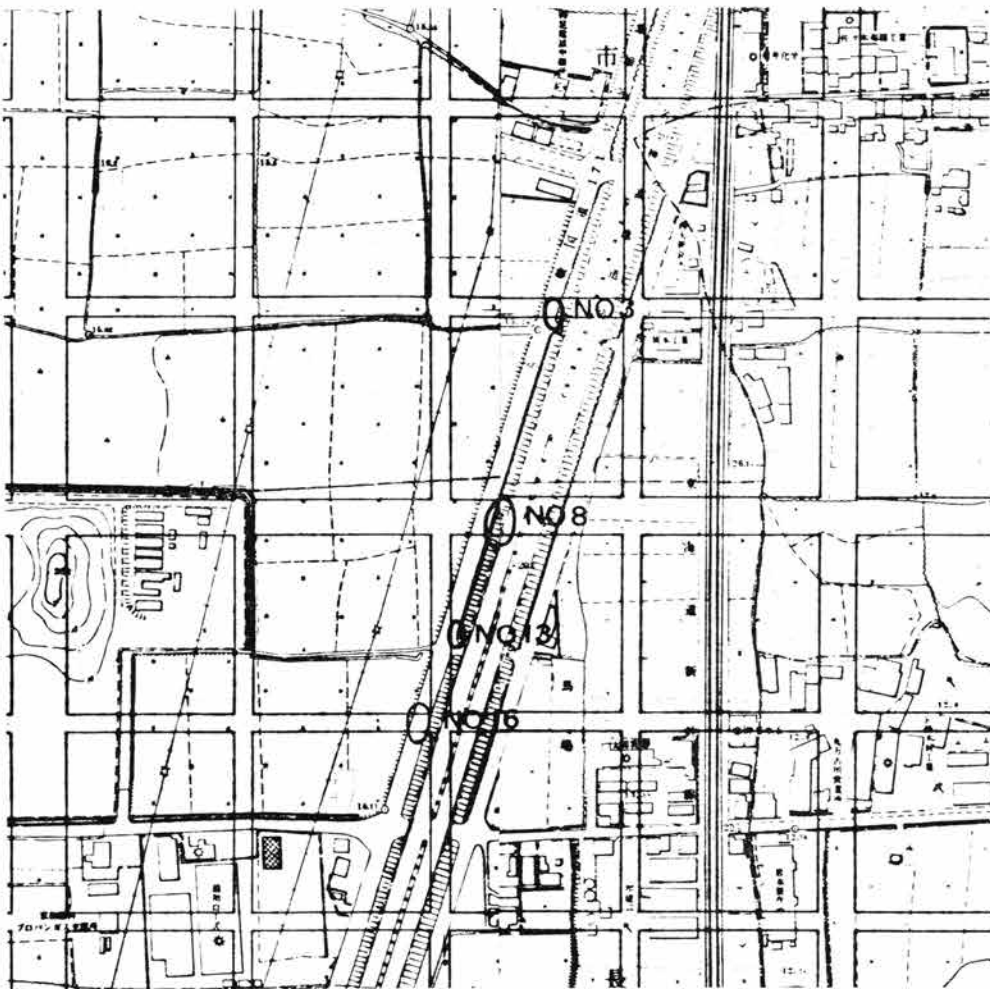
2. 調査経過

調査は歩道付設工事と並行して実施した。全長約300mの工事区間中、当初、長岡京条坊復原図に推定されている側溝部分に調査区を6か所設定することになっていた。ところが、既にこの調査区には埋設管や人孔が

あるため、予定より少なく4か所に減じ、尚且つ、土層の観察さえ困難を極めた。

調査地周辺の地勢は、標高約10m、北から南へ徐々に低くなる後背湿地である。現在の水田の畦畔は、南北では磁北方向に直線的であるが、東西の畦畔は弧の字形に曲線を描いている。これは旧地形、或いは、河川の氾濫によって畦畔の形成時において、大きく影響を及ぼしたことを示すものであろう。そして、この畦畔の乱れは、いつの時代のものであるかによって、長岡京の遺構の有無が左右されるとすれば、調査の手始めとしてこの畦畔の断面を観察できる調査区を設定する必要がある。

調査区 No. 3 は前述の問題を解明するうえで好条件の調査地であった。尚、調査区の中央において南北に走るものは、埋設管の東である。



第56図 調査区位置図

この調査地の基本的な層序は、第Ⅰ層は国道171号線の盛土、第Ⅱ層は現在の水田の耕作土と床土、第Ⅲ層は青灰色粘質土、第Ⅳ層は褐灰色粗砂、第Ⅴ層は灰色粗砂礫の順に堆積する。この基本層序は南へいくほどとくに第Ⅲ層・Ⅳ層が厚みを増し、褐色味が強まる。

調査区 No.3 では、畦を境にして北と南の水田面に比高差が認められ、第Ⅲ層についても土質の違いが見られる。すなわちⅢ-Aでは純粹の青灰色を呈する粘質土であるが、Ⅲ-Bは、小・中礫が均一に混入していることから二次的な堆積層と思われる。Ⅳ層は酸化が激しい褐灰色を呈する粗砂が主体となり、ベディングの様相を示し自然的な堆積層である。このⅣ層はⅤ層を切り込んだものか、あるいは、Ⅴ層そのものが落ちこんでいるのか判別し難い。Ⅴ層は灰色を呈する粗砂と礫が主体となる固くしまった厚い土層である。Ⅴ層の下層は緑灰色粘土を No.13・16 の調査区で確認した。

現在の東西の畦畔が弧の字形を描くのは、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層の関係では、直接的にはⅢ層の上面に作られている。しかしⅢ層自体はⅢ-A層、Ⅲ-B層に分けられ、とくに、Ⅲ-B層はⅣ層あるいはⅤ層の影響を受けていると思われる。そして、畦畔は、断面形状から見れば第Ⅴ層の落ち込みの肩口に形成されている。(水田面の比高差はⅢ-A層とⅢ-B層の比高差を踏まえているのは明らかである。)まさに、第Ⅴ層に規制を受けているとすれば、第Ⅴ層の平面形状を把握し、これが畦畔のものと同じであれば解決するものでないかと思われる。

次に、長岡京跡に関連する遺構が検出されなかった原因を調査区 No.3 の土層とその各層の時期の解明によって、若干の考えを付け加えたい。

各層の時期については、これを決定できるだけの遺物は出土していない。第Ⅲ-A層は、No.3 調査区より南へ約20mの地点で出土した遺物(図版第52-(2))を含む土層と比較的よく似ているが、連続するかは決定し難い。第Ⅴ層は、長岡京跡の遺構が存在する可能性が強い。いわゆる基盤層の一つであると考えられる。

土層の断面を見る限り、溝状のものは観察できないが、第Ⅴ層の落ち込みと第Ⅳ層の堆積状況の関係が、非常に興味深い。第Ⅳ層は、氾濫による堆積層と考えれば、前述の時期考察を取り入れると、わずかながら長岡京跡に関連する遺構が存在した可能性は、失われるものでないと思う。

その他の調査区では、各層に変化はなく、遺物も採集できなかった。

3. 出土遺物

図版に掲載した土器類は、調査区 No.3 より南北へ約20mの地点の青灰色粘質土から出土したものである。この土層は土器類の他に、木片、炭化物、拳大の河原石が混在し、単な

る包含層でなく、遺構の埋土とも考えられる。土器類では、土師質の杯・皿・高杯・甕・須恵質の杯・杯蓋・壺などが出土している。これらの土器の製作年代については、大雑把に言えば7世紀の後半から8世紀初頭に比定されるが、いま一度、観察の結果と実測図を載せ、後に詳しく年代を述べたいと思う。

高 杯（図版52-1、第58図1）

淡赤褐色を呈する土師質の高杯である。胎土は水籤を行ったのか緻密であり、砂粒を少し含むが気にならない。焼成の具合は均一に焼かれ良好である。

脚部は下半の中位から大きくラッパ状に開き、安定感があり、基底部の口径は12.3cmを測る。脚部の外面は、荒いタテハケを基底部付近まで施した後、ケズリによって七面に成形する。下半の下位のラッパ状外面はヨコナデを施して完成する。この内面は、外面と同様ハケを施した後ヨコナデを施す。

高 杯（図版52-2、第58図2）

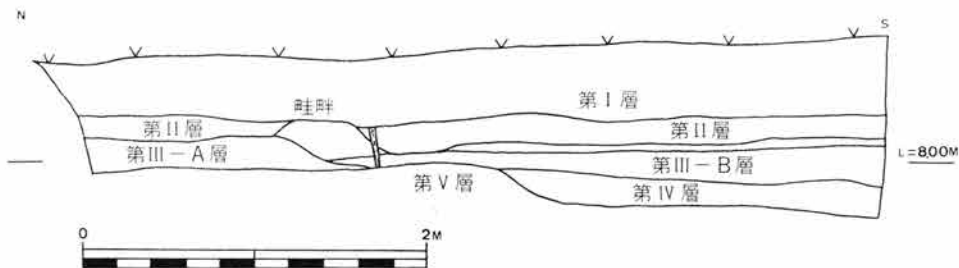
残存は良くないが、面とりが8面あること、また、杯部は欠損しているが脚部との接合方法がよく観察できるため載せてみた。

色調は内外面とも淡赤褐色を呈する土師質である。胎土は（1）と同じく緻密であるが長石・石英等の砂粒が目立つ。

脚部の面は8面を数え、それぞれの中は一様でない。

脚部外面は、ハケを施したのちに面とりのためのタテのケズリを施す。内面は水を使用したのか表面が膜状になっている。

杯部と脚部は別途に作られる。杯部を脚部に接合する際、粘土を充填し押える。さらに強い力を加えてケズリを施す。この時、脚部のケズリとの境が明瞭に分かれ、粘土充填部分が屈曲する。



第57図 調査区 No.3 東壁断面図

第I層：淡褐色粘砂質(盛土) 第II層：現水田の耕作土と床土 第III-A層：青灰色粘質土(砂礫混入) 第III-B層：青灰色粘質土 第IV層：褐灰色粗砂(粘土混入) 第V層：灰色砂礫

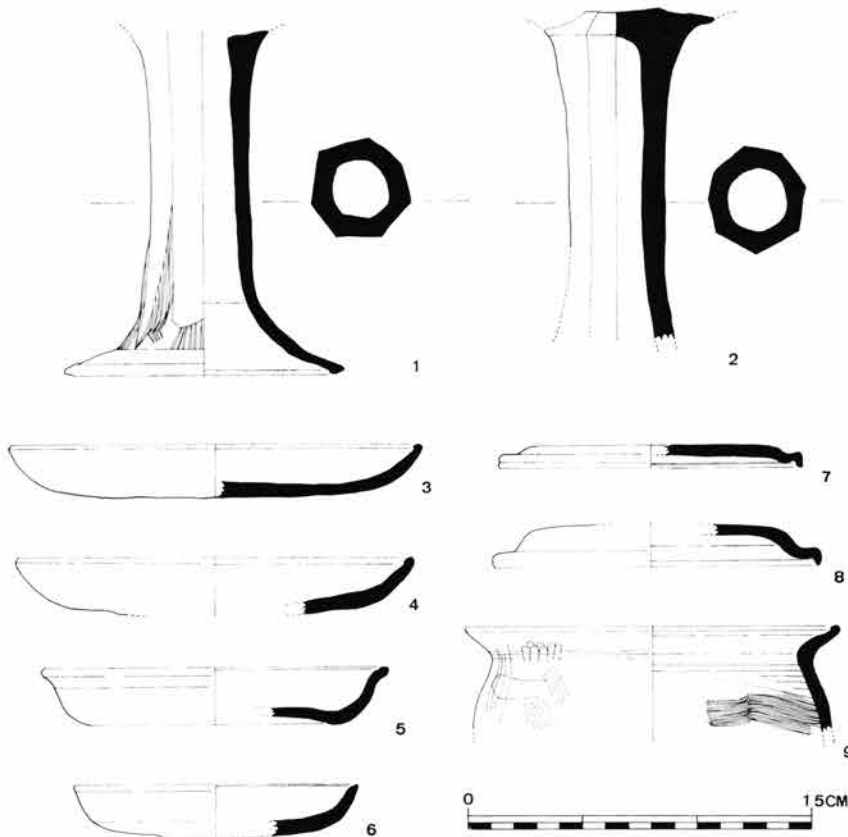
杯 蓋 (図版52-3, 第58図7)

口径は15.6cm, 器高は1.3cmを測り, つまみを持つ須恵質の杯蓋である。色調は明るい青灰色を呈し, 胎土は長石・石英などの砂粒を割合含む。天井部は平坦をなし, 中心部につまみを持つ。

外面の調整は不規則な回転ナデを施すが, 口縁部では安定する。また, つまみを充填した後, その周囲を強くナデる。内面は口縁部付近では回転ナデは明瞭であるが, 天井部では粘土ひもの厚みをそのまま留める。

杯 (図版52-4, 第58図5)

淡褐色を呈し, 胎土は緻密であるが長石・石英をわずかに含む土師質の杯である。底部は平たく, 体部は内湾しながら斜め上方に口縁部に至る。口縁部では大きく外反し, 端部を丸くおさめる。口縁部内面には一条の細い沈線を施す。器壁の厚みは底部より体部, 口縁部の方が厚い。口径は15.0cm, 器高は2.4cmを測る。



第58図 調査区 No.3 出土土器

器壁の調整は、口縁部、体部内外面ともきれいなヨコナデを施す。底部外面はオサエの痕跡をとどめる。

杯（図版52—5、第58図6）

色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含む土師質の杯である。口径は17.8cm、器高は2.4cmを測り、杯としては大きい。底部は平たく、体部から口縁部までわずかに外反しながら斜め上方にたちあがり、端部は肥厚させておさめる。

口縁部、体部、底部とも外面はケズリを施すが、方向はまちまちである。内面はすべて、ナデを施す。

杯 B（図版52—6）

青灰色を呈し、ほとんど砂粒を含まない緻密な胎土である。欠損が著しく口径、器高は不明である。

高台は付高台である。体部は高台からすぐ内湾しながら斜め上方にたちあがる。内面の底部と体部の境は、急激にたちあがるため明瞭に屈曲する。

体部の内、外面と底部の内面はいつでもナデを施す。底部の外面は、高台付近でヨコナデを施し、中心部では無施である。

杯（図版52—7）

淡黄褐色を呈し、口径15.5cm、器高2.5cmを測る土師質の杯である。底部は平たく、体部から口縁部まではほぼ直線的に斜め上方へたちあがる。端部では外反気味に細くおさめる。口縁内面に沈線を施したためか、端部は平坦に見える。

体部・口縁部の内・外面はナデを施す。底部内面も弱いナデを施し、外面はオサエだけである。

杯（第36図4）

色調は外面では炭化物が付着しているため黒灰色を呈する。口径17.4cm、器高は2.6cmを測る土師質の杯である。

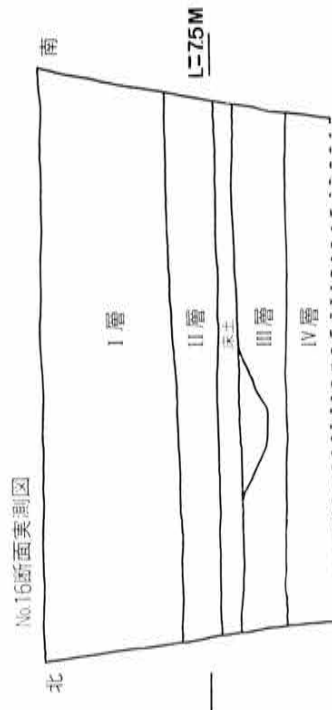
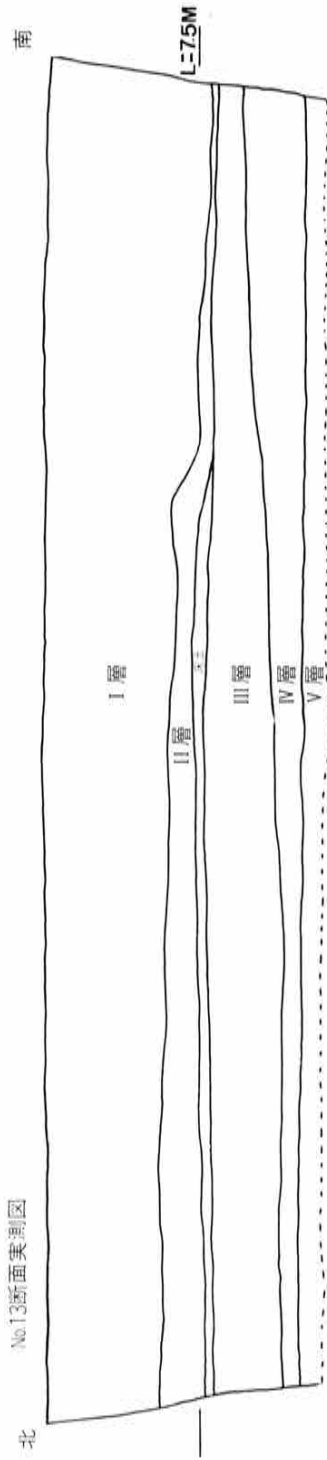
底部は平たく、体部は直線的に斜め上方にたちあがり、口縁部では外反し、端部は肥厚させておさめる。

調整は底部から端部にいたるまでヘラケズリを施す。内面はヨコナデを施す。

甕（第36図9）

外面は赤褐色を呈し、炭化物が付着している土師質の甕である。

体部は割合丸味をもつものと思われる。口縁部はゆるやかに低く斜め上方へのび、端部は



- 第I層：盛土
- 第II層：現水田の耕作土
- 第III層：褐色粘質土砂礫混入
- 第IV層：褐色砂礫
- 第V層：青灰色粘土

第59図 調査区 No.13・No.16 断面実測図

肥厚させておさめる。器壁は全体にうすい。

外面の調整は、頸部から体部には荒いタテハケを施し、頸部ではヨコナデによって消されているが、体部の肩にはわずかにその痕跡をとどめる。口縁部は内面と同様にヨコナデを施す。体部の内面ではきめの細かいヨコ方向のハケを施す。

杯 蓋（第58図8）

色調は白味を帯びる灰色を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まない須恵質の杯蓋である。口径は13.2cm、器高は1.2cmを測る。

天井部は平たく、つまみを持つものと思われる。器壁の内・外面はナデを施すが、天井部の外面では粘土ひもの痕跡をわずかに残している。

以上の土器類は青灰色粘質土層から出土したもので、この土層自体が整層をなし、または遺構の埋土であることから、一括性をもたすことができよう。

高杯（図版52-2、第58図2）と杯（図版52-4）は明らかに7世紀後半に比定される。その他の土器類は7世紀後半から8世紀初頭までのものと思われる。

4. ま と め

今回の調査の主目的であった長岡京に関連する遺構は、検出できなかったが、狭小なトレンチにもかかわらず、その存在の可能性を見い出し、若干の遺物も採集できたことによって、今後の調査の参考になればと思う。

調査は歩道工事と並行して実施したため、試掘調査や立合調査の感がぬぐえないものの、広い遺跡を研究する場合、それが、たとえ「点」に過ぎないものでも重要な調査の一つであると認識することが大切である。

（竹井 治雄）



圖

版

図版第1 広隆寺跡



(1) 調査地全景 1回目 (A地区)(西から)



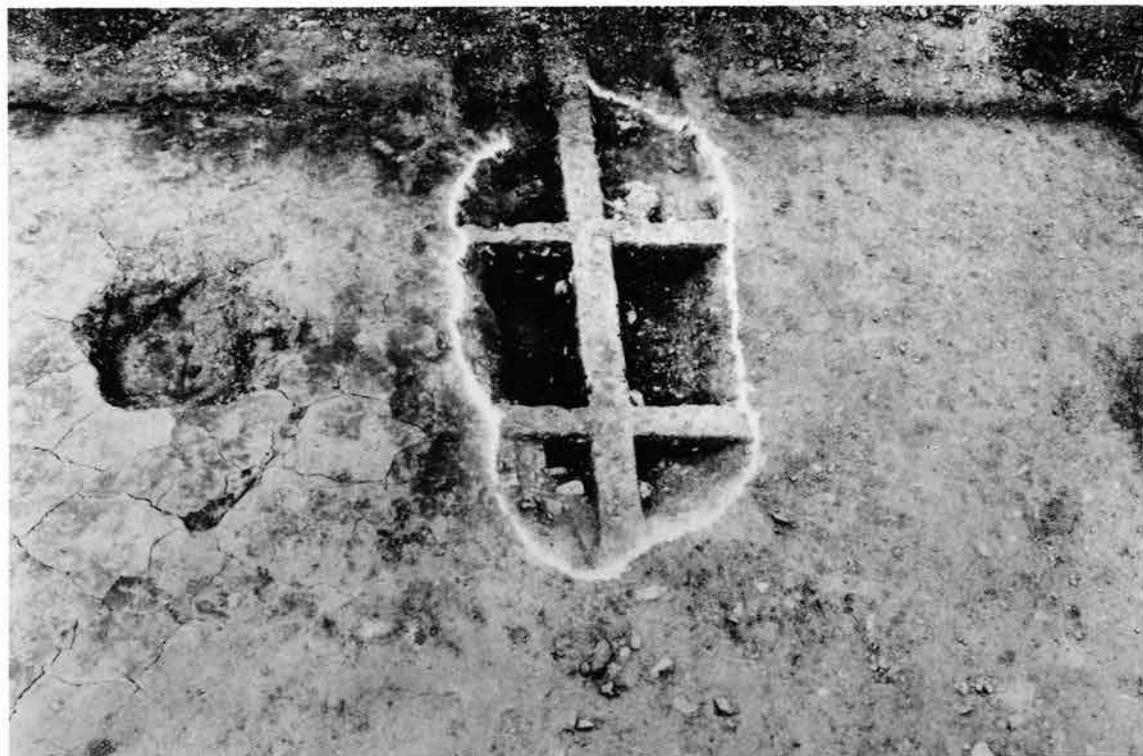
(2) 調査地全景 1回目 (A地区)(東から)



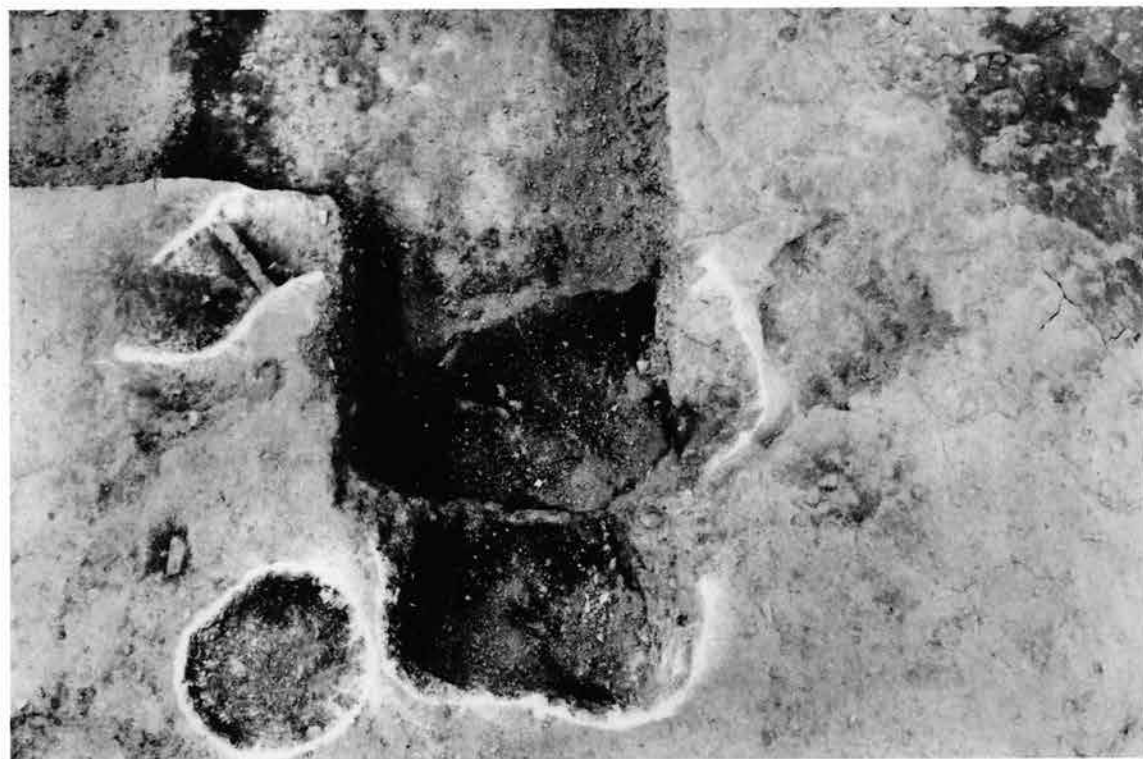
(1) 溝SD01と石敷土壇SK02 (東から)



(2) 石敷土壇SK02 (南から)



(1) 土壙SK03 (西から)

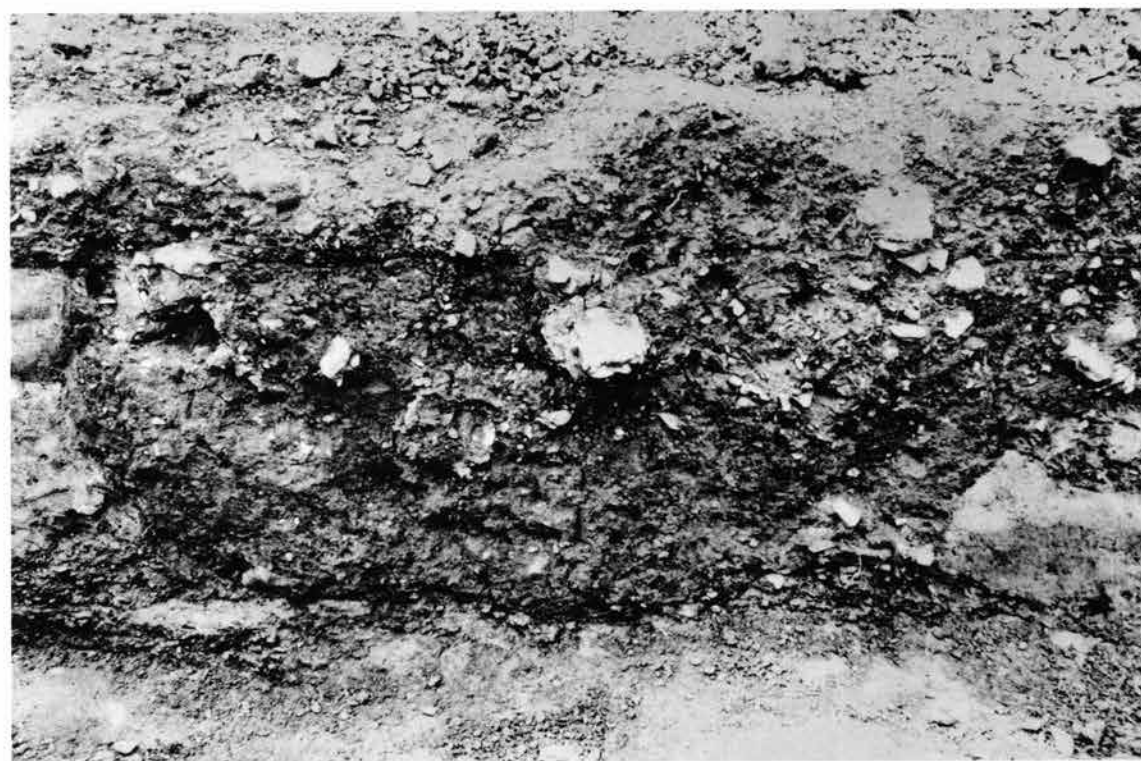


(2) 土壙・小土壙SK07～SK10 (南から)

図版第4 広隆寺跡



(1) 土壙SK04～SK06 (南から)



(2) 土壙SK05北壁



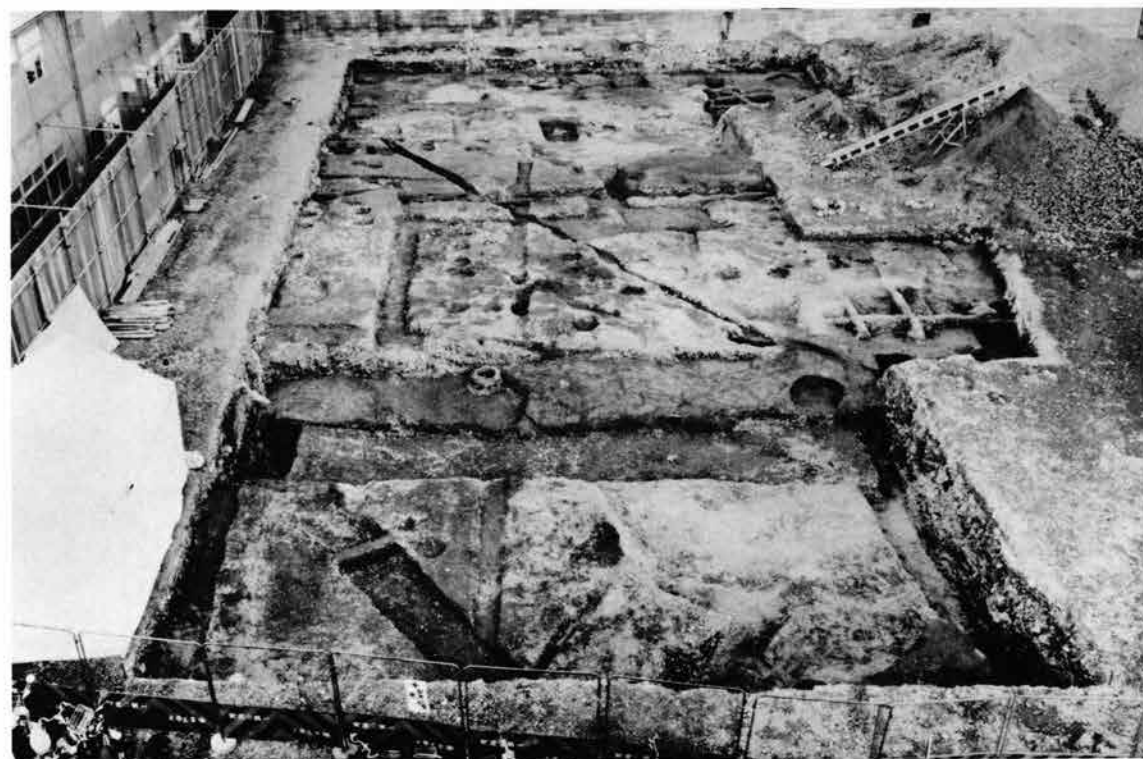
(1) 北壁(北東角)



(2) 西壁(北西角)



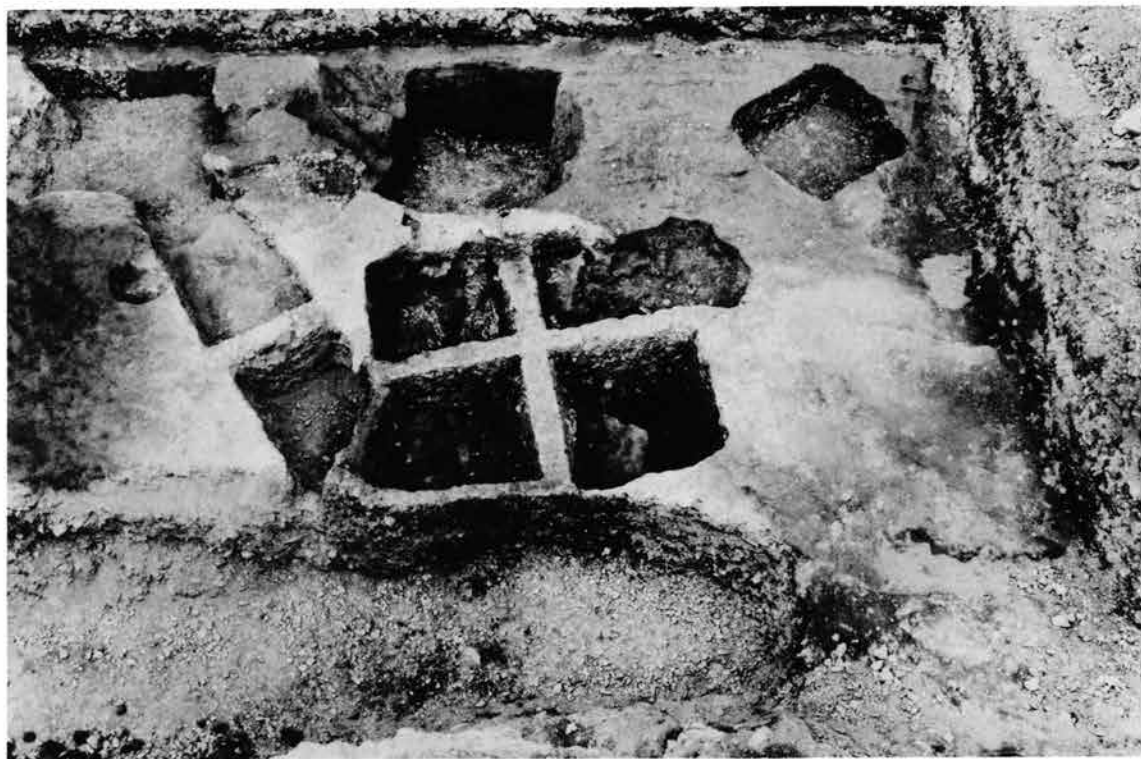
(1) 調査地全景 2回目 (B地区)(東から)



(2) 調査地全景 2回目 (B地区)(西から)



(1) 中央拡張部 土壙SK13 (西から)



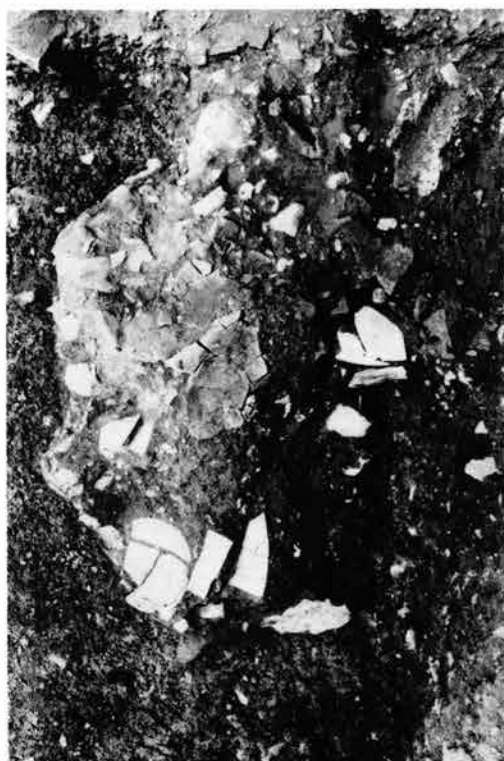
(2) 東部拡張部 鑄造遺構SK22 (西から)



(1) 鑄造遺構SK22 (西から)



(2) 鑄造遺構 梵鐘鑄土台 (南から)



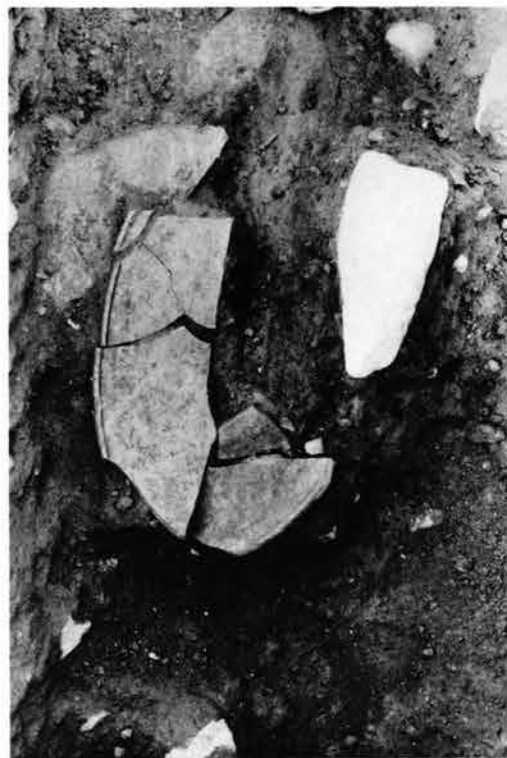
(3) 土壙SK03遺物出土状況



(4) 土壙SK03遺物出土状況



(1) 溝SD01遺物出土状況



(2) 溝SD01遺物出土状況



(3) 土壙SK13遺物出土状況



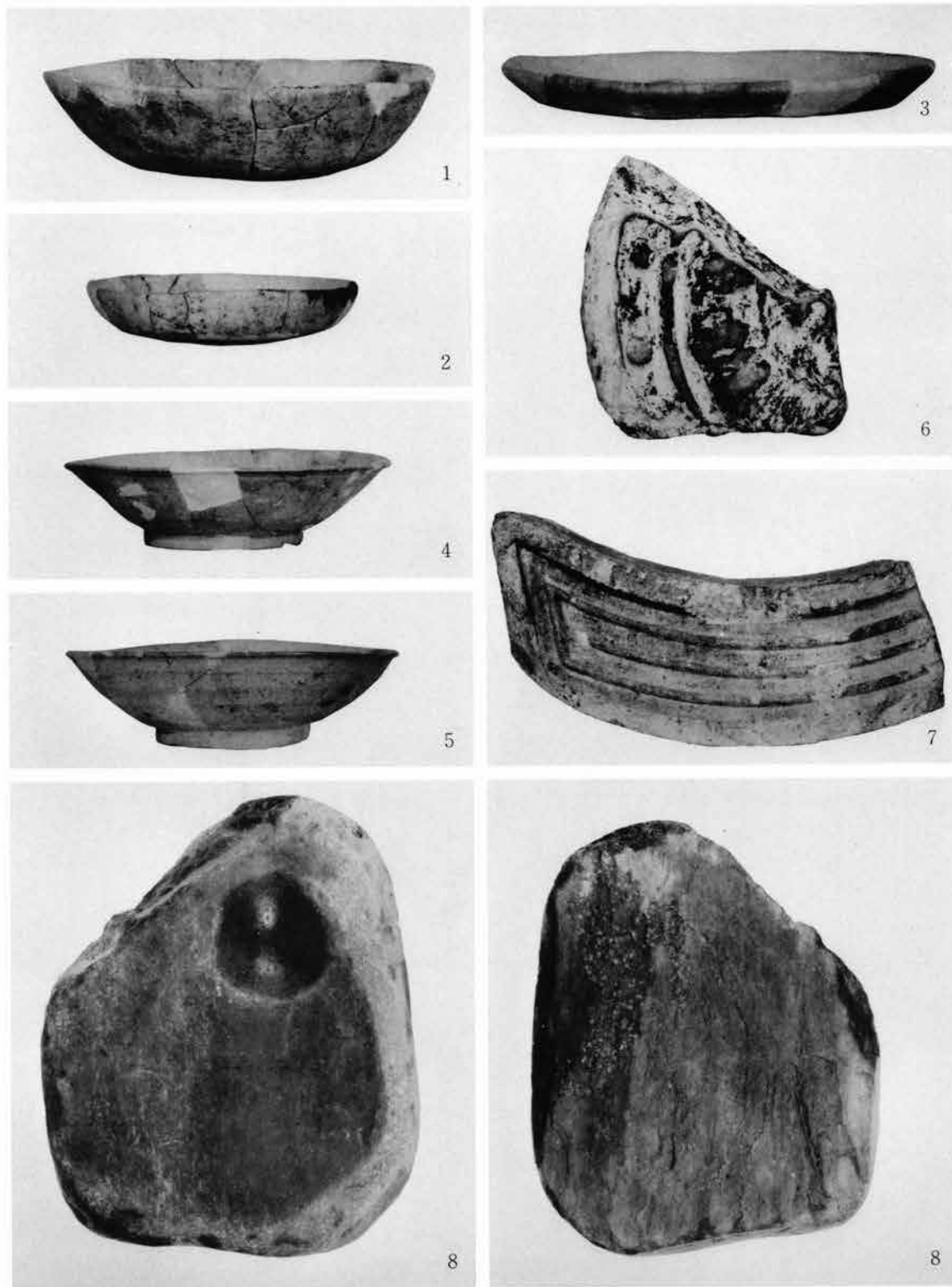
(4) 土壙SK13下層遺物出土状況



(1) 土壙SK03遺物出土状況



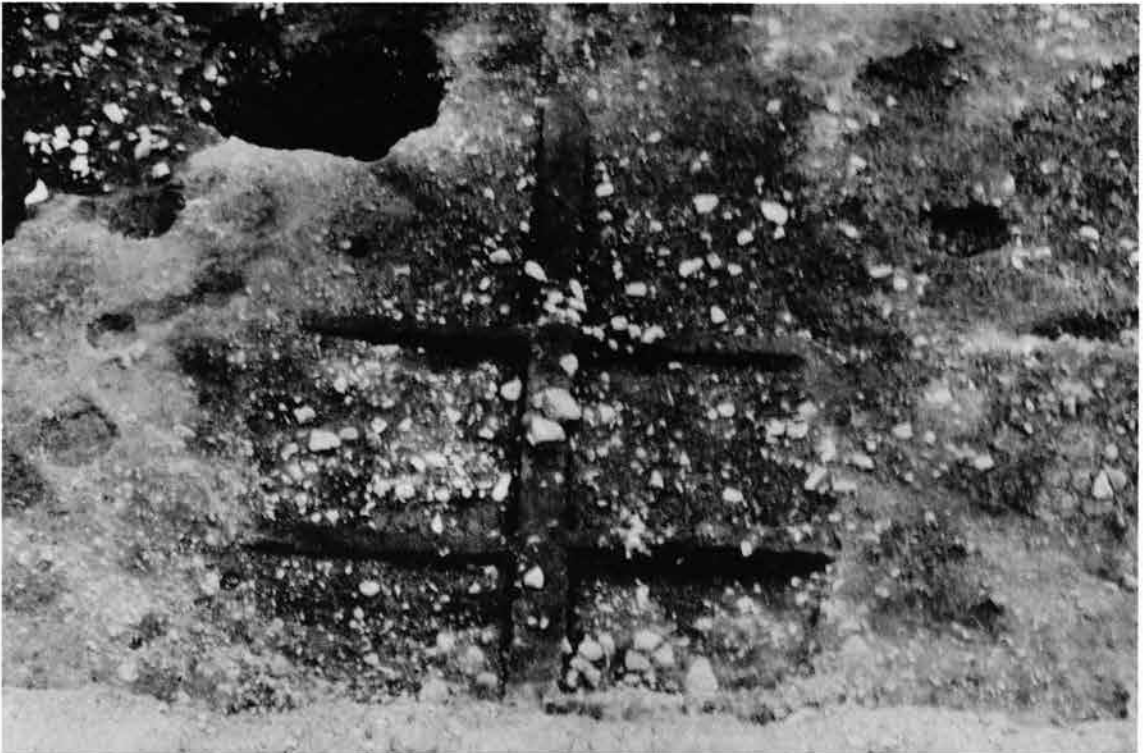
(2) 石敷土壙SK02の底に敷かれた軒丸瓦



1. 土師器環 2. 土師器皿 3. 須恵器皿 4. 5. 灰釉陶器 6. 軒丸瓦
7. 軒平瓦 8. 石製硯



(1) トレンチ全景 (東から)



(2) SX11 (北から)



(1) 落込み遺構及び土壙墓群（東から）



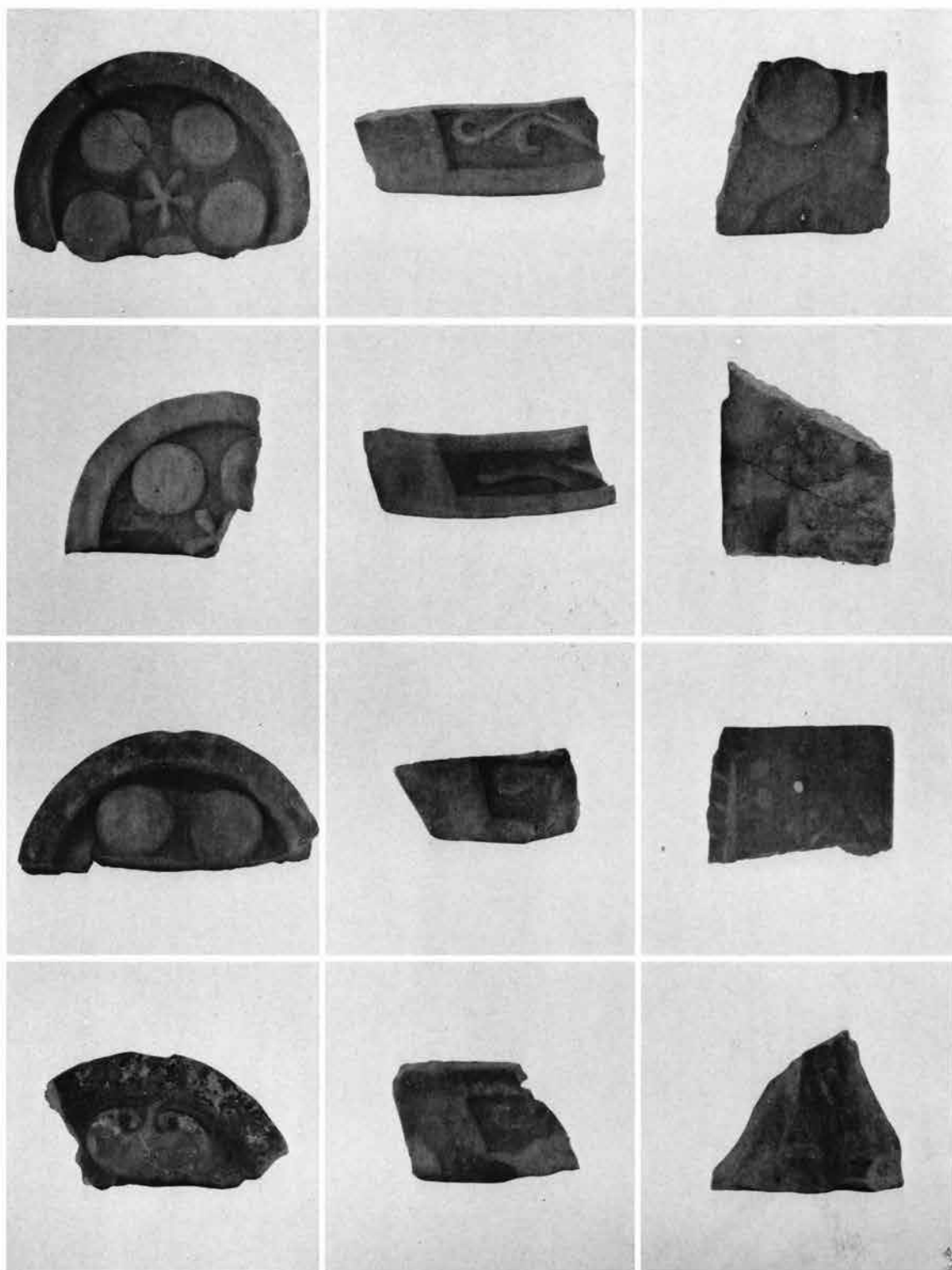
(2) 土壙墓SK15（南から）



(1) 石室(北から)

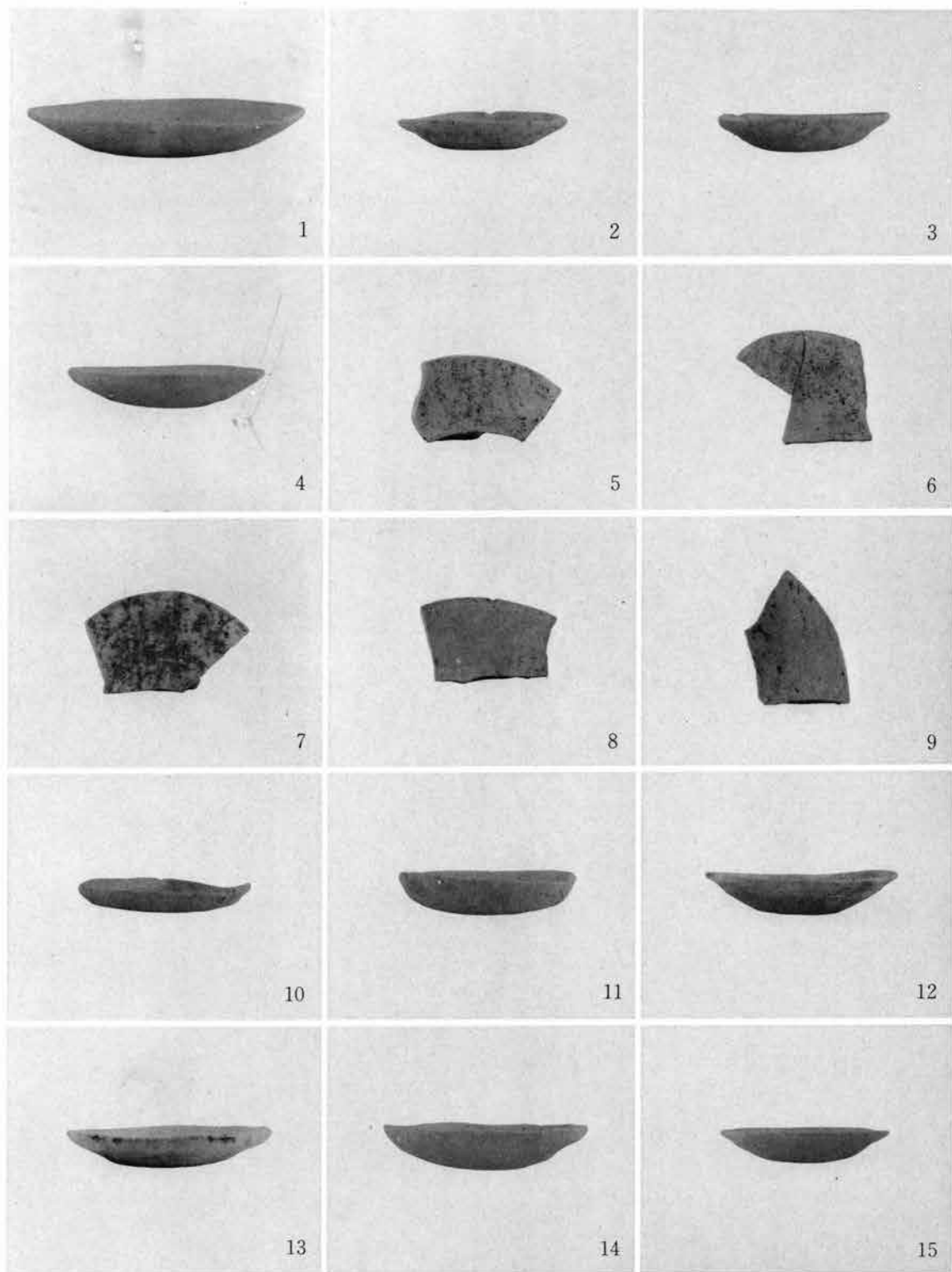


(2) 石室(東から)



落込み遺構出土金箔瓦

図版第16 平安京跡左京北辺二坊



出土遺物 1~6. SX15出土 7~9. SX11出土 10. SK08出土 11. SK09出土 12. SK04出土
13~15. 近世層出土



(1) 上層遺構検出状況（東から）



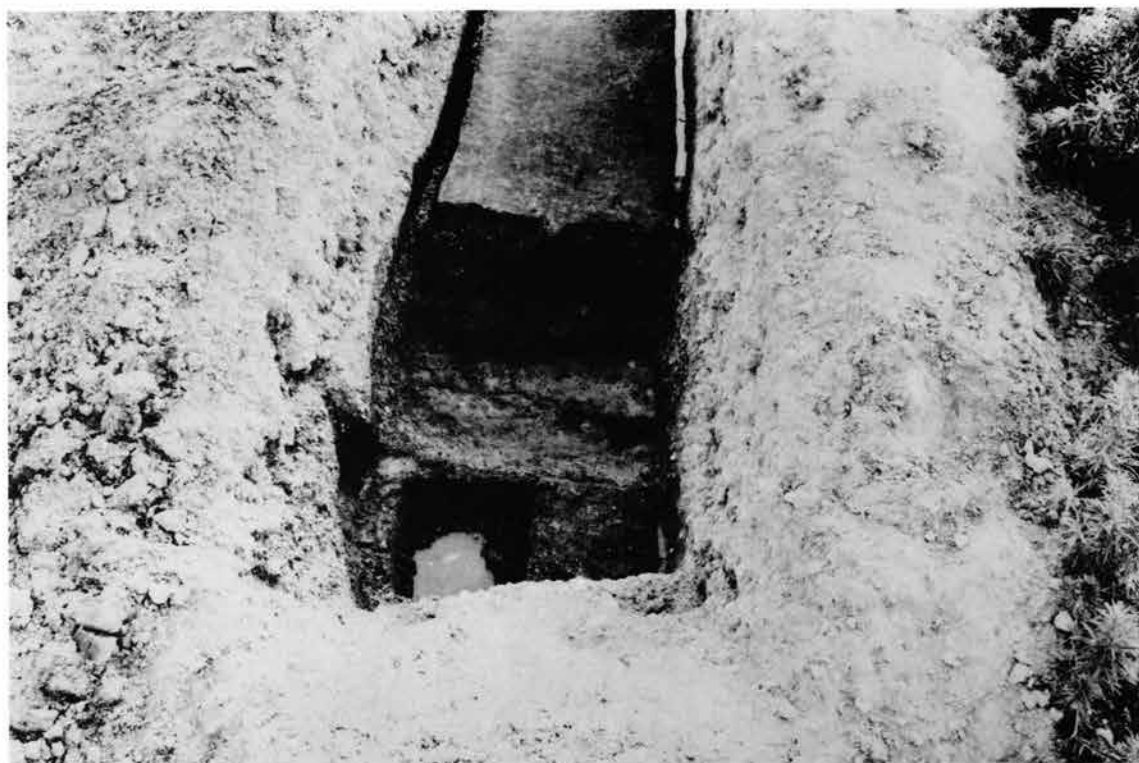
(2) 上層遺構検出状況（西から）



(1) 下層遺構検出状況（東から）



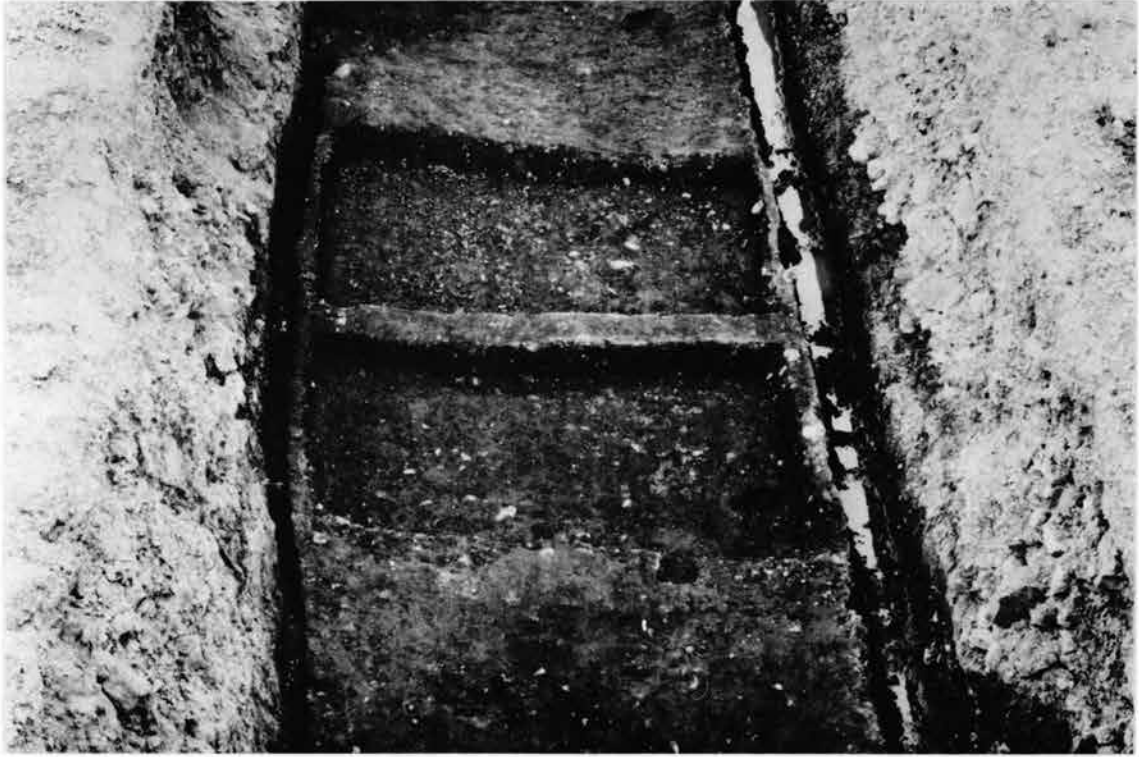
(2) 下層遺構検出状況（西から）



(1) SD7606（東から）



(2) SD7606（北から）



(1) SB7609 (西から)



(2) 遺物出土状況 (灰色砂礫層)



(3) 遺物出土状況 (灰色砂層)

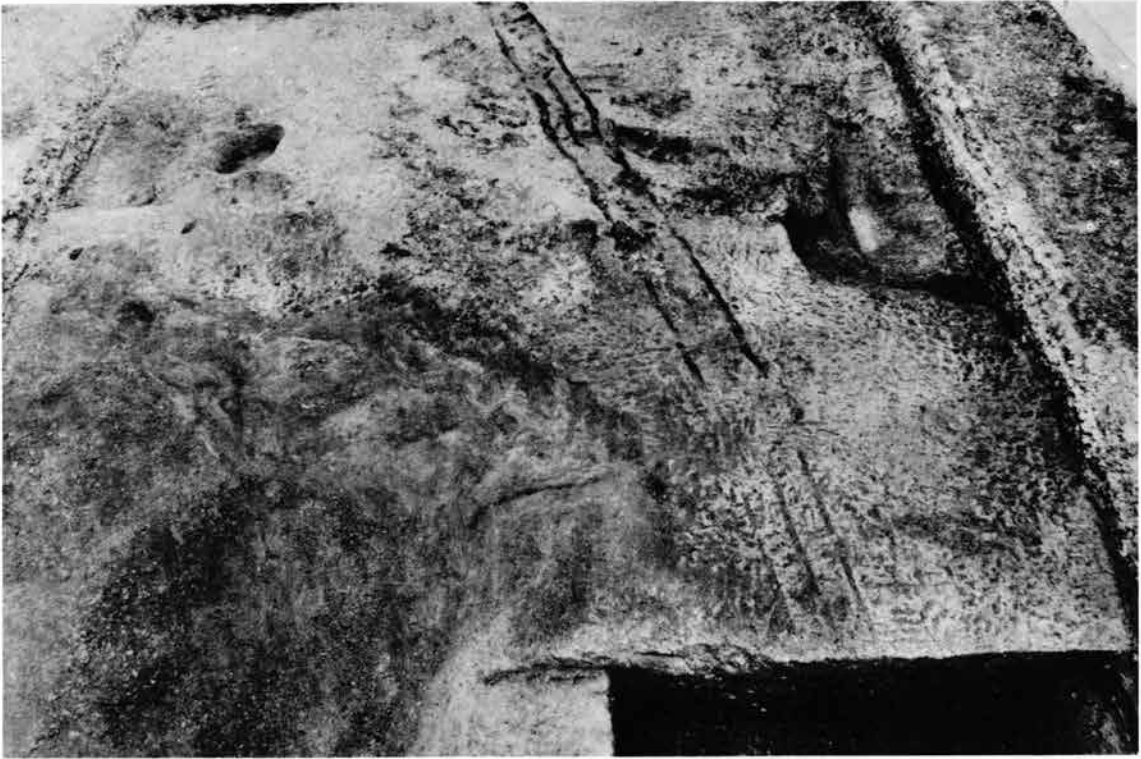




(1) 調査地全景（南から）



(2) トレンチ全景（西から）



(1) トレンチ全景 (南から)



(2) トレンチ南壁断面



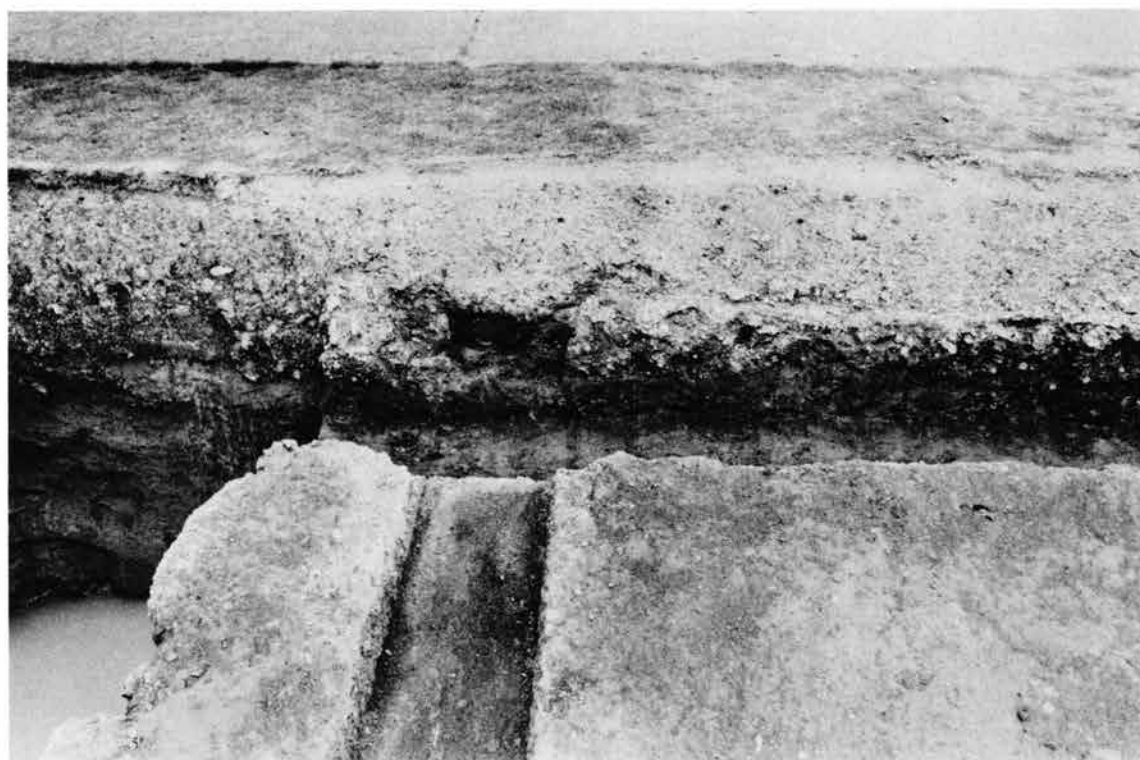
(1) 調査地全景（北東から）



(2) トレンチ全景（北から）



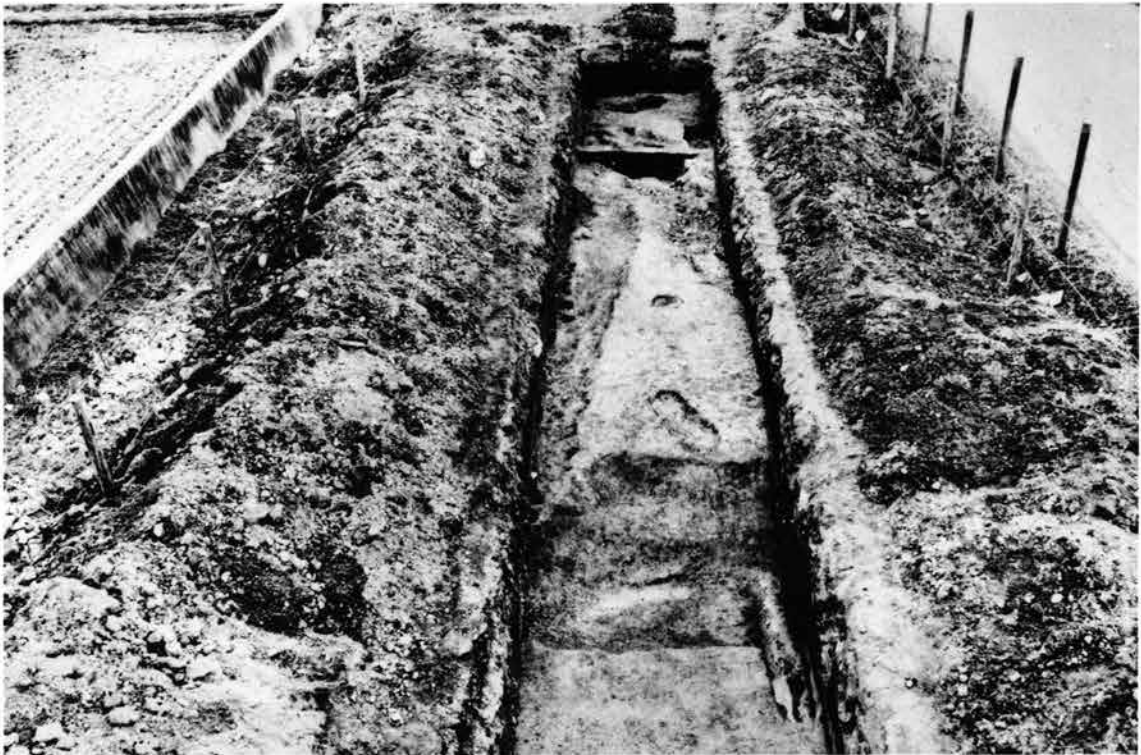
(1) トレンチ全景（西から）



(2) トレンチ南壁断面



(1) 調査地全景 (北西から)



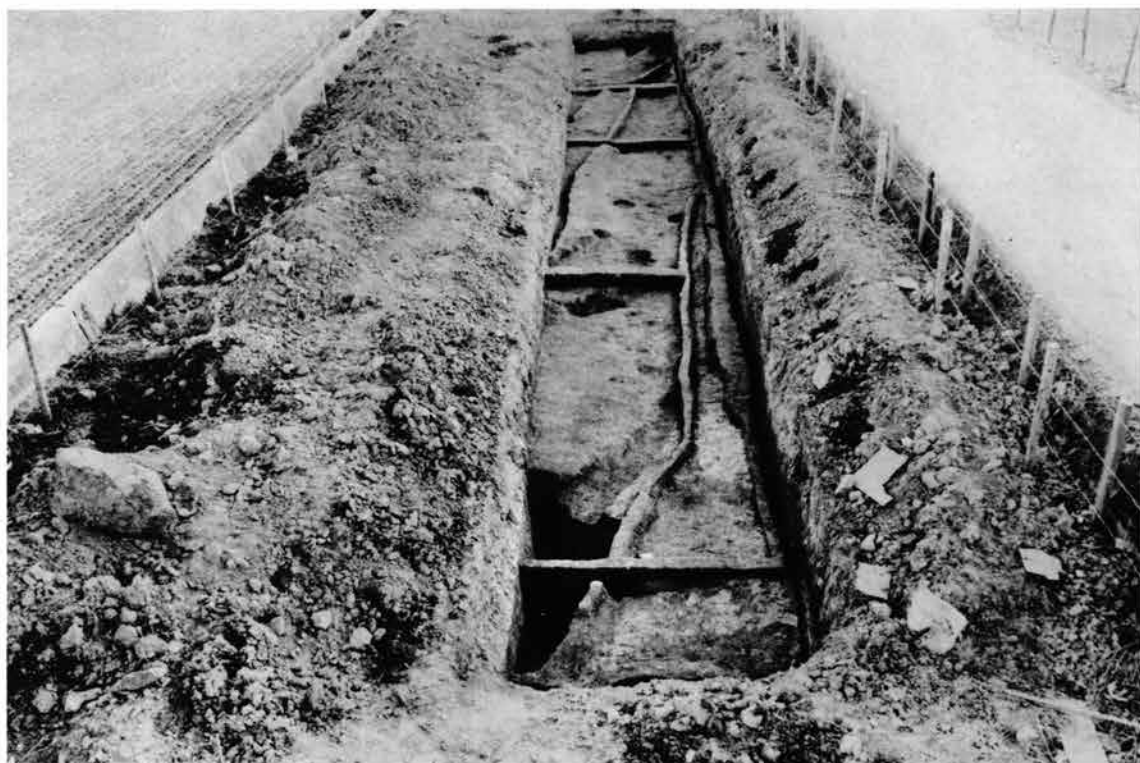
(2) Aトレンチ全景 (北から)



(1) 拡張後Aトレンチ全景（南から）



(2) 拡張後Aトレンチ全景（北から）



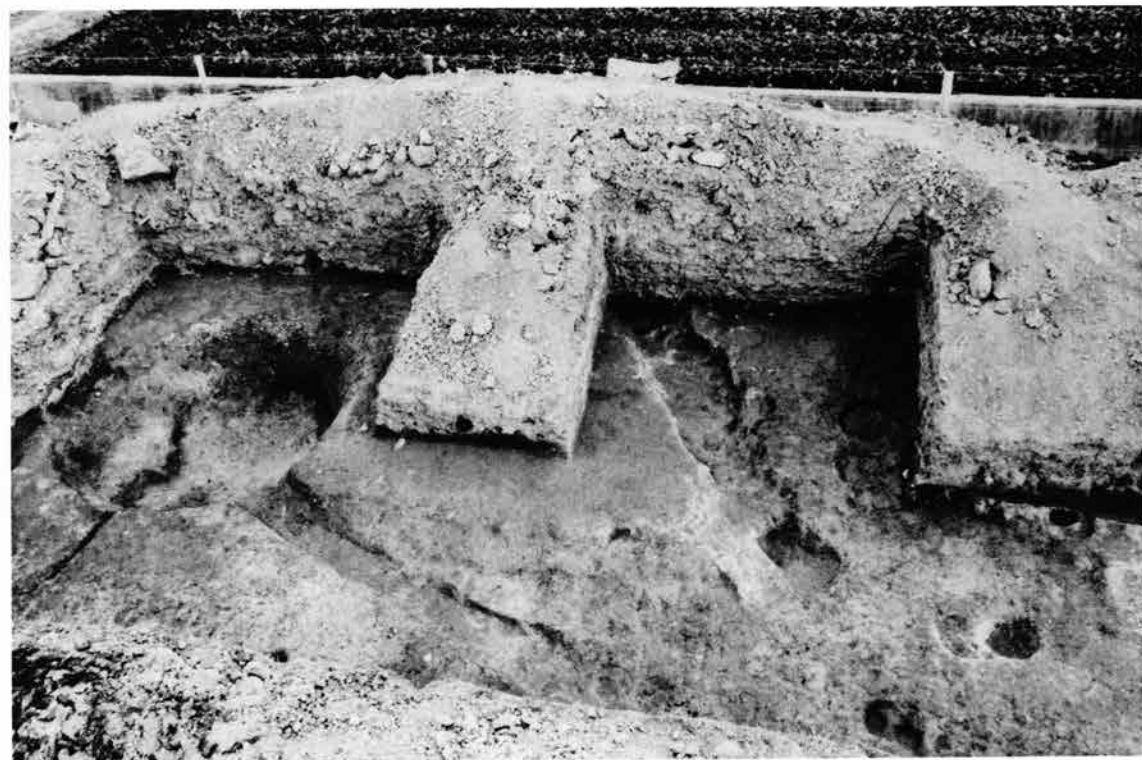
(1) Bトレンチ全景（北から）



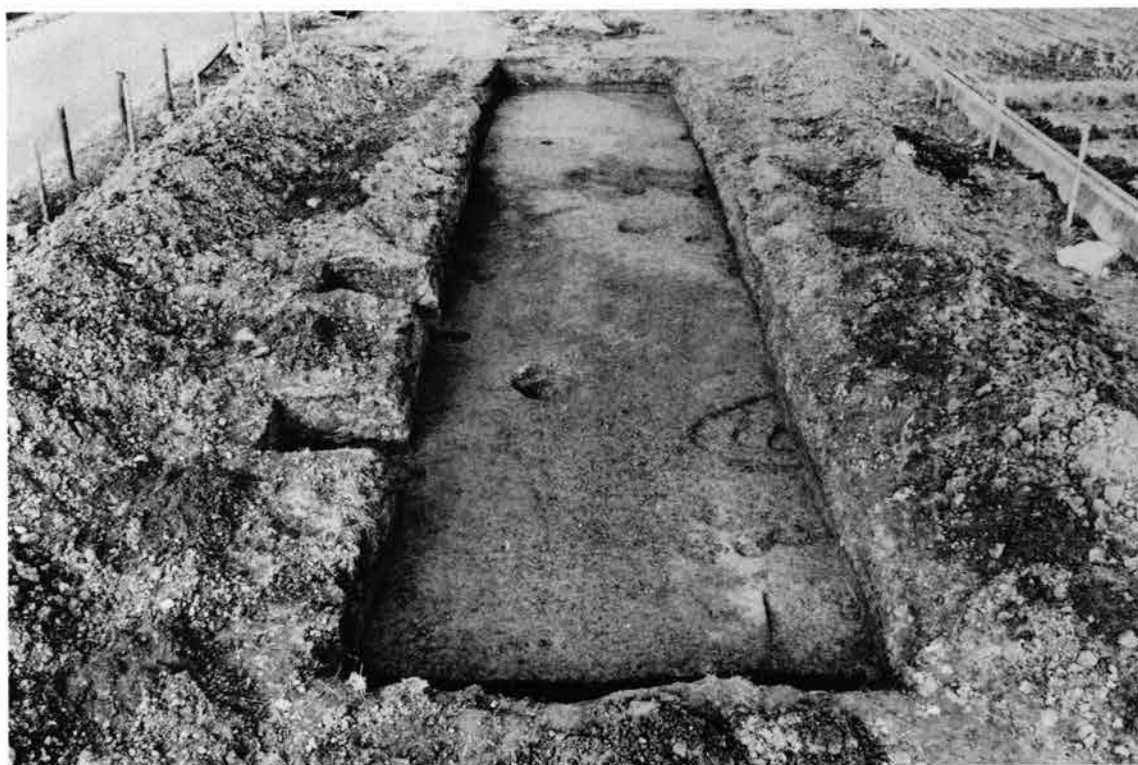
(2) BトレンチSD8315完掘後状況（北から）



(1) 拡張後Bトレンチ全景（北から）



(2) Bトレンチ拡張部（西から）



(1) Cトレンチ全景（南から）



(2) SK8323（西から）



(1) Dトレンチ全景（北から）



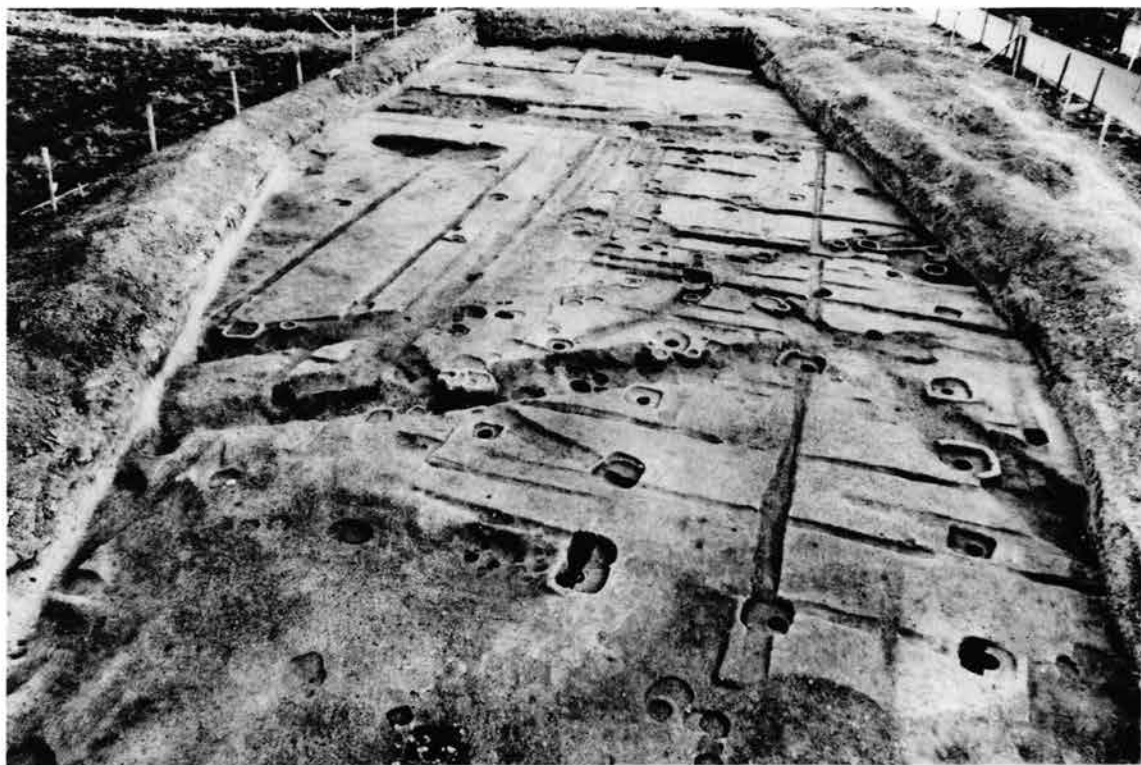
(2) Dトレンチ全景（南から）



(1) Eトレンチ全景 (北から)



(2) SE8332 (西から)



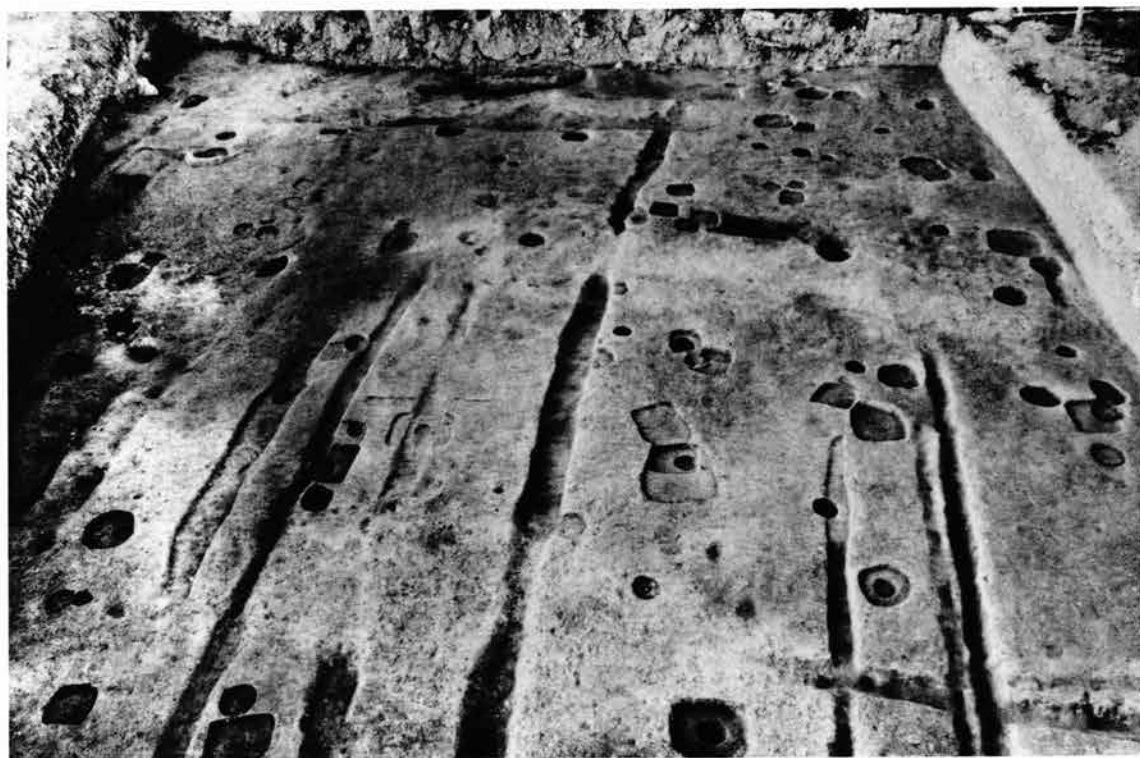
(1) Fトレンチ全景（北から）



(2) Fトレンチ全景（南から）



(1) Gトレンチ全景 (西から)



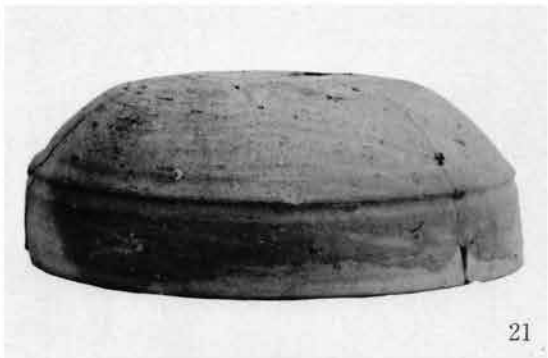
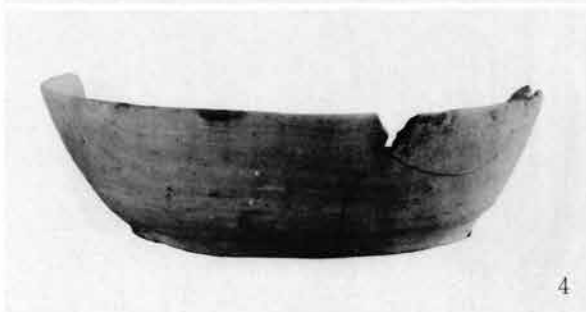
(2) Gトレンチ全景 (南から)



(1) Hトレンチ全景（北から）



(2) Hトレンチ全景（南から）

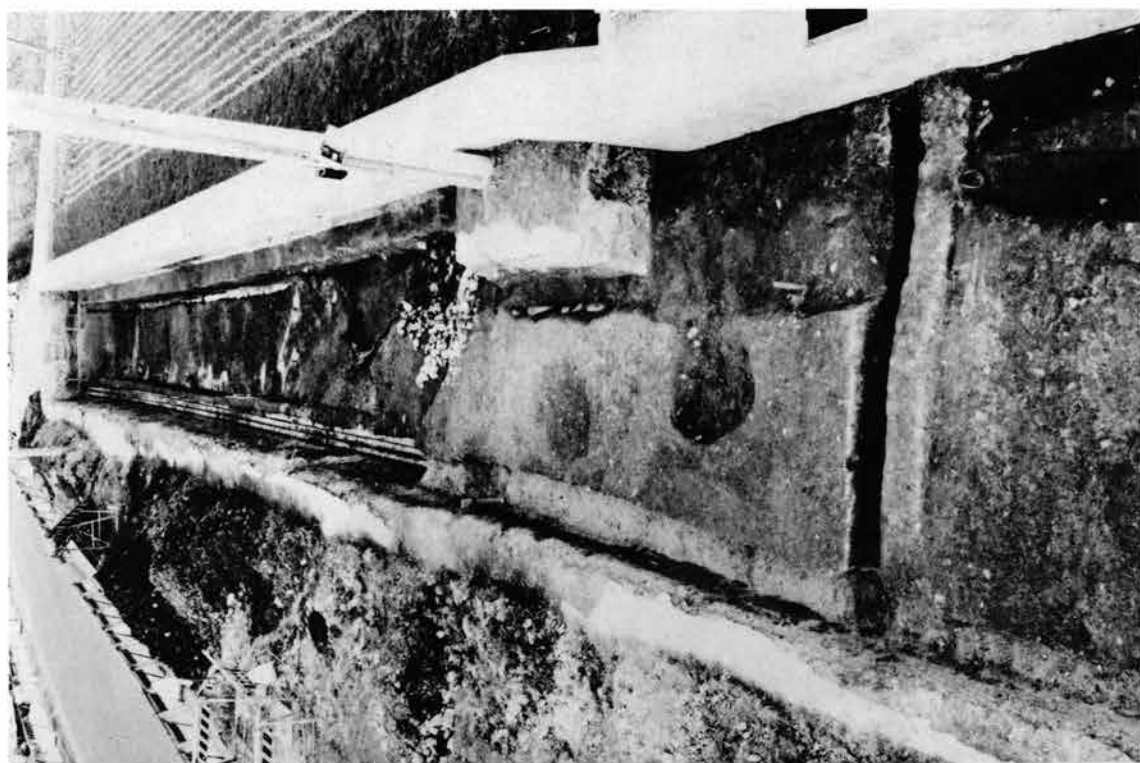




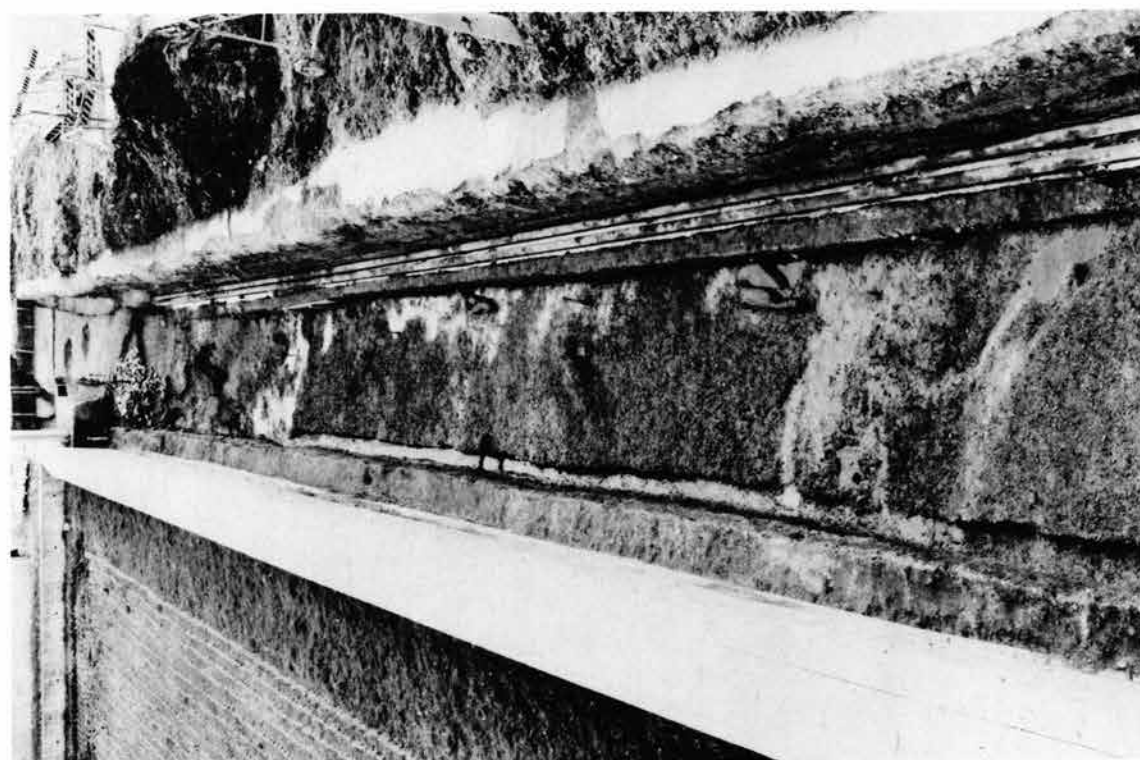
(1) 北トレンチ北端南北溝SD8401（北から）



(2) 南トレンチ南北溝SD8402（北から）



(2) 今里車塚古墳周濠SD1288（南から）



(1) 今里車塚古墳周濠SD1288（北から）



(2) 今里塚古墳墳丘部 (南から)



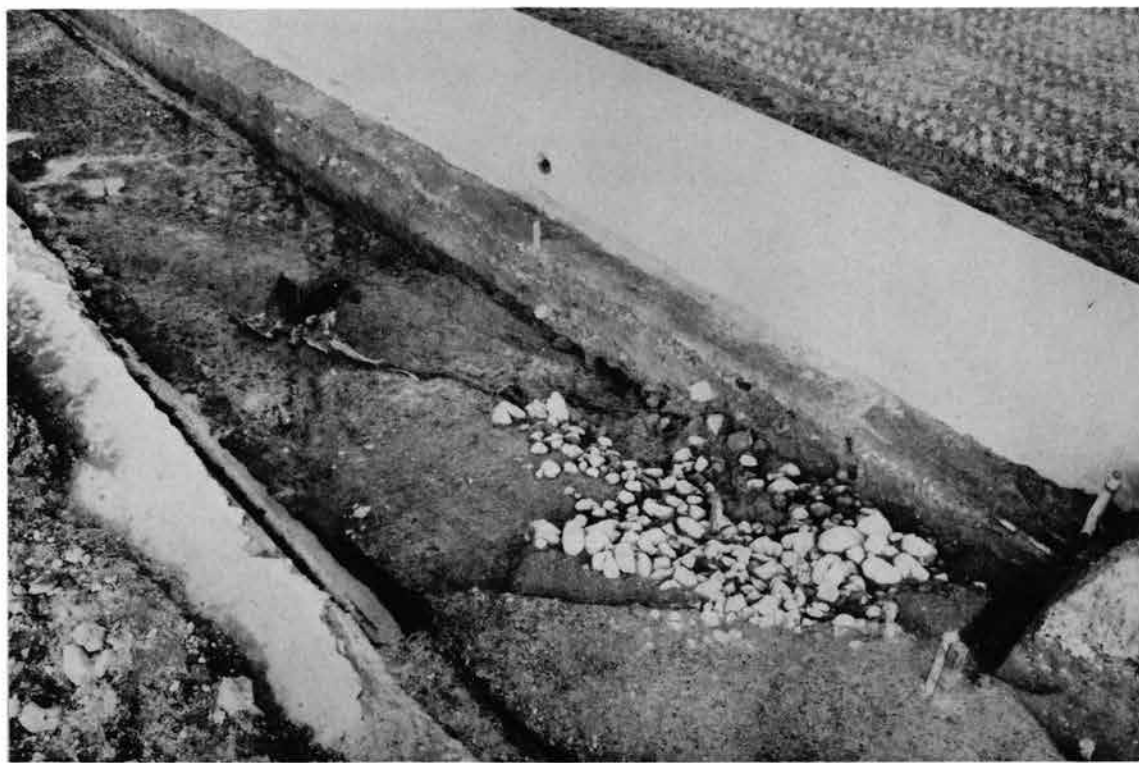
(1) 今里塚古墳くびれ部・周濠SD1278全景 (北から)



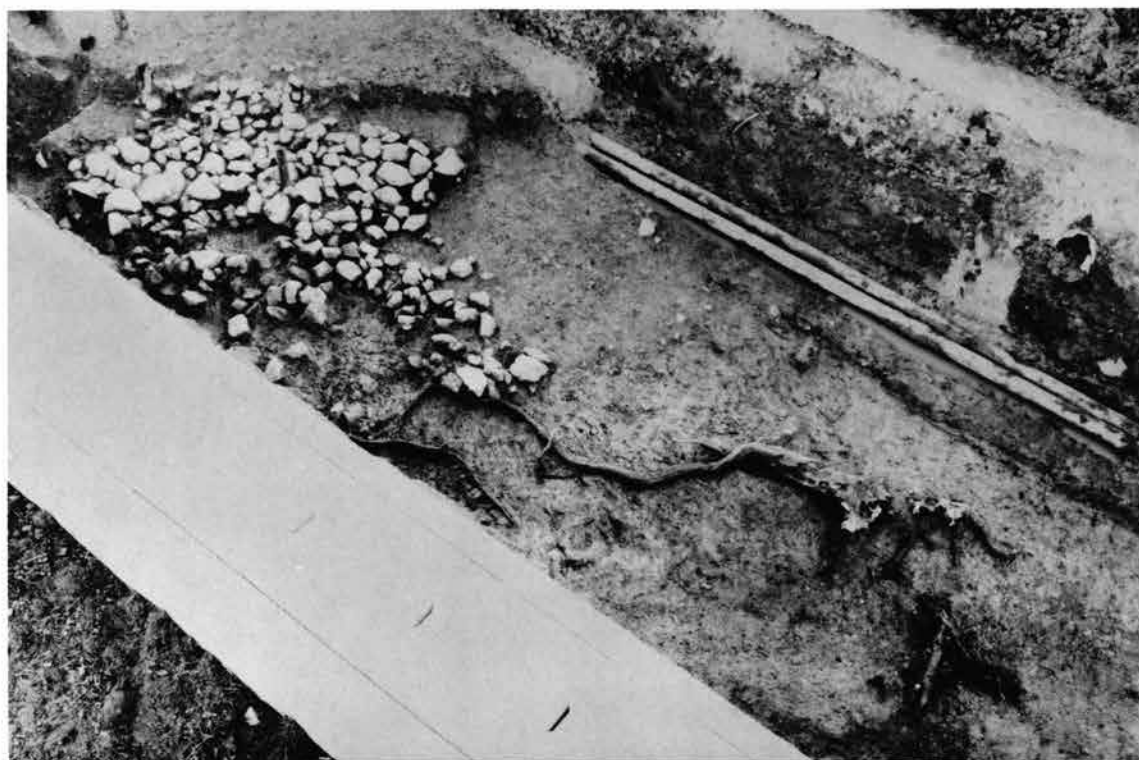
(1) 今里車塚古墳くびれ部（北から） 手前は柱根及び転落石
上は近代溝・杭列と井戸SE8404



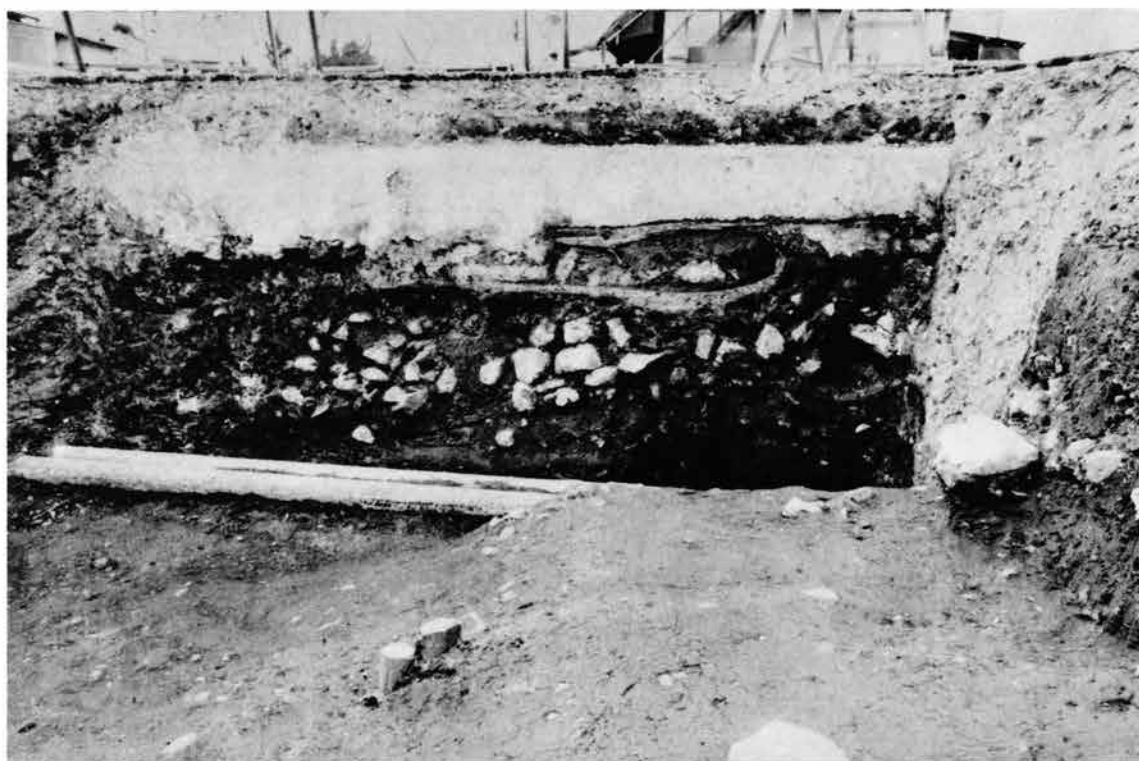
(2) 今里車塚古墳周濠SD1288北端（北から）



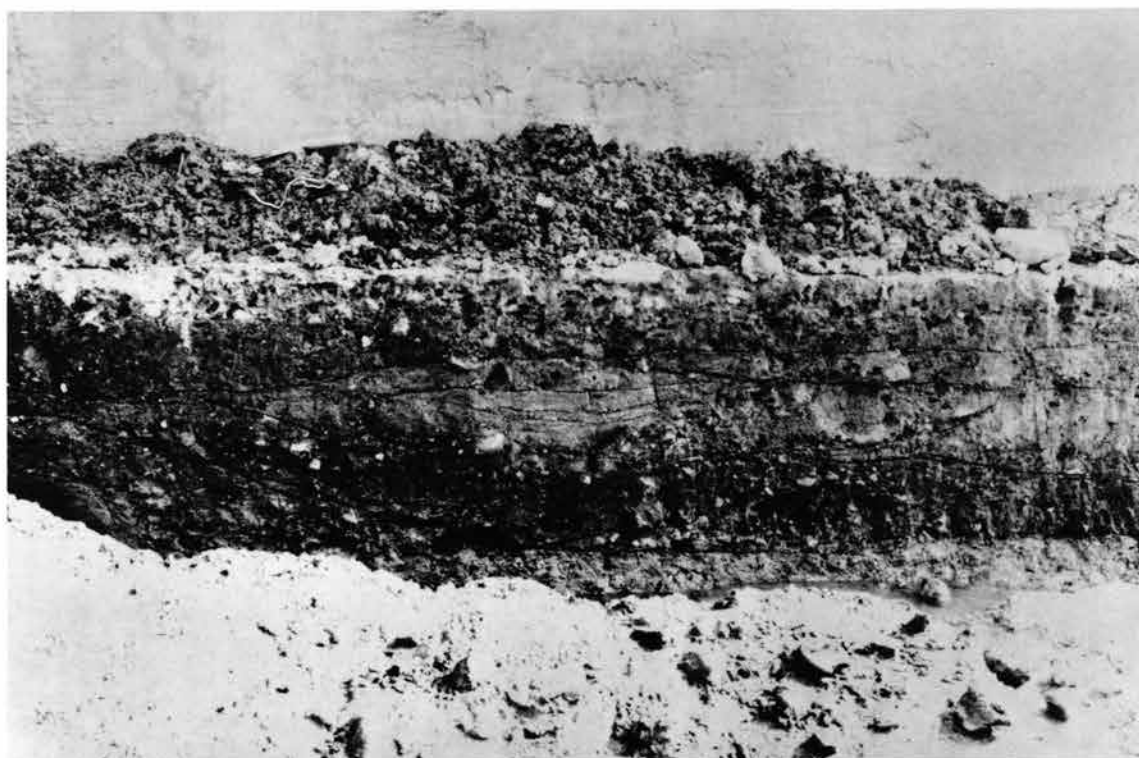
(1) 今里車塚古墳葺石及び転落石 (南西から)



(2) 今里車塚古墳葺石及び転落石 (北東から)



(1) 今里車塚古墳くびれ部の柱根No11と転落石



(2) 今里車塚古墳周濠SD1288北端の東壁



(1) 南トレンチ西壁断割



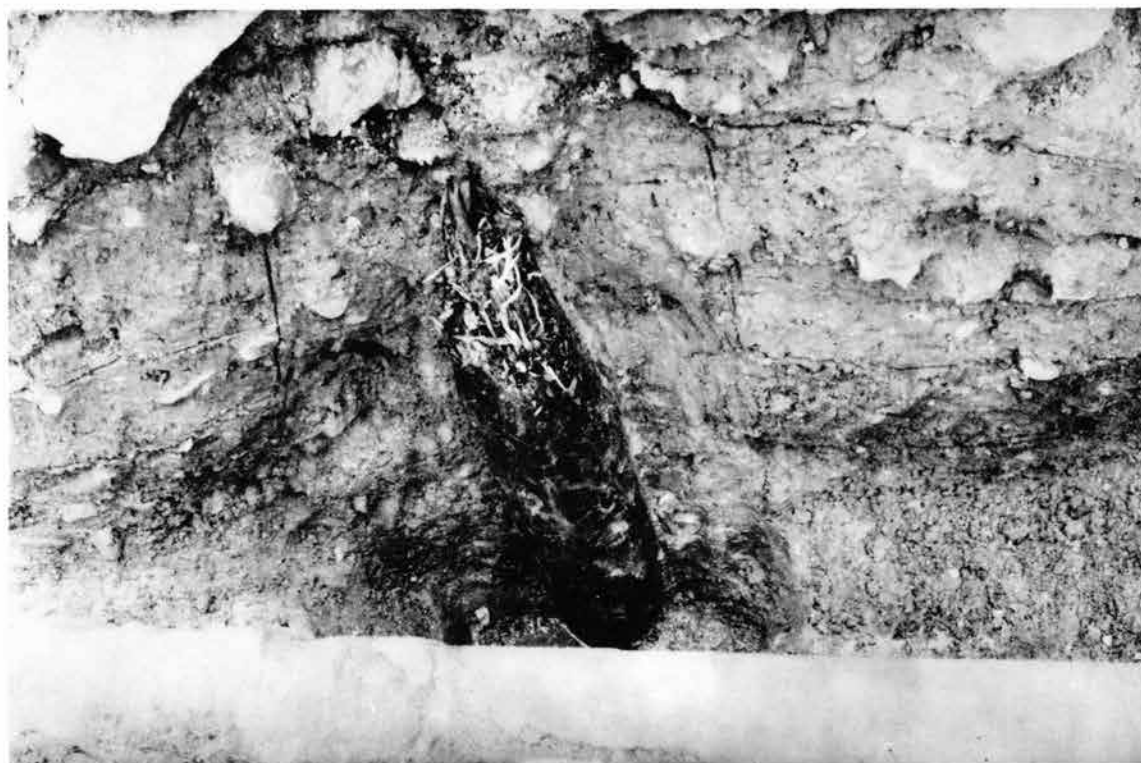
(2) 南トレンチ西壁断割



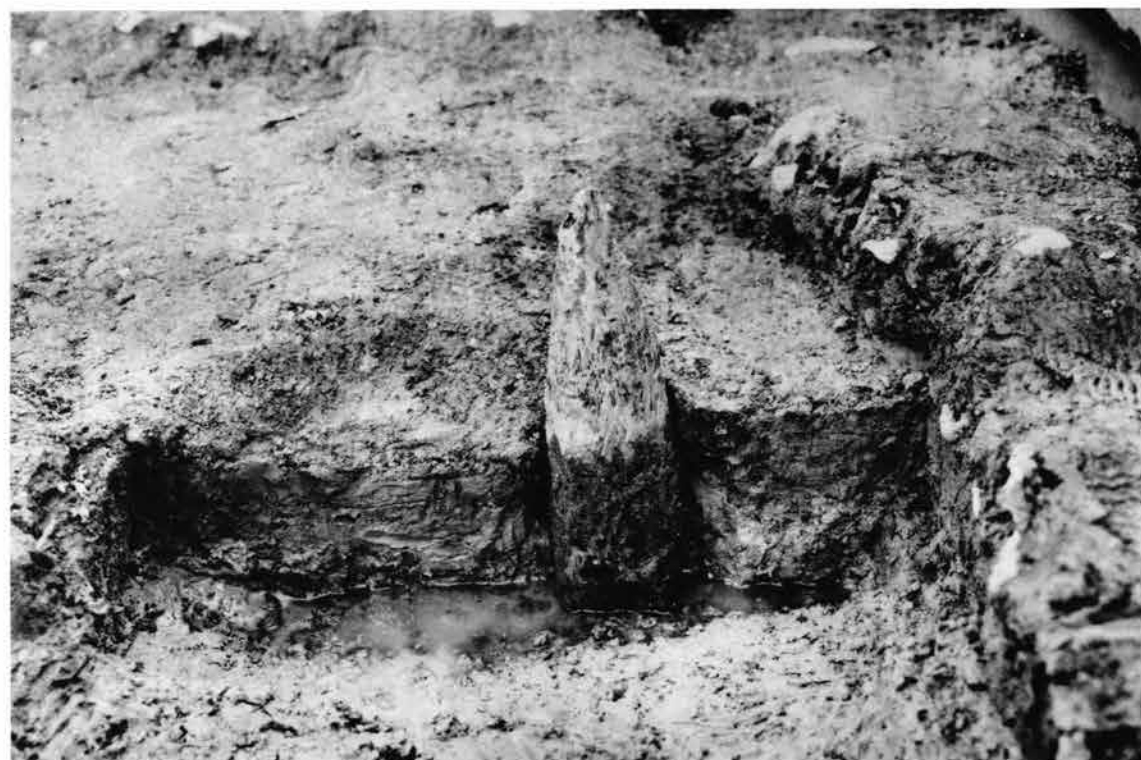
(1) 今里車塚古墳前方部断面と柱根No12



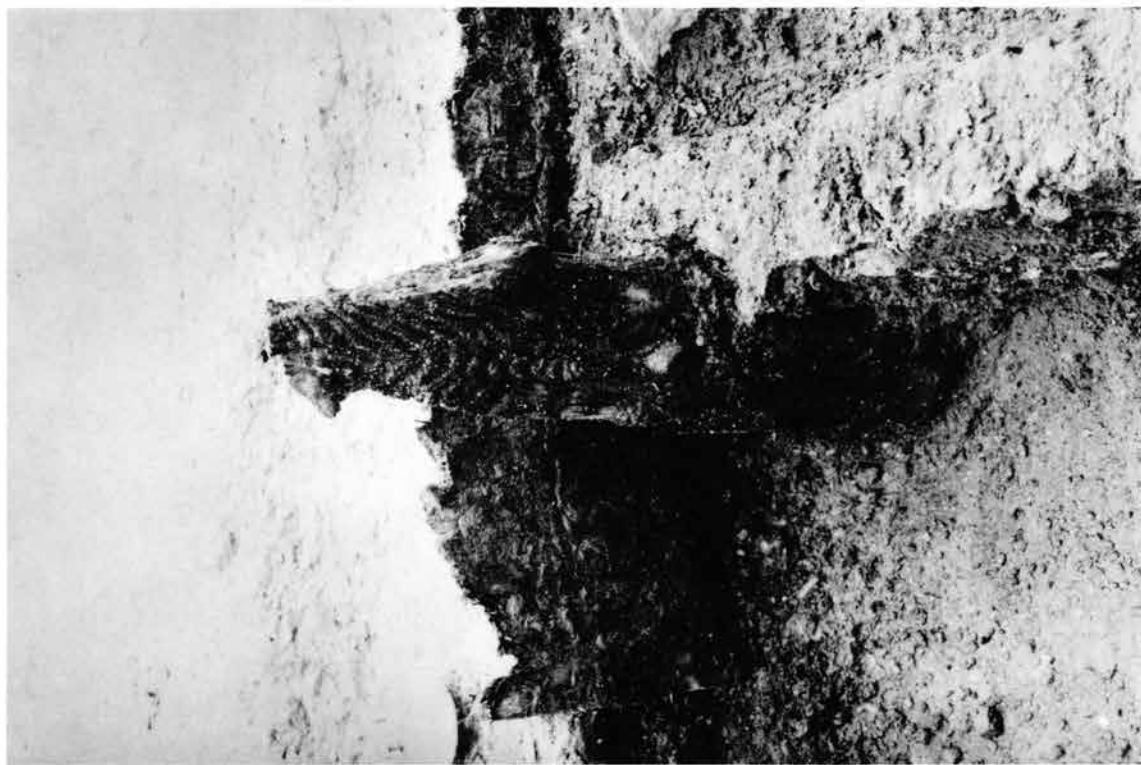
(2) 今里車塚古墳柱根No12と盾形木製品検出状況



(1) 柱根Na11検出状況（東から）



(2) 柱根Na10検出状況（北から）



(2) 柱根No.12と盾形木製品（北から）



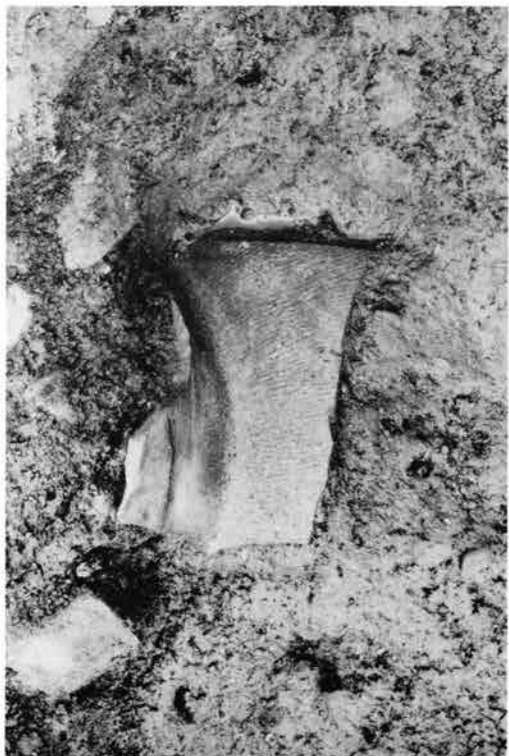
(1) 南周濠SD1278上層の近代溝（北から）



(3) 転落石の間の遺物出土状況



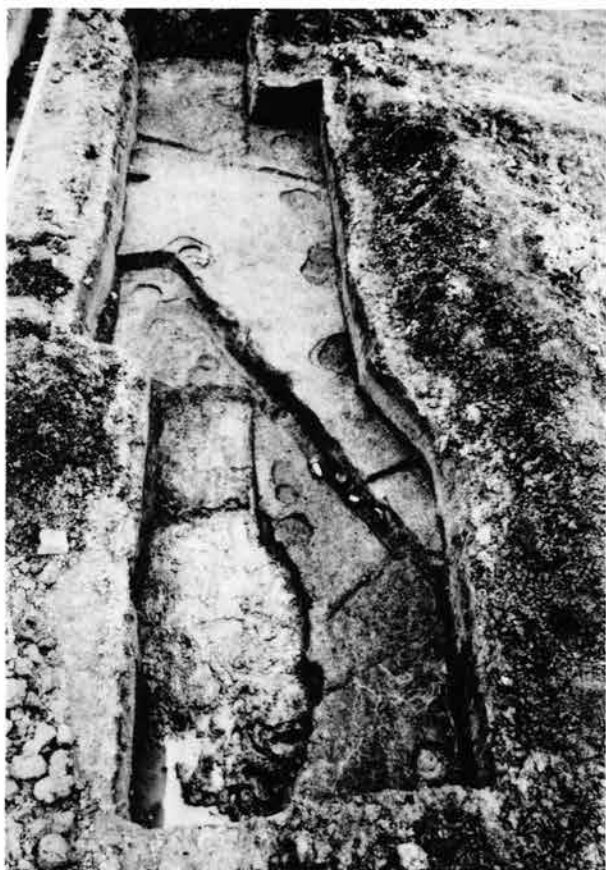
(4) 転落石の間の遺物出土状況



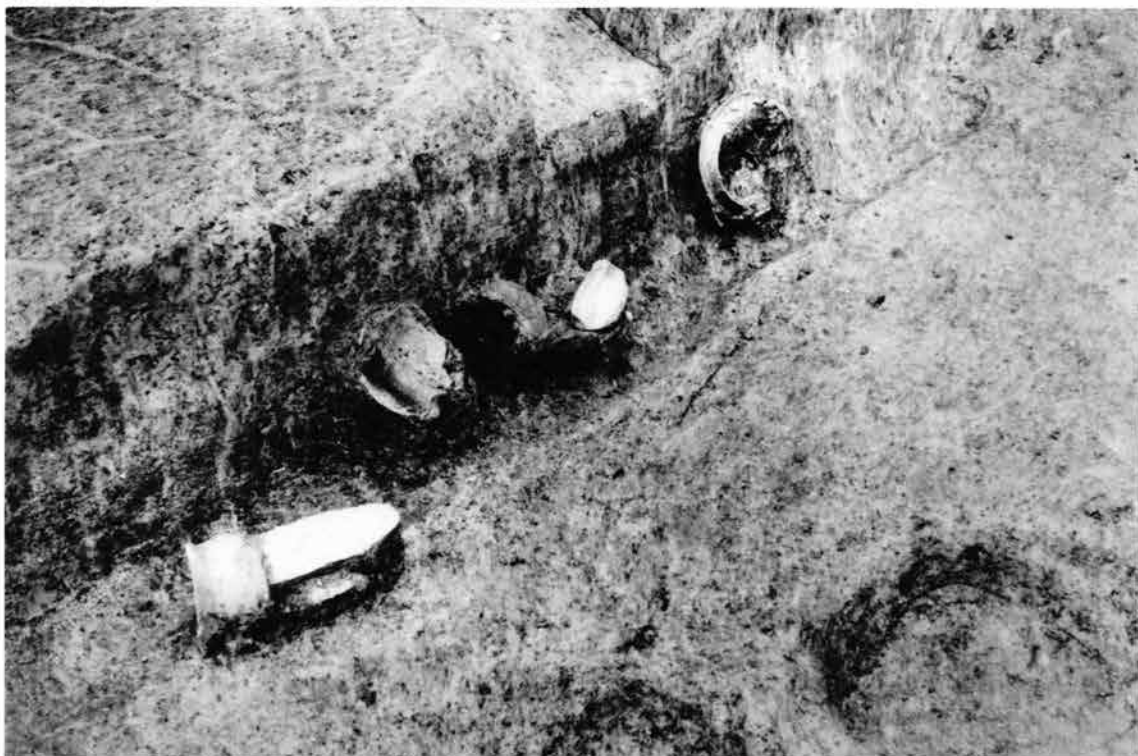
(1) 遺物出土状況 周濠SD1288上層



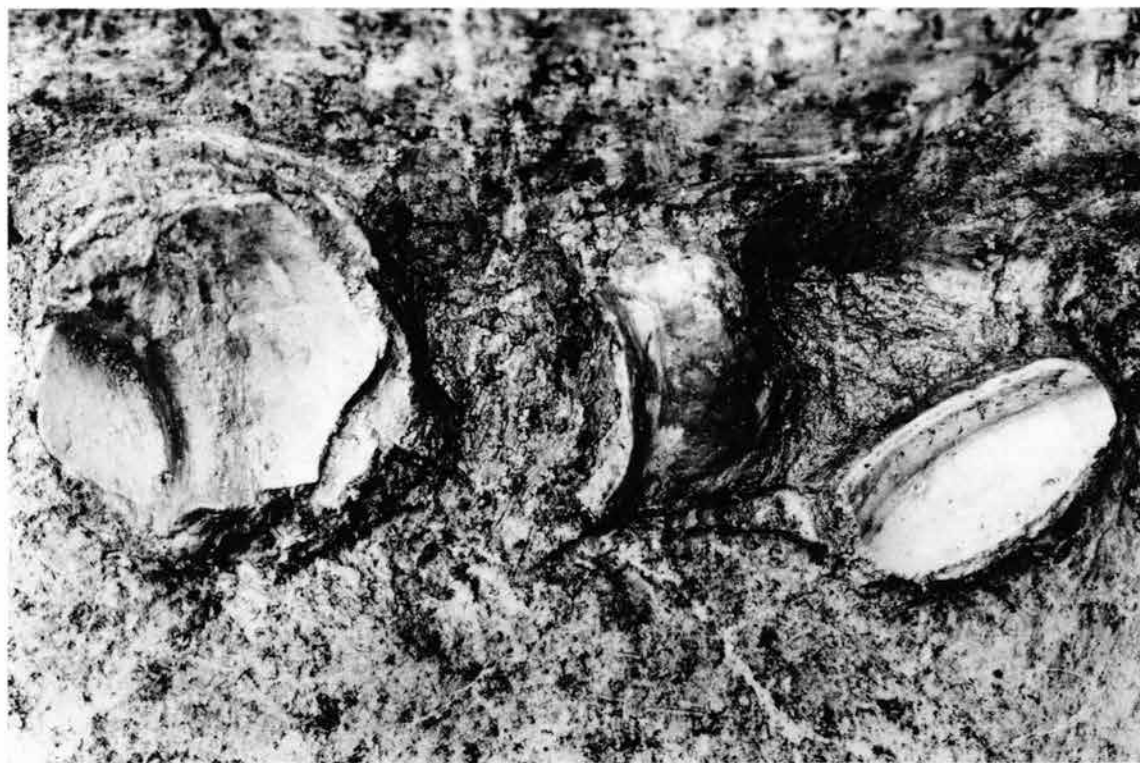
(2) 遺物出土状況 周濠SD1278下層



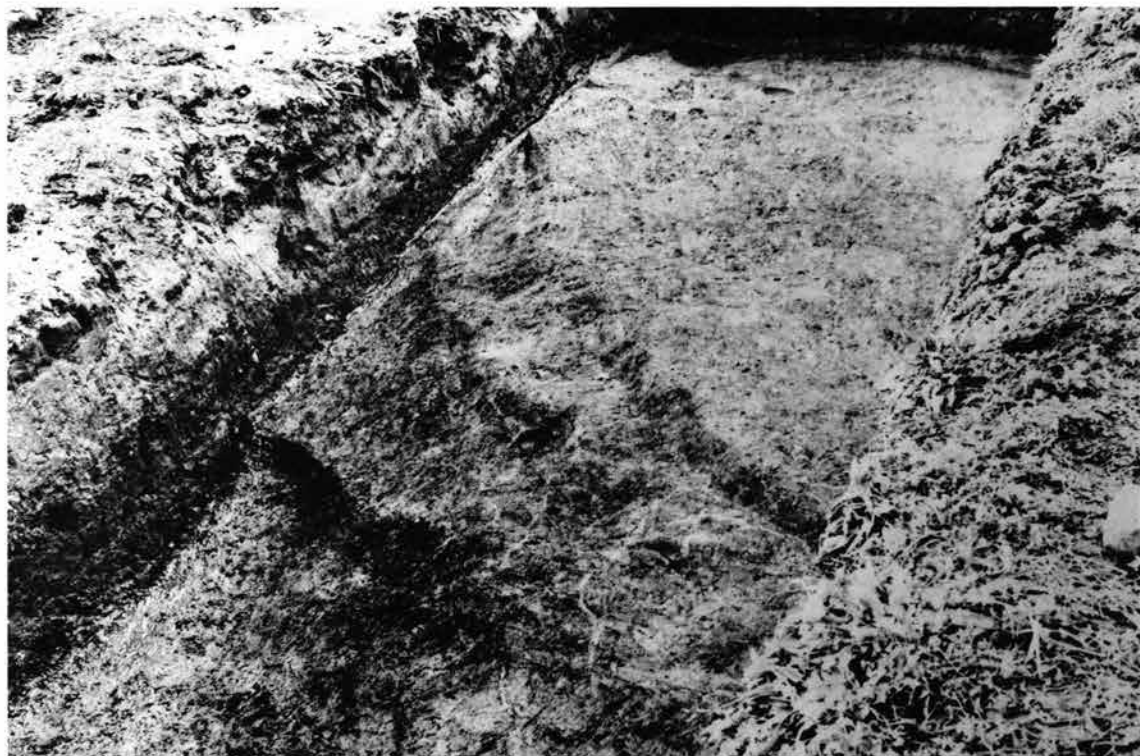
(1) A地区全景
(西から)



(2) A地区竪穴住居内遺物出土状況（北から）



(1) A地区竪穴住居内遺物出土状況(北から)



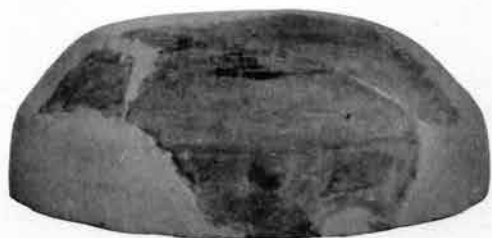
(2) B地区落込み状況(東から)



1



2



3



4



5



6

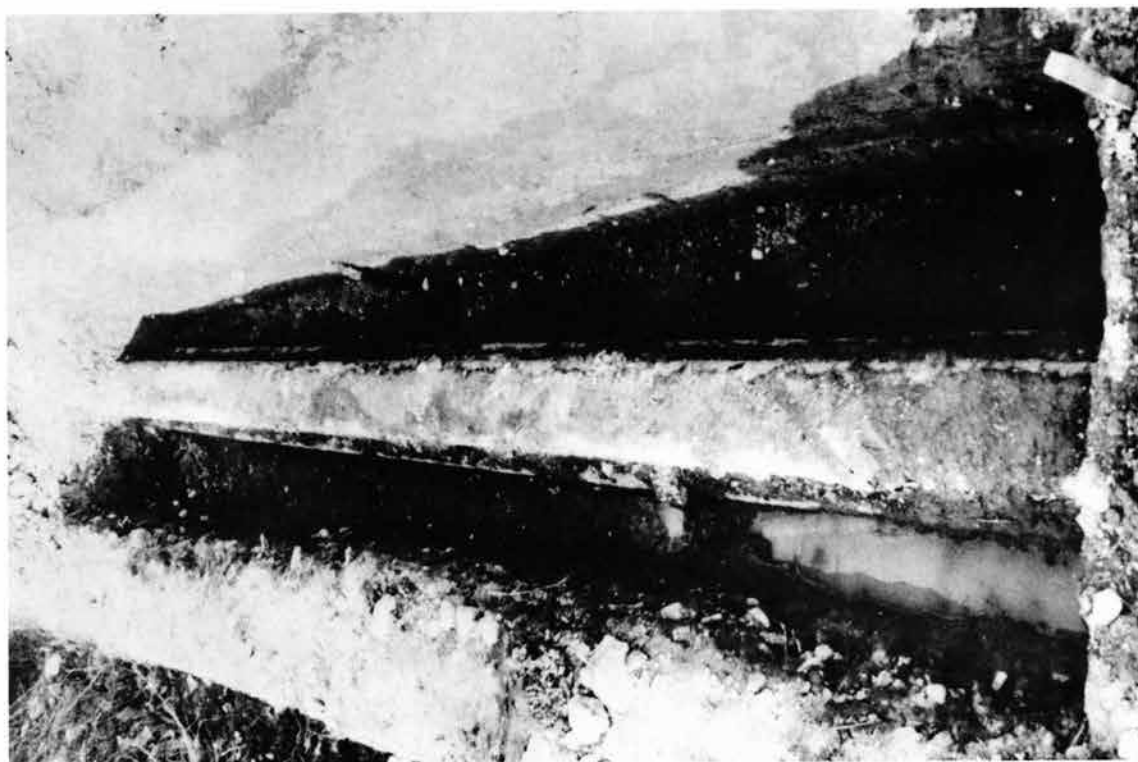


7



8

出土遺物 1・2：B地区落込み，須恵器・杯蓋 3・4：竪穴式住居跡，須恵器・杯蓋，杯身
5：竪穴式住居跡上層，土師器 6：B地区落込み，須恵器・高杯
7：B地区落込み，土師器・高杯 8：柱穴，土師器・皿



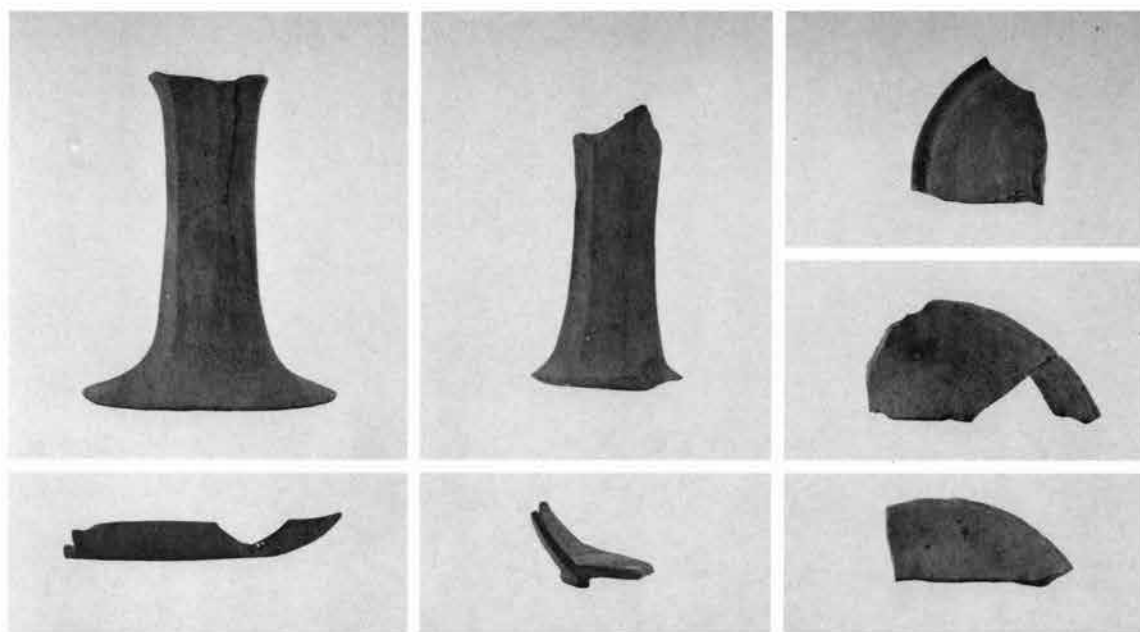
(2) 調査区No.3 (南から)



(1) 調査地 (南から)



(1) 調査区No.3断面（西から）



(2) 青灰色粘質土出土遺物

京都府遺跡調査概報 第3冊

昭和57年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075) 441-3155 (代)